

伊能忠敬研究

史料と伊能図

二〇二三年 第九十九号

伊能忠敬研究会

相
模

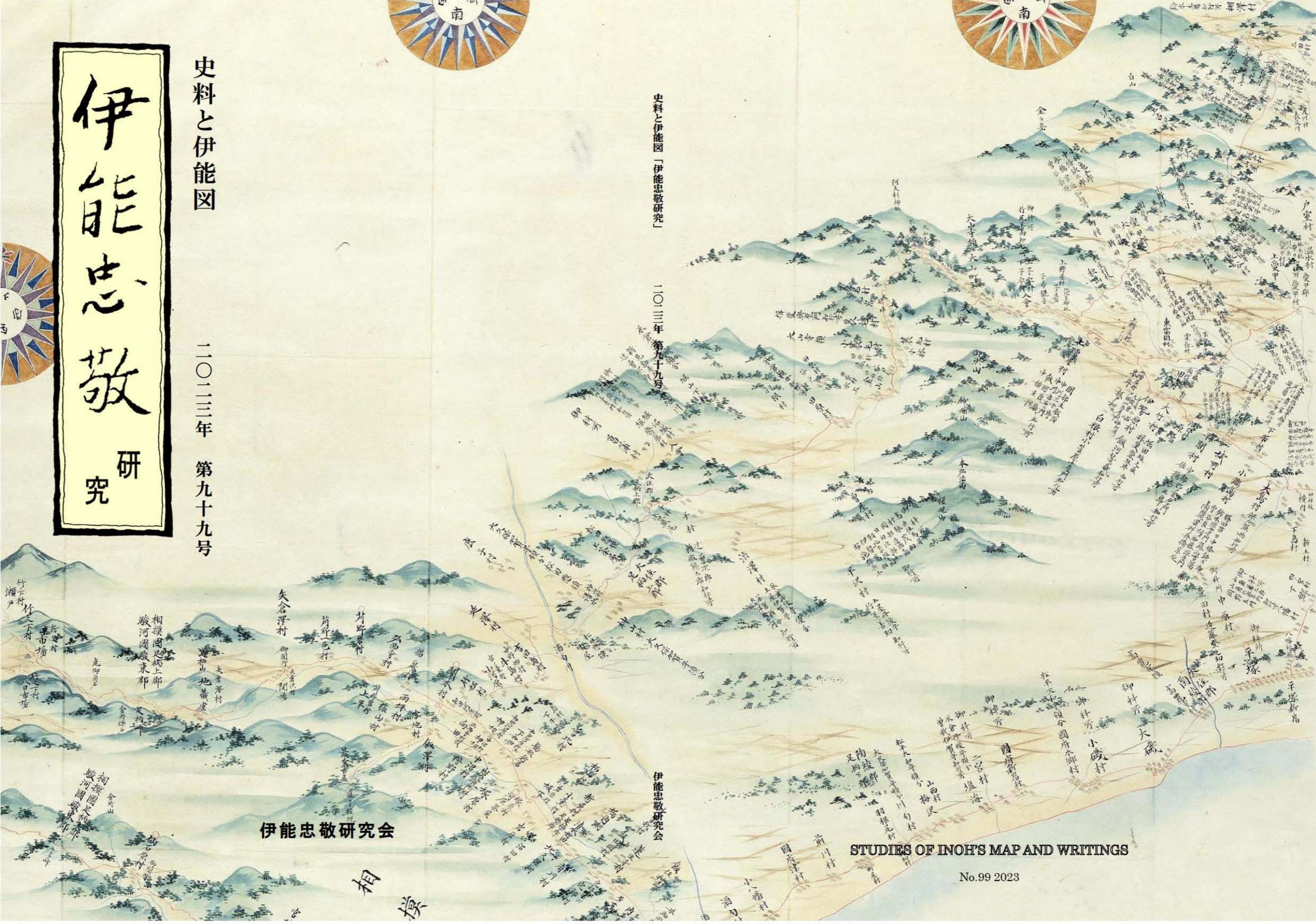
伊能忠敬研究会

史料と伊能図「伊能忠敬研究」

二〇二三年 第九十九号

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.99 2023



国立国会図書館蔵
伊能大図 第99図

(相模 伊豆 駿河)

表紙は伊能大図第99図の相模国の範囲で、丹沢山塊とその南部に平地と丘陵が広がる。丹沢山塊の裾野には、二〇一二年に海老名市から愛知県豊田市を結ぶ第二東名自動車道が開通している。

その二〇〇年前の文化八年十一月下旬から十二月初旬（一八一二年一月）に伊能隊がこの地域を測量していた。第八次の測量で、九州の二次測量に出発した直後である。藤沢宿から東海道を離れ、大山に向かい、阿夫利神社に参拝した。大山は江戸庶民が富士山と並んで訪れた山である。（大山・阿夫利神社付近の測量の詳細は、会誌76号表紙解説を参照。）その後、秦野盆地を横切り、酒匂川を渡つて、南足柄郡関本村で二手に分かれて測量した。

国宝紹介

『仏国暦象編』と『暦象編斥妄』

玉造 功

『暦象編斥妄』は忠敬が残した唯一と言つて良い論文であり、円通の著書『仏国暦象編』に対する反論である。そこで最初に『仏国暦象編』について紹介する。

円通『仏国暦象編』

国宝・典籍類一〇九、一一三

国宝「伊能忠敬関係資料」一二三四五点の内で典籍類は五二八点を占める。測量、和算、天文暦学、地誌などに関係する国宝の書籍の中で、異彩を放つのが仏教天文学書『仏国暦象編』である。

『仏国暦象編』の著者円通は忠敬より九歳年下という同時代人である。彼は七歳で出家したが十五歳の時に西洋天文学を紹介する游子六の『天經或問』で地球球体説にふれ、仏典に説かれる世界像が揺らぐことに危機感を覚え、仏典や中国の歴代正史などの天文暦学の記事を広範囲にわたり研究した。その中には明・清時代に漢訳された西洋の天文暦学書も含まれていた。

彼は須弥山を中心とする天動地平説に天体现象を位置づけようとする独自の仏教天文学を「梵暦」として体系化して、文化七年（一八一〇年）に『仏国暦象編』全五巻を刊行した。

以下、『仏国暦象編』を引用する場合は国立公文書館デジタルアーカイブによる。またダウンロードした場合のページ数を付記する。

一、『仏国暦象編』の内容

『仏国暦象編』では様々な項目を立てて、膨大な典拠を引用して西洋天文学を批判し自説の正しさを論証しようとする。

円通は暦学の起源から論じ始める。円通は、中國暦、イスラム暦、西洋暦を検討した上で、それら全ては古代インドの暦学（梵暦）に起源があるとし、梵暦こそが根源的な暦法であるとする。

西洋暦を検討する中でコペルニクスとティエコ・

プラードの説も取り上げている。図1の右側は太陽（○）を中心とするコペルニクスの地動説であり、左側はティエコ・プラードの説で、地球（四）の周りを太陽（○）と月（五）が周回し、同時に水星（三）以下の惑星が太陽を周回する折衷説となっている。

円通はこのように西洋天文学が精密な観測機器を使つていながら「異説紛々、終に一定無し」（巻二二七頁）なのは、凡愚の人間が観測結果から作つた学説（人説）は不完全なものでしかないからであり、仏陀という聖者が天眼で見通した真理（天説）こそが完全で不变であり、梵暦は天説に基づくとする。天眼でのみ見通すことが出来る須弥山世界は「數に任して測るべき者に非ず、理を推して以て窺ふべき者に非ず」（巻二二二頁）というものであり、観測結果の数値や天文学理論とは別次元のものとなる。

二、須弥山世界

円通が前提とする天動地平説では世界の中心には須弥山がある。その須弥山世界を西村玲（二〇一二）は次のように紹介する。

「虚空の上に巨大な風の輪、水の輪、金の輪が順番に重なり、その上に平らな大地がある。大地の中心には想像を絶する高山である須弥山がそびえ立ち、太陽と月と星が巡る中腹より上は、帝釈天ら神々の住處である。山頂より上にもまた、神々が住む天が二十一層に重なって、さらに聖者の住む目に見えない四つの世界がある。一方、世界の地下には、最下層の無間地獄に至るまでの八層の地獄が重なっている。須弥山は九つの山と八つの海に囲まれ、海の中には東西南北の四大陸がある。

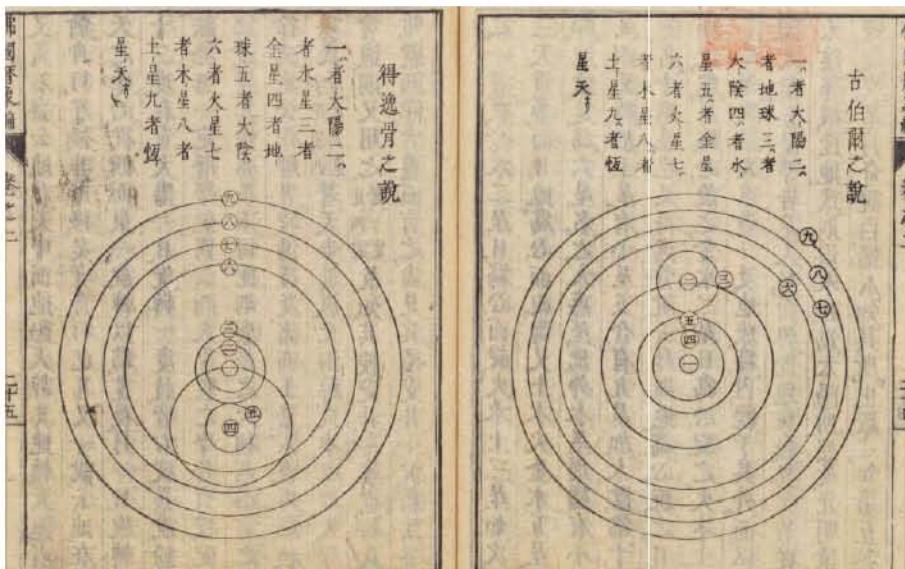


図1 『仏国暦象編』卷二 二六頁

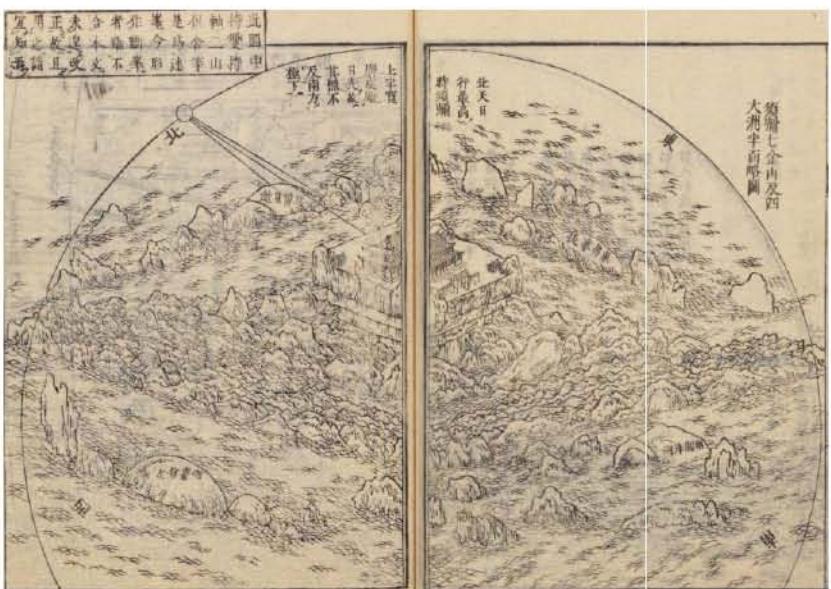


図2 『仏国暦象編』卷三 一八頁



図3 「須弥山儀」 所蔵 株式会社大橋時計店

各大陸の空は須弥山四方の山壁—北の金、東の銀、南のラピスラズリ、西の水晶—によって区切られており、私たちが住んでいる南大陸の空は、ラピスラズリの青をうつす。この世界の中で、私たちは自らの行いに応じて、地下の地獄から山上の天界まで生まれ変わり死に変わって、ほぼ永遠に輪廻している。こうした空間である須弥山世界は、時が来ると崩壊し長い時を経てまた再生する、という氣の遠くなるような永い生滅のサイクルを、永遠に繰り返している。さらに宇宙には、このよくな須弥山世界が無数にあり、…普遍なる虚空

の中で、無数の須弥山世界はそれぞれのサイクルにしたがって、生まれては滅している。」円通はこの天眼でしか見えないはずの須弥山世界を、天体现象や地理学上の知識と矛盾無く具体的に提示しようとした。それが図2である。更に弟子たちは精密な時計仕掛けで須弥山の周りを太陽と月が動く「須弥山儀」(図3)という模型を作らせ、仏教の世界像をわかりやすく説明した。東芝の創業者「からくり儀右衛門」こと田中儀右衛門が作ったものが各地に現存している。

円通の梵暦は仏教各宗派を超えて広まり、千人を超える弟子たちは「梵暦社」と称するネットワークをつくり、各地で活発な活動を行ったという。

図1、2は国立公文書館デジタルアーカイブに

捨てるのではなく、宗教的真理と科学の二元論の萌芽など様々な視点から研究が進められ、訳注も作成されているとのことである。公刊が待たれる。

【図版の出典】

- ・図1、2は国立公文書館デジタルアーカイブによる。
- ・図3の須弥山儀は株式会社大橋時計店が所蔵し、セイコーミュージアム銀座に常設展示されている。掲載にあたっては画像の提供を受けた。記して感謝申し上げる次第である。

【参考文献】

- ・岡田正彦「忘れられた『仏教天文学』—梵暦運動と『近代』」(『宗教と社会』七巻、二〇〇一年)
- ・岡田正彦「起源・本質」の探求と普遍主義のディスクール—普門円通『仏国暦象編』を読む』(『天理大学学報』五五、二〇〇三年)
- ・常塚聰「須弥山と地球—科学的宇宙論と仏教的宇宙論の接触—」(『現代と親鸞』二〇巻、二〇一〇年)
- ・西村玲「書評『忘れられた仏教天文学—19世紀の日本における仏教世界像』」(『年報日本思想史』一一号、二〇一二年)
- ・西村玲「日本における須弥山論争の展開」(『印度佛教學研究』六一巻二号、二〇一三年)
- ・宮島一彦「仏教天文学と『佛國暦象編』訳注の作成」(『大阪市立科学館研究報告』二七号、二〇一七年)
- ・渡辺敏夫『近世日本天文学史』上巻(恒星社厚生閣、一九八六年)

伊能忠敬『暦象編斥妄』

国宝・文書・記録類一八二

歴象編斥妄 全

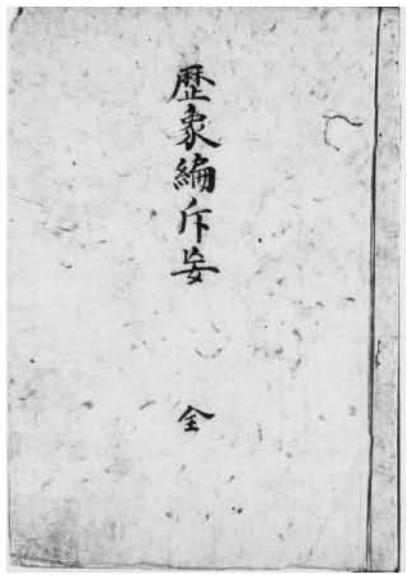


図1 国宝『暦象編斥妄』表紙

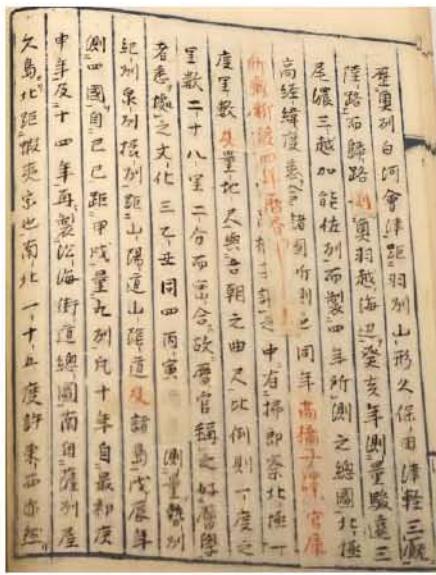


図2 国宝『暦象編斥妄』二四丁裏

一、草稿と完成稿
『暦象編斥妄』の原文は図2のように返り点や送り仮名などの訓点は施してあるが、句読を切つてない漢文で記されている。これは批判対象の円通の『仏國暦象編』にスタイルをあわせて記述したものと思われる。また紙を貼つて朱書きで修正した個所があり、草稿段階のものであることがわかる。



図3 求己堂



図4 高橋景保印



図5 求己堂

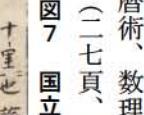


図6 国立公文書館『暦象編斥妄』一九頁

なお、草稿と完成稿では若干の異同が見られる。忠敬の最終的な考え方が反映されていることから、引用する場合は完成稿の『暦象編斥妄』によることとし、国立公文書館デジタルアーカイブからダウンロードした場合のページ数を付記する。

二、『暦象編斥妄』の立場

忠敬は円通の『仏國暦象編』の各項について全部またはその一部を抄出し、その後に一字下げて自分の見解を述べている。このような構成であるため起承転結のある体系的著作とはなっていない。

忠敬の最終的な考え方が反映されていることから、引用する場合は完成稿の『暦象編斥妄』によることとし、国立公文書館デジタルアーカイブからダウンロードした場合のページ数を付記する。

図8 国立公文書館『暦象編斥妄』一頁

『暦象編斥妄』における忠敬の基本的なスタンスは、「印度天説」の項において「暦法に拠らず、ただ仏説なるものを論ずるのみ。故に論ぜず」(一九頁、図6)と記すように、暦法に関わる分野には高橋景保の「求己堂記」という藏書印(図3)が押されており、国立国会図書館HPの電子展示会「藏書印の世界」や上原久『高橋景保の研究』の口絵9の高橋景保の藏書印と一致している。また巻末には「昌平坂」という黒印(図4)と「安政庚申」という朱印(図5)が押されている。

幕府がシーボルトから押収した国会図書館蔵の「カナ書特別小図」にも同様に「昌平坂」「安政庚申」の印記がある。これらのことから、伊能忠敬記念館所蔵の『暦象編斥妄』の草稿を完成させて高橋景保に献じたものが国立公文書館所蔵の『暦象編斥妄』であり、シーボルト事件をへて安政七年(一八六〇年)に昌平坂学問所へ移され、さらに明治政府に引き継がれていったことが推察される。

忠敬は測天量地の実務者の立場から『仏國暦象編』を批判するのであって、思想家としてではない。忠敬は測天量地の実務者の立場から『仏國暦象編』を批判するのであって、思想家としてではない。

忠敬は圓通を「博覧のみ。暦術、數理、測量を知らざる故に僻論なすなり」(二七頁、図7)と評している。圓通は仏典、漢暦について「未だ暦理、測量、布算(運算)の明証を聞かざるなり」(一一頁、図8)と指摘する。

『暦象編斥妄』における忠敬の基本的なスタンスは、「印度天説」の項において「暦法に拠らず、ただ仏説なるものを論ずるのみ。故に論ぜず」(一九頁、図6)と記すように、暦法に関わる分野には高橋景保の「求己堂記」という藏書印(図3)が押されており、国立国会図書館HPの電子展示会「藏書印の世界」や上原久『高橋景保の研究』の口絵9の高橋景保の藏書印と一致している。また巻末には「昌平坂」という黒印(図4)と「安政庚申」という朱印(図5)が押されている。

幕府がシーボルトから押収した国会図書館蔵の「カナ書特別小図」にも同様に「昌平坂」「安政庚申」の印記がある。これらのことから、伊能忠敬記念館所蔵の『暦象編斥妄』の草稿を完成させて高橋景保に献じたものが国立公文書館所蔵の『暦象編斥妄』であり、シーボルト事件をへて安政七年(一八六〇年)に昌平坂学問所へ移され、さらに明治政府に引き継がれていったことが推察される。

実務者としては、曆理に基づく推歩と実際に測量

した結果が一致することこそが自分たちの正しさを証明するものであり、梵暦にはその「明証」がないことから「僻論」と断じたのである。

忠敬は日食や月食について「曆理、布算、測量精細、故に、変異の食あること無く、微食といえども推歩測驗して両食分、時分悉く合す」(一一頁、図9)とし、予測できないような突発的な交食現象はないとする。

図9 国立公文書館『曆象編斥妄』一二頁

也和漢近來精細曆理而等閑堂故無有變異之食雖微食為難赤闕驅而兩食分時分悉合矣

月の南中についても「余、常に曆象考成後編に拠つて太陰南中を推す。月の高卑に随つて加減をなして、太陰南中時分、高度、地球半径、濛気差を得る。実測と密合なり。あに地球にあらざれば測驗を得んや」(二二頁、図10)と実測した経験にもとづいて地球球体説の正しさを説いている。

図10 国立公文書館『曆象編斥妄』二二頁

測也余常據曆象考成後編而推太陰南中隨月高卑而為加減而得之陰南中時分高度地球半徑濛氣差互美測空合也豈非此球而得測驗故

また同様に「余、毎歳數度推歩して、太陰南中を測す。時分、高度、地半径差、濛気差、悉く符合す。」(二九頁、図11)と精度を誇る。

図11 国立公文書館『曆象編斥妄』二九頁

九也余每歲數度推歩而測太陰南中時分高度地半徑差濛氣差悉符合矣前篇亦歸之

推歩と実測が密合(ぴったり合う)することで、忠敬が学んできた曆法の正確さが確認されるのである。

三、『曆象編斥妄』の限界

忠敬が議論を曆法に關わる分野に限定しようとするのは円通の須弥山世界や梵暦に対してもだけではなく、「西洋新説」に対しても同様の立場を取る。

『仏国曆象編』には、近頃の新説として「物皆引力、重力有り」(『仏国曆象編』卷一四一頁)という説を取り上げて批判した項目がある。ところが、この万有引力説に対し、忠敬は『曆象編斥妄』で「此篇、西洋新説を論じ、曆学者之急務に非ず。故に論ぜず」(二七頁、図12)と述べ、仏説に対するものと同じ対応を取り議論の対象とはしない。

図12 国立公文書館『曆象編斥妄』二七頁

論西儒謂物附地不墮太氣壓之義非規量此篇論西洋新説非曆學者之急務故不論

同様に円通の「地球を以て妄りに星となす僻説を論ず」の項目では「曆法に用いざる所、故に論ぜず」(五〇頁)と記し、「地動之説」の項目では「西洋新説奇異はこれを用いず、新説といえども推歩測驗有るはこれを採る。木星四小星の如くなり」(三二頁、図13)と記す。

図13 国立公文書館『曆象編斥妄』三二頁

星之非西洋新説奇異者不聞之雖新説有推步測驗者採之如木星四小星也

このように地動説については「西洋新説奇異」として用いないが、「木星四小星」の新説は推歩測驗が有るので採用したという。「木星四小星」の新説については「近來新渡の西洋書、木星の四小星と木星と凌犯の法有り。毎月數十次これを測するに、推歩合す」(一〇頁、図14)と高く評価している。これは木星の四衛星の一つが木星の影に入り見えなくなる現象で、経度を測るために第五次測

図14 国立公文書館『曆象編斥妄』一〇頁

測唯以名目言之寺支那西洋大異也近來新渡西洋書有木星之四小星與木星凌犯法每月數十次測之推步合矣

忠敬にとって「天文曆学」は曆法のための天文学であり、「測天量地」は「量地」のための「測天」である。「西洋新説」に対する関心もその範囲内にとどまる。万有引力説や地動説といった「新説奇異」よりも、木星四小星の凌犯現象の方が忠敬にとっては経度測定のための「急務」であった。

量以降は各地で観測している。

忠敬にとって「天文曆学」は曆法のための天文学であり、「測天量地」は「量地」のための「測天」である。「西洋新説」に対する関心もその範囲内にとどまる。万有引力説や地動説といった「新説奇異」よりも、木星四小星の凌犯現象の方が忠敬にとっては経度測定のための「急務」であった。

四、地動説をめぐつて

地動説などに對して「西洋新説奇異はこれを用いず」という姿勢を取つたことについては、忠敬

というよりも當時の幕府天文方の限界というべきであろう。地動説の伝来経路、地動説と曆算、幕府天文方の性格の三点について検討してみたい。

伝来ルートの問題

地動説が日本に本格的に紹介されたのは寛政の改暦と同じ頃であつたが、紹介したのは長崎のオランダ通詞たちであつた。本木良永が初めてコペルニクスの地動説を紹介し、弟子の志筑忠雄が地動説やニュートンの引力説を本格的に研究し世に広めた。

一方、『曆象編斥妄』で忠敬は「恒星を太陽と為すの異説は崇禎曆書、曆象考成、儀象考成等に記せざる所なり、故に論ぜず」(五〇頁)と述べ、忠敬が高橋至時から学んできた漢訳西洋曆書に記載されていないことが議論の対象としない理由とされている。

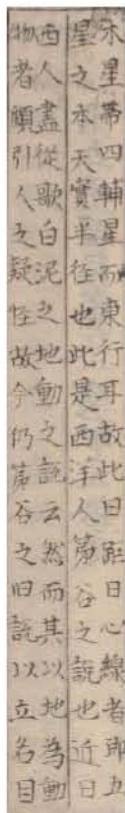


図 15 『新修五星法及図説』二二丁表

天文方の立場

もつとも、高橋至時が地動説などについて無関心であつたわけではない。嘉数次人（一九八六年、

合致すれば根拠とする暦理が天動説であれ地動説であれ一向に差し支えないという立場で、天文方は地動説に立ち入つてはいないとする。

天文方の本務は暦を作ることである。国立天文台の「暦」によれば、コペルニクスの体系もチコの体系も、「年周光行差や年周視差がなければ数学的に両者はまったく同義」であり、暦の計算にあたつては天動説も地動説もさしたる違いはないという。また、渡辺敏夫（一九八六年）によると、麻田派の暦学者にとって、天体现象と推算が合致すれば根拠とする暦理が天動説であれ地動説ないだろうか。

地動説を伝えたオランダ通詞は長崎奉行所の御用を務める地役人ではあるが幕臣ではない。志筑忠雄は通詞を引退した後であり、思想家の山片蟠桃は大阪の両替商升屋の番頭、三浦梅園は豊後の医師、司馬江漢は画家であり、幕臣はいない。

幕府天文方は科学者であると同時に、「正朔を奉ずる」という言葉が示すように、暦の編纂は支配の正統性のシンボルに関わるものであった。

明朝末期に中国での布教を始めたイエズス会の宣教師は清王朝でも学術、芸術、軍事技術等で皇帝に奉仕した。その一つが天文暦学であり、アダム・シャーレ（漢名は湯若望）、フェルビースト（漢名は南懷仁）、ケーゲラー（漢名は戴進賢）は北京の欽天監監正（国立天文台長）として修暦事業にあたつた。彼らは西洋天文学書を『曆象考成』上編や後編などとして漢文に翻訳し、それが日本に伝えられ、忠敬が学ぶことになった。ただしそれはローマ・カトリック教会の教義に適合する範囲のものが紹介されたのであり、天動説と地動説を折衷するチコ・ブラー工説が限界であった。

暦算にとつてはどちらでも良かった

天文方の本務は暦を作ることである。国立天文台の「暦」によれば、コペルニクスの体系もチコの体系も、「年周光行差や年周視差がなければ数学的に両者はまったく同義」であり、暦の計算にあたつては天動説も地動説もさしたる違いはないという。また、渡辺敏夫（一九八六年）によると、麻田派の暦学者にとって、天体现象と推算が合致すれば根拠とする暦理が天動説であれ地動説であれ一向に差し支えないという立場で、天文方は地動説に立ち入つてはいないとする。

（二〇一六年）によると、高橋至時は火星や水星などの五惑星の軌道を研究する五星法研究では地動説を採用できるレベルにまで達していた可能性が高いとする。その一方で、高橋至時は地動説の公的扱いについてはきわめて慎重であった。『新修五星法及図説』（国立天文台所蔵、新日本古典籍総合データベースで公開）は高橋至時の自筆の第二稿で享和三年（一八〇三年）の執筆である。そこには「近日、西人ことごとく歌白泥（コペルニクス）の地動の説に従う」という。しかども、その地を以て動くものと為すは、すこぶる人の疑怪を引く。故に今は第谷（チコ・ブラー工）の旧説により以て名目を立つ」（図 15、新日本古典籍総合データベースでダウンロードした場合は二四番目の画像）と記し、「今は」と留保しつつも「旧説」に従うとしている。

振り返れば、至時は天文生という立場で陰陽頭の土御門泰宗により『暦法新書』の校正を受け、朝廷に奏上されて『寛政暦』として改暦の宣下がなされている。幕府天文方として地動説を公的に認めることは多方面に「奇怪」をまねき、様々な軋轢を生じかねないということを危惧したのではないだろうか。

『暦象編斥妄』は仏教天文学に対する反駁書であり、読みやすいものでも面白いものでもない。ただ忠敬が実測経験を述べた部分は興味深い。

忠敬の足跡（その一）

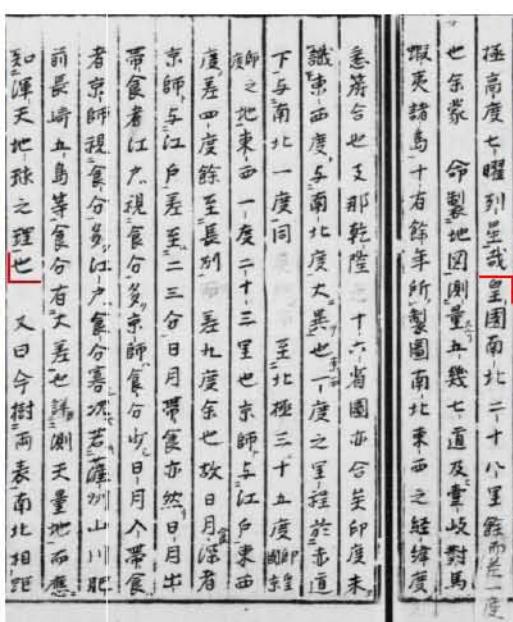


図 16 国宝『暦象編斥妄』二〇丁表・二一丁裏

図 17 国立公文書館蔵『暦象編斥妄』二二頁

『曆象編斥妄』(一一一頁)の書き下し文

* 国立公文書館所蔵の『曆象編斥妄』による。

※(一) 内は割注の部分である。
皇国南北二十八里二分にて差一度なり。余、命をこうむりて、地図を製し、五畿七道及び壹岐、対馬、蝦夷を測量すること十有余年。製するところの図、南北、東西の経緯度、ことごとく符合なり。支那乾隆の十六省図また合う。印度、未だ東西度と南北度と大いに異なるを識らざるなり。東西一度の里程、赤道下において南北一度と同じ。

北極高三十五度(則ち皇国京師の度)地に至り、東西一度二十三里なり。京師と江戸と東西度の差、四度余、長州に至り差九度余なり。故に日月食、深くは京師と江戸と差二三分に至る。日月帶食また然り。日月出帶食は江戸食分を見るに多く、京師は食分少なし。日月入帶食は京師食分を見るに多く、江戸食分すくなし。いわんや薩州山川、肥前長崎、五島などのごとき、食分大差有るなり。測天量地詳らかにして、まさに渾天地球の理を知るべきなり。

※「乾隆の十六省図」は不詳である。経緯度が合つたという記述から見ると、康熙帝の命を受けたイエズス会士による実測図として知られる『皇輿全覽図』か、それを乾隆帝の命により新疆を加えてブノワが改訂した『乾隆十三排図』の系統の地図のことであろうか。

* 草稿と完成稿の主な異同

・草稿一行目の「二十八里餘」を「二十八里二分」に修正

・草稿三行目の「蝦夷諸島」を「蝦夷」に修正。
・草稿六行目の「北極二五度」を「北極高三五度」に修正。

忠敬の足跡（その二）

図 18 国宝『曆象編斥妄』二三丁裏～二五丁表

図 19 国立公文書館蔵『曆象編斥妄』二四・二五頁

二五丁表	二四丁裏	二四丁表	二三丁裏
余寛政丙辰(1791)隨日官高橋子而學推步曆理 測量移居深川里江町立景表用子午線象限儀 牽拉球儀測量七曜列星歷年專居地距曆局南 北一里許晉局者北極高三十五度四十二分深 川者三十度四十分半北極差一分半也周詮 御量深川距曆局所諾而欲窮告朝南北一度之 里數高橋子曰可也然行路少極差小不足為北 極一度之法應有候時也其後寛政庚申年蒙 命測蝦夷地歸路測真列道以無後命而不得 唯某古位以是制之半然後每復測北極萬 度故粗得一度之里數一望孚和辛酉正蒙命 自三列歷相測武別兩總列旁列常列距真列三 三厥盡用大小羅誠以間棹間繩一察方位度以子 午線象限儀牽拉球儀測量七曜列星經緯得北極高度 三列距真南北差七度許製記圖比例而南北 一度為二十八里二分又望壬戌年測千住驛 歷里列白河會津距羽別山形久保田津輕三縣 陸路而歸路測真羽越海四榮支年測量駿遠三 尾懶三越加能佐列而製四年所測之總圖北極 高經緯度悉合諸國所測也同年高橋子撰宮庫 相測新渡西洋曆書其中右拂即察北極一度 度軍數及量地尺與吉朝之曲又比例則一度之 里數二十八里二分而密合故晉官稱之好晉學 者悉據之文化三乙丑同四丙寅年測量駿遠 縣里列歷山陽道山陰道及諸島戊辰年測西國 則四國自己已距甲戌量九列丸十年自嘉和庚年及 中年及十四年再製公海街道總國南自瀬別屋 文化十三丙子年蒙命製江戶國前測 深川居地并晉局之北極差為比例復合應奉 澤天地球之妙矣			

二五丁表

二四丁裏

二四丁表

二三丁裏

余寛政丙辰(1791)隨日官高橋子而學推步曆理 測量移居深川里江町立景表用子午線象限儀 牽拉球儀測量七曜列星歷年專居地距曆局南 北一里許晉局者北極高三十五度四十二分深 川者三十度四十分半北極差一分半也周詮 御量深川距曆局所諾而欲窮告朝南北一度之 里數高橋子曰可也然行路少極差小不足為北 極一度之法應有候時也其後寛政庚申年蒙 命測蝦夷地歸路測真列道以無後命而不得 唯某古位以是制之半然後每復測北極萬 度故粗得一度之里數一望孚和辛酉正蒙命 自三列歷相測武別兩總列旁列常列距真列三 三厥盡用大小羅誠以間棹間繩一察方位度以子 午線象限儀牽拉球儀測量七曜列星經緯得北極高度 三列距真南北差七度許製記圖比例而南北 一度為二十八里二分又望壬戌年測千住驛 歷里列白河會津距羽別山形久保田津輕三縣 陸路而歸路測真羽越海四榮支年測量駿遠三 尾懶三越加能佐列而製四年所測之總圖北極 高經緯度悉合諸國所測也同年高橋子撰宮庫 相測新渡西洋曆書其中右拂即察北極一度 度軍數及量地尺與吉朝之曲又比例則一度之 里數二十八里二分而密合故晉官稱之好晉學 者悉據之文化三乙丑同四丙寅年測量駿遠 縣里列歷山陽道山陰道及諸島戊辰年測西國 則四國自己已距甲戌量九列丸十年自嘉和庚年及 中年及十四年再製公海街道總國南自瀬別屋 文化十三丙子年蒙命製江戶國前測 深川居地并晉局之北極差為比例復合應奉 澤天地球之妙矣

『暦象編斥妄』(二四・二五頁)の書き下し文

余、寛政丙辰年、初めて日官高橋子にまみえ、居を深川黒江町に移し、推歩、曆理、測量を学ぶ。居を深川黒江町に移し、景表を立て、子午線、象限儀、垂搖球儀を用い、七曜列星を測量すること暦年。居地、暦局を距てること南北一里ばかり。暦局は北極高三十五度四十二分、深川は三十五度四十〇分半、北極差一分半なり。これにより、深川より暦局にいたる行路を測量し、吾朝南北緯度一度の里数を窮めんと欲す。高橋子曰く、可なり。しかれども行路少なく極差小なり。北極一度の法を為すに足らず。まさに時をまつ有るべきなり。

その後、寛政庚申年、命をこうむり蝦夷地を測る。帰路、奥州街道を測る。後命無きを以て精測するを得ず。ただ方位を察し足を以てこれを歩するのみ。然れども毎夜北極高度を測り、故にほぼ一度の里数を得る。翌享和辛酉再び命をこうむり、豆州より相州、武州、西總州、房州、常州をへて、奥州三厩にいたる。昼は大小羅針を用い、間竿、間繩を以て方位を察す。夜は子午線、象限儀、垂搖球儀を以て列星の經緯を測り、北極高度を得る。豆州より奥北にいたる南北差七度ばかり、地図を製し比例して南北一度二十八里二分と為す。(二分は七町一十二間なり) また翌壬戌年、千住駅より奥州白河、会津をへて、羽州山形、久保田、津軽、三厩にいたる陸路を測りて、帰路、奥羽越の海浜を測る。癸亥年、駿遠、三尾濃、三越、加能佐州を測量し、四年測るところの総図を製す。北極高、經緯度ことごとく諸国測るところ合うなり。同年、高橋子、官庫所蔵新渡り西洋曆書を訳す。その中に拂郎察北極一度里数及び量地尺有り。吾朝の曲尺と比例して、則ち一度の里数二十八里二分にし

て密合す。故に暦官これを称え、歴学を好む者、ことごとくこれに拠る。文化三乙丑、同四丙寅、

勢州、紀州、泉州、攝州を測量して、山陽道、山陰道、及び諸島にいたる。戊辰年、四国を測る。

己巳より甲戌にいたり、九州を量ることおよそ十年。最初庚申年より十四年に及び、再び日本國図を製す。南は薩州屋久島より北は蝦夷宗にいたるなり。南北一十五度ばかり、東西また然り。文化十三丙子の年、命をこうむつて江戸図を製す。前

測深川居地と暦局の北極差と比例を為すに復た合す。まさに渾天地球の妙を察すべし。

・国宝『暦象編斥妄』二四丁表五行目の修正

図20 二四丁表五行目の貼り紙を捲り上げた状態

草稿の段階で「応レ待天地之時理也」に紙を貼り、「応レ有レ俟レ時也」と修正している。

※ 草稿の段階で「無免許」に紙を貼り、「無後命」と修正している。

・国宝『暦象編斥妄』二四丁表六行目の修正

図22 二四丁表六行目の貼り紙を捲り上げた状態

草稿の段階で「以二歩間量之」に紙を貼り、「以レ足歩レ之」と修正している。

・国宝『暦象編斥妄』二四丁裏四、五行目の修正

図23 二四丁裏四、五行目の貼り紙を捲り上げた状態

草稿の段階で「高経緯度志乞諸」に紙を貼り、「高橋作左衛門儀、御用に付罷下り候節より、門弟に罷成、天文曆学測量出情仕候。」と記す。

入門時期については未だに決定的な根拠はないが、寛政七年が定説化している。

※ 「以足歩之」の「歩」は推し量るの意味。推歩。

※ 「三越」は越前、越中、越後の総称。

※ 「拂郎察」はフランスのこと。

※ 「蝦夷宗」の「宗」は「おおもと」の意味か。

箱館などの南部だけでなく蝦夷地の中心部まで測量したということか。

※ 「文化十三年：製江戸図」と記されていることから、文化一三年閏八月の第二次江戸府内測量以降に『暦象編斥妄』は著述された。

※ 草稿の段階での主な修正箇所

・国宝『暦象編斥妄』二四丁表五行目の修正

図21 二四丁表五行目の貼り紙を捲り上げた状態

草稿の段階で「応レ待天地之時理也」に紙を貼り、「応レ有レ俟レ時也」と修正している。

※ 草稿の段階で「無免許」に紙を貼り、「無後命」と修正している。

・国宝『暦象編斥妄』二四丁表六行目の修正

図22 二四丁表六行目の貼り紙を捲り上げた状態

草稿の段階で「以二歩間量之」に紙を貼り、「以レ足歩レ之」と修正している。

・国宝『暦象編斥妄』二四丁裏四、五行目の修正

図23 二四丁裏四、五行目の貼り紙を捲り上げた状態

草稿の段階で「高経緯度志乞諸」に紙を貼り、「高橋作左衛門儀、御用に付罷下り候節より、門弟に罷成、天文曆学測量出情仕候。」と記す。

入門時期については未だに決定的な根拠はないが、寛政七年が定説化している。

※ 「以足歩之」の「歩」は推し量るの意味。推歩。

※ 「三越」は越前、越中、越後の総称。

※ 「拂郎察」はフランスのこと。

※ 「蝦夷宗」の「宗」は「おおもと」の意味か。

箱館などの南部だけでなく蝦夷地の中心部まで測量したということか。

※ 「文化十三年：製江戸図」と記されていることから、文化一三年閏八月の第二次江戸府内測量以降に『暦象編斥妄』は著述された。

※ 草稿と元成稿との主な異同

- 草稿の国宝『曆象編斥妄』二四丁表一二行目の「二十八里一分」に完成稿では「二分は七町一十二間なり」と割注を加えている。
- 草稿の国宝『曆象編斥妄』二四丁裏一行目の「沿海街道總図」については完成稿では「日本國図」と改められている。

忠敬の足跡（その三）

図 25 国宝『曆象編斥妄』五三丁表・五三丁裏

又近者右ニス吾邦至法測北度者曰北極半地ニ
十八里四十步而差一度故地球周一百
五十二里者即吾所測驗也余業命為測量也
十餘年盡量里程方位夜測北極高度阿別屋久
島延袤南北十五度奧州距肥前牛島東西亦
十五六度なり。測量終わりて沿海地図を製す。經
緯度ことごとく符合す。また吾が門生間宮林藏北
蝦夷を測り、満州にいたる。北極高五十度余りな
り。即ち支那乾隆十六省の国図と合す。測量に拠
らずして何ぞ万邦廣狹の論を為すや。

※ 草稿と完成稿との主な異同

- 草稿の国宝『曆象編斥妄』五三丁裏二行目の「北極出地」を「方位」に修正している。
- 草稿の国宝『曆象編斥妄』五三丁裏四行目の「測驗」を「測量」に修正している。

「忠敬の足跡」として『曆象編斥妄』から三ヶ所を紹介したが、これ以外にも垂搖球儀の使用について説明した部分もある。国立公文書館蔵の『曆象編斥妄』で公開された画像では三一頁である。

六、最後に

国宝紹介と題したもの、結果的に国立公文書館蔵の『曆象編斥妄』を多く使用する結果になつた。伊能忠敬記念館蔵の国宝の『曆象編斥妄』は忠敬による推敲経過が判明し興味深い。しかし忠敬の最終的な考え方に基づく完成稿の『曆象編斥

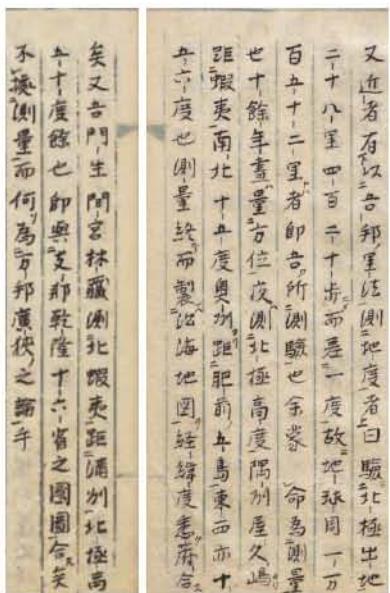


図 26 国立公文書館蔵『曆象編斥妄』五三・五四頁

『曆象編斥妄』(五三・五四頁) の書き下し文

「妄」はより重要であり、デジタルコレクションとして公開されていることは有り難い限りである。

【参考文献】

- 池内了『江戸の宇宙論』(集英社、一〇二二年)
- 上原久『高橋景保の研究』(講談社、一九七七年)
- 嘉数次人『高橋至時と地動説』(『科学史研究』五〇巻二五九号、二〇一一年)
- 嘉数次人『天文学者たちの江戸時代』(筑摩書房、ちくま新書、一〇一六年)
- 小林龍彦『漢訳西洋暦算書と近世日本の暦算家』(『天文月報』九八巻六号、二〇〇五年)
- 佐久間達夫『新説伊能忠敬』(『伊能忠敬測量日記別巻』大空社、一九八八年)
- 中村士『江戸の天文学者 星空を翔る』(技術評論社、二〇〇八年)
- 森和也『神道・儒教・仏教』(筑摩書房、ちくま新書、二〇一八年)
- 矢沢利彦『西洋学術と芸術の東伝』(『東西文明の交流 第五卷 西欧文明と東アジア』、平凡社、一九七一年)
- 吉田忠『高橋至時と西洋天文学』(『天文月報』九八巻五号、二〇〇五年)
- 【図版の出典】
- 図 1、2、16、18、20、21、22、23、24、25 は伊能忠敬記念館所蔵。無断流用禁止。
- 図 3、4、5、6、7、8、9、10、11、12、13、14、17、19、26 は国立公文書館デジタルアーカイブによる。
- 図 15 は国立天文台所蔵。「新日本古典籍総合データベース」で公開されている。

伊能忠敬の未公表書簡（四）

前田 幸子

はじめに

『三文会誌』所載の忠敬書簡紹介の第四回目となる今回は、第五次測量（西日本）の際の書簡を取り上げる。第五次測量は文化二年（一八〇五）二月二十五日から文化三年（一八〇六）十一月十五日までの一年八か月余、六四〇日間をかけて行われた。この第五次は忠敬が幕臣となり、事業の性格も伊能忠敬の個人事業から幕府事業へと転換した特筆すべき回として知られる。測量隊が天文方下役と内弟子との混成隊となつた結果、隊内に軋轢が生じて途中で帰府する者や測量先で問題行動を起こす者がいるなど混乱した。かつ西国測量は海岸線が予想以上に複雑で計画遂行が到底困難であることが判明して困難な測量行となつた。下記表の第十四、第二十一書簡はそれらの事情を反映したものとしてすでによく知られている。今回は第八書簡と第十六書簡を紹介したい。

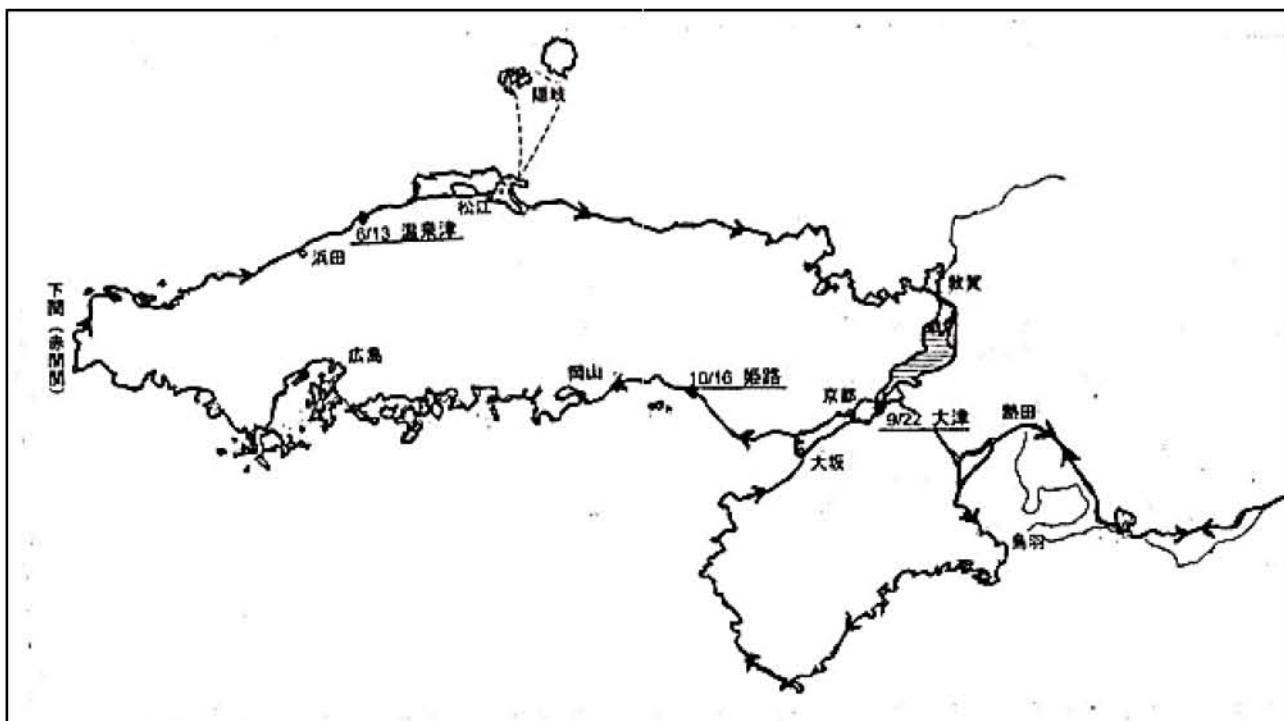
第十六号書簡は個人事業だった時期にはなかつた誓約書が登場し、幕臣として職務遂行にあたつての心得が言い渡されている。第八書簡は石見国温泉津から為替金を受領したこと報告してきた書簡で、測量中における金銭の授受を述べた珍しい内容である。

今回は忠敬が武士となつて下役を率いた初めての測量行であると同時に、高橋景保にともに父の跡を継ぎ二十一歳の若さで責任者となつての初仕事であつたことにも注目したい。

〈第五次測量時の書簡〉

書簡番号	書簡認年月日	書簡認地	書簡発送日等 測量日記記述日	主な内容	備考
8	文化3年6月13日	温泉津	文化3年6月13日	手当金を為替で受領	「御用日記」「未公開書簡集」
14	文化2年9月22日	大津宿	文化2年9月22日	測量隊員増員願	
16	文化2年2月	出立前		測量行の心得請書	
17	文化2年10月16日	姫路城下	文化2年10月17日	坂部の内室安産	
21	文化3年9月15日	(江戸)	(高橋作左衛門より)	不行跡への注意	「御用日記」

※第14書簡、第21書簡は会誌32号に記述あり



第十六 年不詳

此度私共西國筋海邊測量爲御用被差遣候に付右
御用中先々に於て御威光がましき義は勿論諸事
目立不申候様相謹み入念御用向無滯相勤歸府可
仕候様今二十四日別段以御内慮堀田攝津守殿被
仰渡候旨猶又被仰渡難有奉畏候以上

丑二月

坂部貞兵衛 印
市野 金助 印
高橋 善助 印
伊能勘解由 印

高橋作左衛門殿

當年勤方之儀是迄とは違御家人の例に被仰付候
故其格により御扶持方竝御手當等結構被下置且
又道中御證文等被下置少しも差支無之様被仰付
候儀に候得は別て入念測量有之地圖仕立所々北
極出地竝全體道路里數等可被書出候事

一往來道筋へは御勘定奉行より達有之候答候事

一此度御用の序を以西國筋におるて五星測量可

有之旨先達て申渡置候右御用其外御用向に付自

分えも差越候書狀の義は先年の通可被心得候事

但御代官竝地頭の義は所々より人少にて書狀

達し方等の義難澁の様子も可有之候左様の節

は差計ひ領主の所迄持參相願候様にも可被致

候何れいかつかましき儀無之様可被申談候

第十六 年不詳

このたび私どもは西國筋の海邊測量御用として差し遣わされましたので、右の御用
中の先々において御威光を笠に着て威張ることは勿論、諸事目立たないよう慎み、
入念に御用を滞りなく務めて帰府するようとに、今月二十四日に堀田攝津守様が別
段の御内慮を以て申し渡された旨について、なおまた（高橋作左衛門様から）申し
渡されましたこと、有難くつつしんで承ります。以上

丑二月

坂部貞兵衛 印
市野 金助 印
高橋 善助 印
伊能勘解由 印

高橋作左衛門殿

（忠敬の）當年勤務についてはこれまでとは違い、御家人としての待遇を仰せつ
けられたのでその格式にしたがつて俸祿や手当等を十分に支給し、かつまた道中御
証文等も下付して少しも職務に差し支えがないようと命令があつたので、とりわけ
入念に測量して地図を仕立て、各地で緯度ならびに全道程の里数等を書き出すこと。
一、測量隊が通行する道筋へは勘定奉行から指示命令のお達しがあるはずのこと。
一、このたびの測量御用のついでに西國筋で五星測量をするようとに、先日申し渡
しておいた。その御用およびその他の御用向きについて自分（景保）へ差出す書狀
の取扱いについては先年の通りと心得るべきこと。但し代官ならびに地頭（知行持
ちの旗本）については、ところにより人員不足で書狀の送達について難渋する様子
もあるので、そのような場合は、適宜取計らつて当地の領主（大名）のところまで
持参願つて（大名便で送達してもらうようにして）もよろしい。いずれ、厳つがま
しい振る舞いがないよう、（隊員たちに）言い聞かせること。

一自分より御用向に付申遣度儀有之書状差遣候
儀は御勘定奉行より其許通行可有之領主地頭え
相達候筈に候間相達次第其領主地頭え請取書可
被差出候事

一被召連候弟子小者等都ていかつかましき儀無
之様精々申含可被置候事

一此度御用の途中其許竝善助下役の内萬一病氣
差發療養相加候ても御用向難相勤體有之候節は
其趣自分迄届書差出置右病氣の者勝手次第歸府
可有之候且萬々一病氣差重り相果候はば其所に
取置可被申候但右途中にて病氣快氣候はば其段
又々届書差出置直様御用先え出立可有之候事

右爲心得申達置候且此度被下候御證文大切に可
被相守事第一の事に候以上

丑二月

右之通以御口達書被仰渡奉承知候以上

文化二丑年二月

伊能勘解由

高橋作左衛門殿

※〔〕内は原文の割注、〔〕は筆者の注である。

一、自分（景保）から御用向に連絡したいことがあつて書状を
差出す場合は、勘定奉行からそなたが測量で通行する土地の領主や地頭に届くはず
なので、（書状が）届いたらすぐに領主や地頭に請取書を差し出すこと。
一、召し連れている弟子や小者らは全ていかつがましい（えらぶって猛々しい）振
舞いがないよう、よく言い含めておくこと。

一、このたびの御用の途中で、そなた（忠敬）、善助、下役の内の誰かが、万一病
気になり、療養してもご用向きを勤めるのが難しい容態になつた場合は、その事情
を私あてに届書で出しておき、病人本人は自分の都合がよい方法で帰府すること。
かつ万が一、病気が重くなつて死亡した場合には、現地に埋葬されるべきこと。但
し、途中で病気が快癒したら、その際もまた届書を差出しておき、すぐさま御用先
へ出立すべきこと。

以上、心得として申達しておく。かつ、このたび下げ渡された御証文を大切に守る
べきことは（いうまでもなく）、第一のことである。以上

丑二月
右の通り、御口達書を以つて申し渡されたことについて承知いたしました。以上

文化二丑年二月

伊能勘解由

高橋作左衛門殿

書簡の内容

【第十六書簡】誓約書・口達書・請書

書簡の概要

この書簡は第五次測量に出立前文化二年（一八〇五）二月に天文方高橋作左衛門景保と配下の隊員四名との間で取り交わされた二通の書類を並記したものである。

「此度私共」で始まる前段の一通は天文方高橋作左衛門（景保）からの申し渡しに対する配下の隊員四名の誓約書であり、後段は忠敬あて景保の「口達書」と、それに対する忠敬の「請書」である。いずれも幕府の「仰せ渡し（辞令）」に応えたものである。

なお、学士院本ではこの書簡の前段と後段の順番が逆になつてゐる。

誓約書

「年不詳」とあるが、文中に「西国筋海邊測量御用」「丑二月」の文言から第五次測量の際に差し出されたものと考えられる。今次の測量に当初から参加した天文方下役の市野金助、坂部貞兵衛、および景保の弟である高橋善助、伊能勘解由の四人が各々押印し連名で提出している。内容は「御威光がましき儀がないよう」「諸事目立たないよう」「謹んで入念に御用をつとめること」等、測量御用中の勤務心得で、測量事業の総括責任者である若年寄堀田摶津守の内意を景保が伝達したものであるとしている。署名した四人のうち三人は天文方所属だが「部屋住み」身分だった高橋善助がどのような立場で参加したかは不明である。摶津守が内々に参加を認めたという意味が込められ

ているとも推測される一通である。

口達書・請書 「当年勤方之儀」で始まる一通は、上司である景保から忠敬に渡された「口達書」と、それに対する忠敬の請書である。

口達書の内容 冒頭で今回の勤務のこれまでとの違いが述べられ、その後に測量事業遂行についての指示が箇条書きで列挙されている。これまでの測量は忠敬の個人事業という位置づけだったので、手当受領書、請書、出立届といふ三種の書類を差し出していたが、今回は忠敬が幕臣となり、御扶持（俸禄）や道中証文が当然に支給されるようになつたので、手当受領書の提出は不要となり、出立届は所属である小普請組に提出することとなつた。以下、口達書の項目である。

①測量先に対しても、勘定奉行から測量協力について指示・命令の通達があるはずのこと。
②今次の測量御用のついでに五星（水星・金星・火星・木星・土星の五惑星）測量をすること。
私（景保）あての書状は先年の通りと心得よ。但し幕府の直轄地で人員不足で難渋するところは、領主（大名）へ託すこと。
③景保から御用のことで書状を出す場合は、勘定奉行から領主や地頭に届くはずなので、届いたら領主や地頭へ請取書を差し出すこと。
④引き連れる弟子や小者らも全て厳がましい行為がないよう言い聞かせること。
⑤測量行の途中で病気になつた場合、死亡した場合の処置についてはこの心得を守ること。

以上が高橋景保からの「口達書」の内容である。①から⑤は第二次、第三次、第四次測量の出立時の「心得」と同様の内容である。④の内弟子や小者たちに対する注意事項は忠敬の師匠としての立場に対するものである。門弟たちは幕臣ではないので、その統率は忠敬の責任下にある。⑤の項目では「病氣の者勝手次第帰府可有之候」「相果候はば其所に取置可被申候」としてい。実際に市野金助は病氣を理由に大坂から帰府してしまつた。また五島で病没した坂部貞兵衛はこの文言の通り現地に葬られ、今もそこに墓があることは周知のとおりである。忠敬はこれらの内容について、「承知した」旨の請書を差し出している。

第十六書簡の前段は幕臣としての忠敬の誓約書であり、後段の口達書・請書は天文方下役を統率しながら、一方で内弟子たちを引率する一門の師匠でもあつた忠敬の立場が表われている。伊能測量隊が幕臣と内弟子との混成隊だつたこと、忠敬がこの二つの役目を兼任していたことは最後まで変わらなかつた。

第八

丙寅六月十三日石州 郡温泉津ヨリ七
月二十日御代官上野四郎三郎か
外ニ帳面一冊入御手當金請取書付候也
伊能錄ト綴込出

石州濱田幸便に昨十日愚簡差上候間此度は石州
大森御代官所より爲替金落手仕候義許申上候
一、濱田より申上候通下拙瘧疾にて大森へ罷越

候儀相成兼候間坂部之内弟子共相添大森御役所

え遣し可申奉存候處海邊に田村

則御料所大森詰上野四郎三郎御代官所

大森御代官手代石井勇八と申者御爲替金持參にて大森え御越に不及候て請取書貴君の御印鑑迄持參に付御爲替金百九拾兩貳歩慥に請取申候御安意被遊可被下候隱岐の渡海を相急ぎ病人有之候ても三年分に仕出精仕候處大森迄罷越不申候儀は大仕合に御座候只右爲替金の内え丁銀五拾兩目方三貫三百匁程相かゝり候に難儀仕候丁銀の儀も種々かけ合當時代官所に無之旨無據申候間不得止事請取申候

一、御手當金請取并隼太顯二御手當金請取兩通共に此度大森御代官所幸便に差上申候御落手被下度候

一、下拙瘧疾今以落不申候て難儀仕候是より一同測量出精候はゞ當月下旬にて隱岐渡海仕雲州三保へ着可仕候先渡海の時節は宜様に雲州出役のものも申候隱岐五六ヶ所に相別れ海岸大難所の由測量日數相かゝり可申候何卒七月末迄に隠

丙寅六月十三日に石州 郡温泉津より七月二十日に代官上野四郎三郎から到達した。この書状の外に帳面一冊封入、御手當金請取書が付いている。

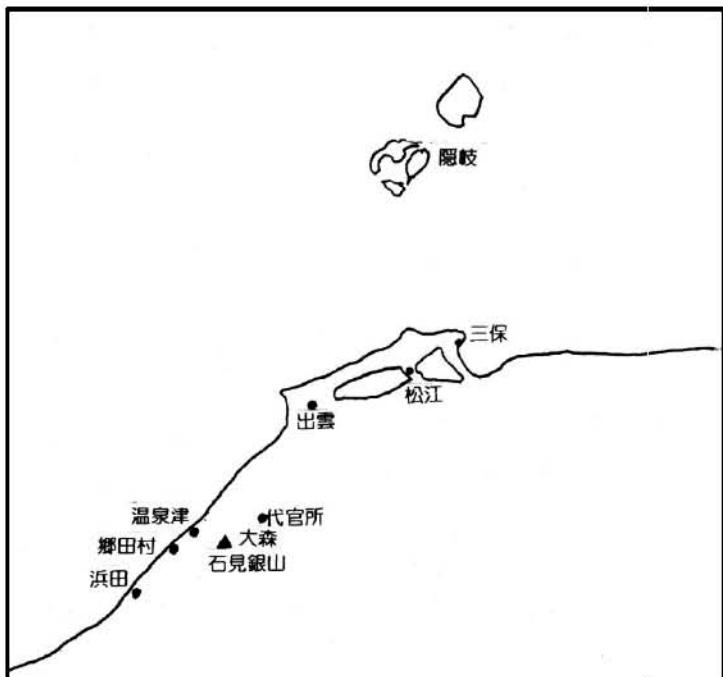
第八 伊能錄として綴込んで出したもの。

石見国の浜田からの公用便に託して昨日十日に私の書簡を差し上げたばかりですでの、今回は石見国大森代官所から爲替金を受け取った件についてだけ申し上げます。

一、浜田からの書簡で申し上げました通り、私めは瘧病（マラリア・三日熱）で大森へ行くことが出来かねましたので、坂部（貞兵衛）に内弟子たちを随行させて大森代官の御役所へ行かせようと思いましたところ、海辺郷田村「御料所・大森詰の上野四郎三郎代官所」の大森代官の手代・石井勇八という者が爲替金を持参して「大森までお越しになるには及びません」と海辺（温泉津）まで貴君（景保）の印鑑まで持参しましたので、爲替金百九拾兩二分確かに受取りました。ご安心下さい。隱岐への渡海を急いでおり、病人が居るのにもかかわらず測量は三手に分かれて精を出して働いておりますので、大森まで行かずに済んだことは大変幸いなことですございました。ただ、右の爲替金のうち、丁銀五十両については目方が三貫三百匁ほどもありますので、重くて難儀いたします。この丁銀についてもあれこれ交渉しましたが、現在、代官所にはそれしか無いということをよんどろなく申しますので、やむを得ないことと思い、丁銀（銀貨の一種で海鼠形の銀塊）を受け取りました。

一、御手當金請取書ならびに（門倉）隼太と（尾形）頤二の御手當金請取書、二通ともこのたび大森代官所の御用便に託して差し上げましたのでお受け取り下さい。

一、私の瘧病は今もつて癒えませんで難儀しております。これから一同、測量に精を出せば、今月下旬には隱岐へ渡航して出雲国の三保に到着できると思います。渡海する季節としてはまずまず適していくて宜しかろうと雲州出役の役人も申しております。隱岐は五、六ヶ所に区分されており、海岸地帯は大変な難所だということですでの、測量は日数がかかると思います。何とか七月末までに隱岐の測量を済ませるよう以致したく存じております。



第八書簡関係地略図

州測量相濟候様仕度奉存候八月に相成候ては風波月に御座候間歸帆も安心不仕候下拙儀も雲州三保宿迄に瘧落候はゞ假令全快不仕候共隱岐渡海可仕候若し瘧疾落不申候はゞ其外病人と共に雲州に殘居全快次第雲州大湖水周邊なり共測量可仕候猶追々可申上候恐惶

六月十三日

伊能勘解由

高橋尊君

八月になりますと、風波の強い月ですので、帰路の航海も安心できません。
私めも出雲国・三保宿到着までに瘧病の症状が治まりましたら、たとえ全快したの
でなくとも隠岐へ渡航いたします。もし、瘧病の症状が治らなかつたら、そのほかの
病人と一緒に雲州に残留して、瘧が全快し次第、雲州の大湖水（宍道湖）の周辺なりと
も測量いたします。また追々申し上げます。恐惶

六月十三日

高橋尊君

机下

伊能勘解由

代官上野四郎三郎の借財一件

石見銀山は天領で大森代官所が治めていたが、文化三年六月の伊能測量当時の代官は旗本の上野四郎三郎資善であった。この上野代官の文化元年八月の着任に際し、直属の手代三名が代官の赴任資金の不足や代官の家計の困窮などを口実に領内の有力者七〇名ほどから銀百六〇貫目を一時借用の名目で集め、のちにそれを踏み倒す事件が発生した。文化三年九月、この騒動の調査のため江戸詰の手代が大森に到着したが、手代三人は借銀返済の受取書を偽造し、出銀者に受領印を押させて取り繕った。だがその後、江戸表の勘定奉行所に呼び出され、吟味を受けることとなつた。関係者の一人が老中松平伊豆守信明に直訴したのだという。この一件は文化七年五月に判決が出て、手代らは「遠島」「追放」などに処され、百名を超える関係者が処罰された。上野四郎三郎は代官を罷免され、「閉門百五十日」のち小普請入」が言い渡された。代官よりも手代の方が重く罰せられたことから、この騒動は手代の出世欲にからむ謀略が真相だつたとも見られている。

書簡の内容

【第八書簡】温泉津から為替金受領の報告

(六) 六月十三日付で石見国温泉津から送つたもので、七月二十日に代官・上野四郎三郎からの便で曆局に届いた。この『三交會誌』では「石州郡温泉津」と郡名が空白になっているが、学士院本では「石見國邇摩郡温泉津」となつてゐる。内容は手当金を受領したことの報告が主である。宛名の「高橋尊君」は高橋景保のこと。ちなみに第四次までの宛名は「高橋尊師」すなわち高橋至時であつた。書簡番号の下の附記によると、この書簡には書状のほかに伊能録と表書きして御手当金請取書を綴じ込んだ帳面一冊が同封されていた。上野四郎三郎は石見国大森銀山の代官で不正事件により罷免された人物であるが、その不正事件が起きたのは、まさにこの文化三年のことであった。そのこともあってか、この書簡の中に記されている為替金授受の方法が興味深い。

石井勇八という代官の手代が、大森から為替金と請取書を持って温泉津まで来てくれた。そこまでは分かるが、「貴君の御印鑑迄持参に付」とある。受領側の忠敬が押すべき高橋作左衛門景保の印鑑を、支給側の代官の手代が持参したという。いささか理解しがたい方法であるが、ともかく忠敬は為替金を受け取り、請取書に手代が持参した案文の通り書いて押印した。その上で、為替金のうちの丁銀が重くて難儀するので、何とかしてほしいとかけ合つたが、今のところ、大森代官所にはこれしかないと言われて

仕方なく受け取つた。今回受け取つた丁銀五十両は、目方が三貫三百匁というから十二キログラム以上あり、旅行中に持ち運ぶには不便であった。ともあれ忠敬は、隊員一行の手当金、および今次の測量に途中から参加した門倉隼太と尾形顯二の手当金を受け取つたこと、景保の印鑑を手代が持参したこと、案文通りに請取書を書いたことも含め、景保に報告した。その報告を済ませたのち、これから向かう隱岐測量と自身の瘧病の病状について述べ、今後の測量行の見込みを述べて書簡を結んでいる。

なお、原文の「海邊に田村」は『測量日記』の記述から「海邊郷田村」（郷）を「に」誤読か、「三年分に仕出精仕処」は学士院本が「三分に仕出精仕処」としていることから、意味が通りやすい学士院本を採用し、「三手に分かれ」と訳した。（「手」を「年」に誤読か）

兩は、目方が三貫三百匁というから十二キログラム以上あり、旅行中に持ち運ぶには不便であった。ともあれ忠敬は、隊員一行の手当金、および今次の測量に途中から参加した門倉隼太と尾形顯二の手当金を受け取つたこと、景保の印鑑を手代が持参したこと、案文通りに請取書を書いたことも含め、景保に報告した。その報告を済ませたのち、これから向かう隱岐測量と自身の瘧病の病状について述べ、今後の測量行の見込みを述べて書簡を結んでいる。

同 十二日 晴天 · · 高橋、尾形、木星測量。引続、草臥に付、今日休。郷田村より直に温泉津越て泊る。· 我等病氣に付、郷田村に逗留。

同 十三日 晴天 · · 今朝同所を出立。温泉津へ来る。止宿本陣、石州邇摩郡温泉津村。木津屋平左衛門隠宅。長州萩領大嶋郡手代財満要助、平岡伝左衛門罷越。利兵衛暇願に付、即此所より暇を遣わす。雲州松江郡方下役小滝周右衛門来る。· 去る十一日郷田村止宿に代官上野四郎三郎手代石井勇八、江戸為替金持參。請取候に付、右請書相認、江戸表へ差遣候に付、温泉津村役人へ用状相渡し、大森御役所へ相届吳候様に申渡し遣わす。小浜村当番銀山付同心大草良藏、温泉津船表當番銀山付同心安井正之助、同當番同心内田嘉市郎来る。

測量日記

文化三年六月 十日 晴天 · · 曆局へ用状
城主幸便を頼む。即、本陣三沢五郎右衛門へ渡。

- 同 十一日 晴天 · · 高橋、稻生、尾形、昨夜木星、四小星、交食測量に付、浜田城下に残、午後出立の積り、我等、平山病気に付、浜田城下より直に郷田村へ越て止宿。(石州那賀郡郷田村上野四郎三郎支配所、年寄、本陣藤右衛門。御代官上野四郎三郎手代石井勇八罷越、江戸表より、為御替金持參に付、相渡可申旨申聞る。即、為御替金請取案紙持參。即、案文の通、相認め調印渡す。右案文別にあり。銀山付同心、柳原連。)

【参考文献】

- ・村上直(1974)「石見代官・上野四郎三郎資善」『歴史と旅』1(12)(12)秋田書店
- ・藤原雄高(2018)「上野四郎三郎借財一件」藤岡大拙『島根の合戦』(株)いき出版

江戸府内第一次測量の記録（八）

—文化十二年二月十二日の『日記』—

十二日の測量は永代橋から隅田川東岸を両国橋の手前まで北上する大川筋測量と、隅田川と中川を結ぶ運河である立川（堅川）筋測量である。測量隊は永代橋際から測量を始め、下之橋で油堀

玉造功

隅田川東岸を北上した。ところで図1を見ても明らかなように、堅川筋測量はどの街道にも繋がらないように見える。確かに中川を逆井の渡しで渡り西小松川村から下総へ通じる「元佐倉道」と呼ばれた道はある。これは千住宿から新宿（にいじゅく）を経て水戸や佐倉に向かう水戸佐倉道が常総方面に向かう主な街道となり、逆井の渡しを経由するものは元佐倉道と呼ばれるようになったものである。伊能忠敬が

希望していた関東城下、川々、沼々等の測量を想定するのであれば、千住宿から中川手前の龜有までを測量して新宿に繋がるようにした方が有意ではなかろうか。

佐嘉町：『日記』と『江戸府内図』では「佐嘉町」をあてるが、町内が幕府に提出した『町方書上』（幕府が編纂した『御府内備考』（以下『備考』と略記）や『新編武藏風土記稿』から民間の『江戸切絵図』に至るまで「佐賀町」を

二月十二日晴
（武州葛飾郡）
惣名深川 佐嘉町 佐嘉町 永代 渡口 橋印始
（永代 渡口）
（昨日残し）
（大川筋 测量右横町 矢張佐嘉町
右横町 真先は小松町也）

油堀川下之橋渡巾十三間
右横町又右横町中之橋渡長七間
右横町手舞川上之橋渡巾

廿二間 俗に 仙台堀という
右横町 仙台屋鋪之限 是より
左辻番 右仙台屋鋪
左大川端 清住町 石横町 灵雲院門前

右小笠原何波守下屋鋪 左小笠木川端御船
右御舟手屋鋪 小笠木川 万年橋(漫長
手之間) 右松平遠右守下屋敷 元町
过番龙二アリ

右 小笠原阿波守下屋鋪

左小名木川端御船藏

万年橋（渡長二十五間）

(右松平遠江守
辻番左にあり

元町

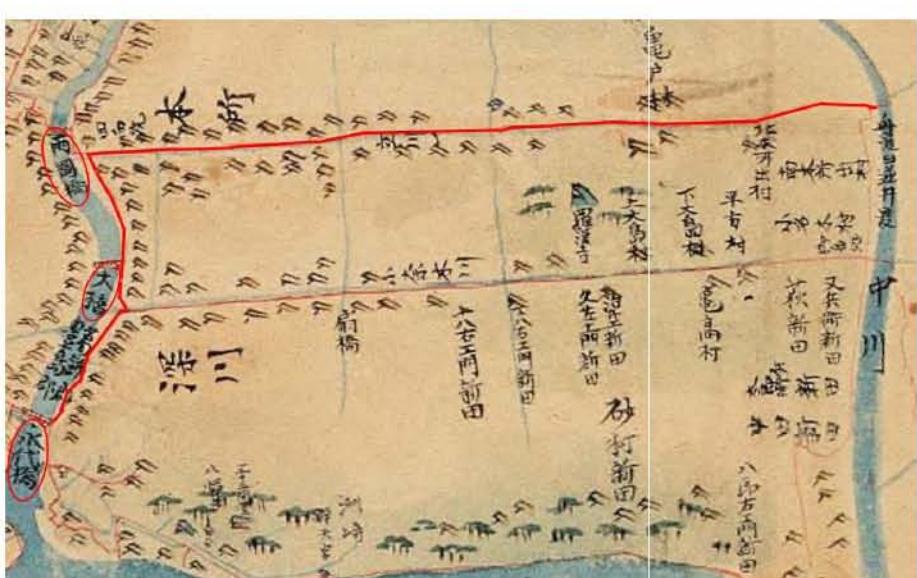


図1 『大日本沿海輿地図』大図90号に加筆

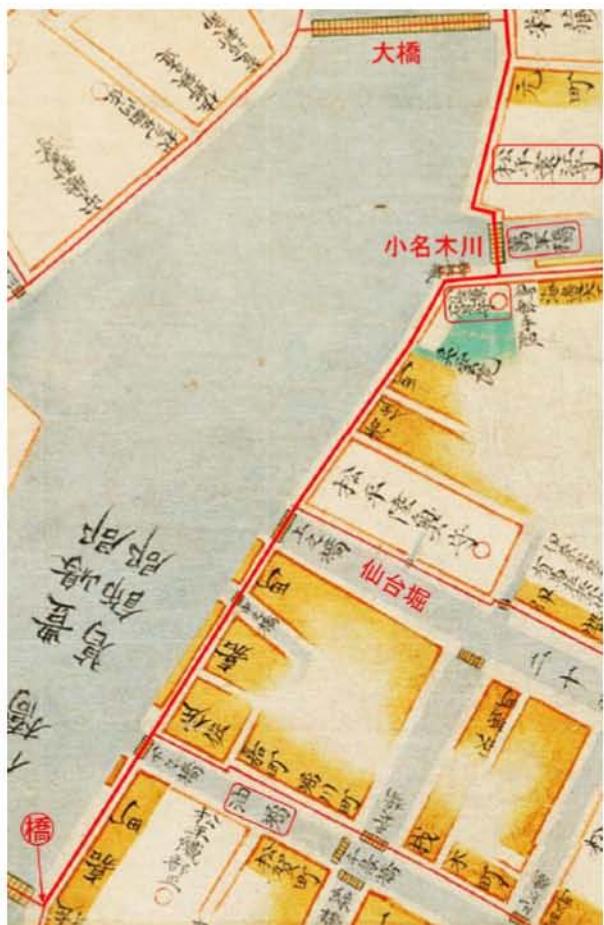


図3『江戸実測図(南)』に加筆

用いていた。現在も江東区佐賀一・二丁目である。佐賀町は水運を利用して干鰯問屋、米問屋、油問屋などが多く集まっていた。

図2の右側が下之橋で、左側が中之橋である。隅田川に添つた河岸蔵や道を挟んだ向こう側の表店、中之橋の先の中之堀沿いの蔵など、この一帯は三井家の貸蔵、貸店が立ち並んでいた。

・**油堀川**：隅田川と木場を結ぶ堀割のうち、隅田川に近い一帯は油問屋が多く、油商人の会所があつたことから油堀川と呼ばれた。

・**仙台堀**：上之橋に始まる堀割は北側に仙台藩蔵屋敷があり仙台堀と呼ばれた。図3の「松平陸奥守○」が仙台藩蔵屋敷である。仙台堀に面して橋を架け水路を引き込み荷物が運び込まれた。図3にもこの水路と橋が描かれている。

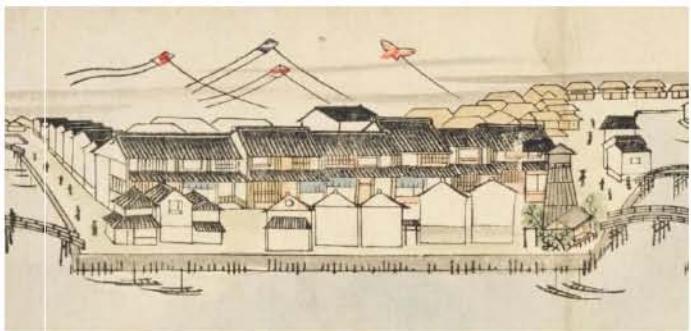


図2 鶴岡蘆水『東都隅田川両岸一覧』

・**小笠原阿波守**：西丸御小姓組番頭で五千石の大身旗本小笠原正恒は安房守（阿波守は誤記）から岩見守に官名を変えたので図3では岩見守となつた。

・**小名木川**：『備考』では、江戸に入った徳川家康が行徳の塩を江戸へ運ぶために小名木川の開削を命じたとする。「此の塩利根川の筋を吾妻嶺碓氷峠の下まで養ふなり」と記し、万年橋から中川の船御番所までの距離はおよそ一里十町で川幅は二十間余とする。

江戸時代も後半になると、小名木川、船堀川をへて江戸川から利根川へとつながるこのルートは、江戸と利根川水系各地の河岸を結ぶ水運の大動脈となつていつた。



図4 北斎 富嶽三十六景から『深川万年橋下』

・**小笠原阿波守**：西丸御小姓組番頭で五千石の大身旗本小笠原正恒は安房守（阿波守は誤記）から岩見守に官名を変えたので図3では岩見守となつた。

・**松平遠江守中屋敷**：万年橋を渡った先にある坪が尼崎藩主の松平遠江守忠誨の中屋敷で五千坪あった。『江戸名所図会』は芭蕉庵旧址について、松平遠州候の庭中にありて古池の形いまなお存せりといふと記している。

・**万年橋**：小名木川と隅田川との合流点に架けられた橋。低地の深川では、洪水対策のために、川の両岸の石積を高くして橋を架けた。図4は小名木川側から万年橋の下に富士を遠望している。

右横町去 石狗藏塗 <small>(右横町) 右横市十郎屋敷 石紋野蔵常門前</small> 右井上	右 (横町) 元町という 右糸蔵添 <small>(右横町) 右松浦市十郎屋敷</small> 右牧野藤五郎門前 右井上
右横町 御船藏前町 <small>(此辺世に安宅といふ勧進所) 右横町</small> 尾水戸殿石置場 <small>(右横町) 右南都大仏殿</small> 右御舟手組屋敷 <small>(越中守) 右京極三右衛門屋鋪</small> 左御舟藏	右横町 右御船藏前町 <small>(此辺世に安宅といふ勧進所) 右横町</small> 尾水戸殿石置場 <small>(右横町) 右南都大仏殿</small> 右御舟手組屋敷 <small>(越中守) 右京極三右衛門屋鋪</small> 左御舟藏
門前町 東階旅所 <small>(右八幡旅所) 本所</small> 字八郎兵衛屋敷 <small>(右弁天門前) 右弁天船舗藏</small> 左合羽干場 <small>(左合羽干場) 右弁天社前</small> 八幡旅所	門前町 東階旅所 <small>(右八幡旅所) 本所</small> 字八郎兵衛屋敷 <small>(右弁天門前) 右弁天船舗藏</small> 左合羽干場 <small>(左合羽干場) 右弁天社前</small> 八幡旅所
右横町 左御石塙 <small>(右横町) 渡巾 橋中央界</small> 右相生町一町目 <small>(左元町) 一十七町五十九間</small> 合羽干場 <small>(測量) (是より立川筋)</small>	右横町 左御石塙 <small>(右横町) 渡巾 橋中央界</small> 右相生町一町目 <small>(左元町) 一十七町五十九間</small> 合羽干場 <small>(測量) (是より立川筋)</small>
右赤端物置縄 尾午側町 及二里見通 <small>(左立川端物置続き) 左片側町 一支に一里見通す</small> 相生町三町目 <small>(左横町) 同四町目</small> 右二ノ橋手前	右赤端物置縄 尾午側町 及二里見通 <small>(左立川端物置続き) 左片側町 一支に一里見通す</small> 相生町三町目 <small>(左横町) 同四町目</small> 右二ノ橋手前
左横町之 左相生町 一丁目 相生町二丁目 左横前例	左横町之 左相生町 一丁目 相生町二丁目 左横前例
同五町目左横町之 左相生町五町目 緑町一町目 左横町	同五町目左横町之 左相生町五町目 緑町一町目 左横町
同五町目左横町之 左相生町一丁目 緑町二町目 左横町 同三町目 同四町目	同五町目左横町之 左相生町一丁目 緑町二町目 左横町 同三町目 同四町目

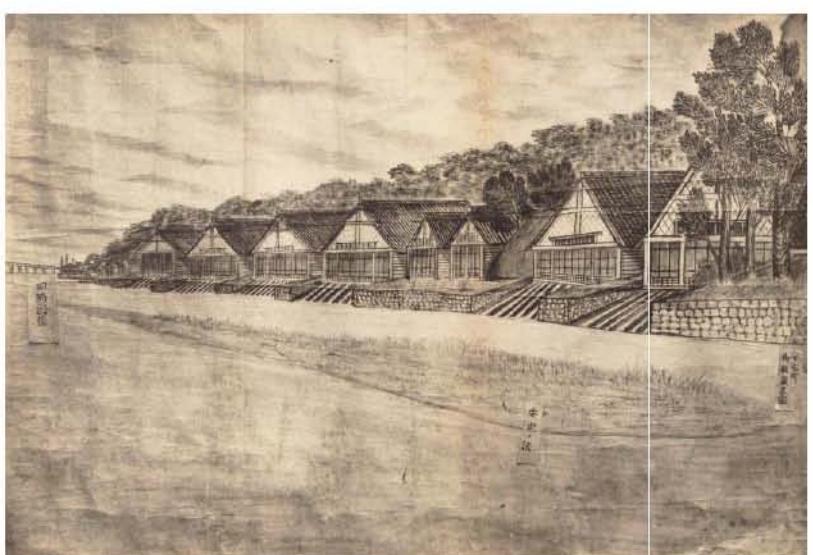


図5 安宅町御船藏略図 『東京市史稿 港湾篇 第三』

図6のように、測量隊は大橋（新大橋）東詰から武家地を過ぎると、隅田川岸を離れて御船藏の東側を北上し、一之橋を渡り立川（堅川）北岸に進んだ。新大橋は隅田川の三番目の橋として元禄六（1693）年に架けられ、千住大橋に対して「新大橋」と名付けられたと『備考』は記すが、伊能図ではただ「大橋」と記している。

・**糀藏**：寛政の改革の際につくられた飢饉用の糀米の備蓄蔵で、『備考』によると寛政十年から四年間で土蔵十一棟を建てたという。

・**御舟藏**：幕府の軍船を格納した船蔵で、『備考』によれば、長さ三丁（約三三〇m）ばかりの間

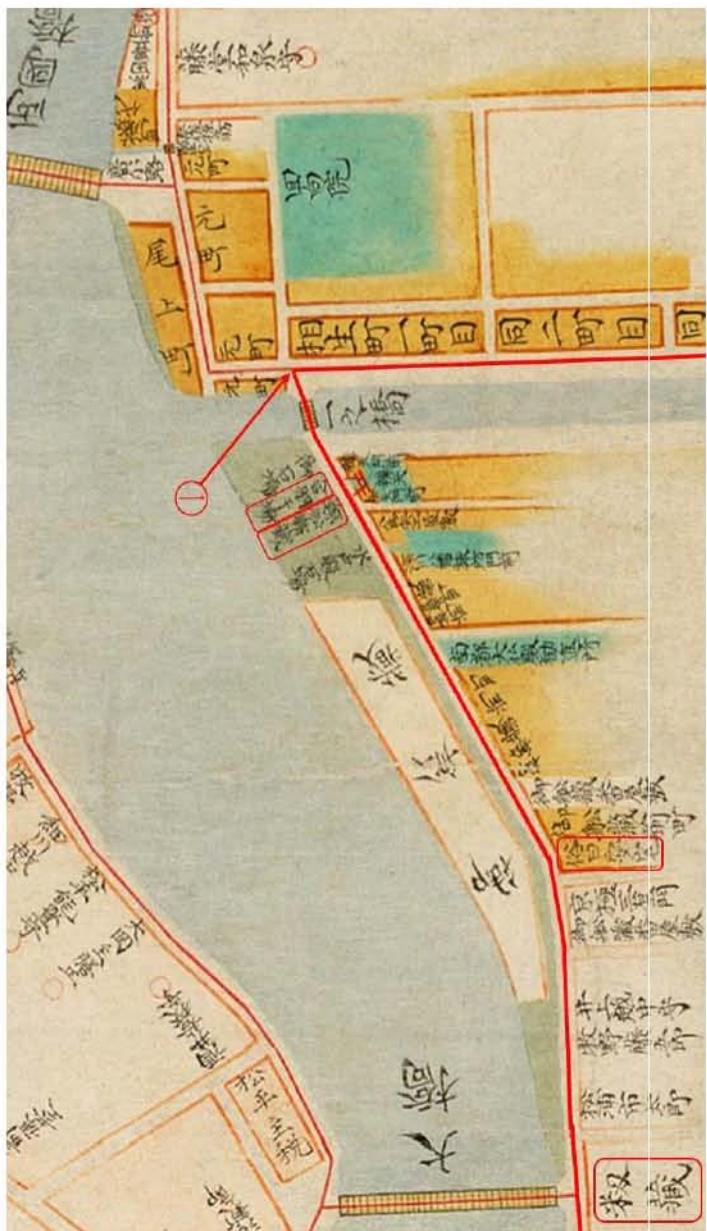


図6『江戸実測図(南)』に加筆

に大小十四棟が立ち並び、敷地は四人九〇坪あつた。安宅という：寛永九（1632）年徳川家光の命で新造された將軍の御座船安宅丸がこの付近に係留され、天和二（1682）年に取壊された。このため一帯は俗に安宅（アタケ）とも呼ばれた。本所：墨田区南西部の総称。明暦の大火により江戸の大半が焼失した後に江戸の大改造が行われた。万治二（1659）年には隅田川に両国橋を架けて、低湿地帯であつた本所一帯の開発を進めた。「本所深川の地を築き立られて、大名及び御旗本の屋敷に賜ひ、町家をも多く置れて江戸に属されしなり」と『備考』は記す。

「鞆」と正しく表記している。八代將軍吉宗の命により、隅田川洪水の際の被災者救助船として、紀州の捕鯨用の船が波に強く快速敏捷であることから、同型船の先丸と乙丸が作られ鯨船（図7）と呼ばれた。町奉行管理下であることから、その格納施設は幕府軍船の御船藏と区別して鯨船鞆藏と称したという。

・**合羽干場**： 御桐油師として幕府の御用達である本所元町の中川長兵衛が合羽干場として拝借した場所。和紙に桐油を引いた油紙を使って仕立てた合羽は防水性が高く、忠敬も測量旅行に持参していた。

・**立川（豎川）**： 豊川は万治二（1659）年に開削され、『新編武藏風土記稿』には「本所一の

橋より逆井渡まで一里八町余直流して中川に達す。：幅二十間深一丈四尺の川路を掘割しと云」と記す。江戸城から見て縦方向に通じていることから堅川と呼ばれた。

低湿地帯である本所の開拓は、両国橋の架設とともに豊川をはじめ横川、十間川、南割下水など縦横に開削して排水路とすることから始まった。また豊川は小名木川と同様に隅田川と中川を結ぶ水運の要路としても発展した。

一ノ橋：隅田川から
堅川に入つて一つ目の
橋ということで名付けられ
た。橋の北側周辺を里俗
で本所一つ目と
三之橋は三ツ目と
相生町：相生町が提

相生町：相生町が提出した『町方書上』では町名は祝詞から付けられたと伝わっているとする。西側の尾上町の『町方書上』には、町名は「一つ目に相生町があるので尾上町と名付けた」と記している。祝詞の「高砂の尾上の松の新生に立ち並び」から祝賀の意をもつて付けられた町名である。

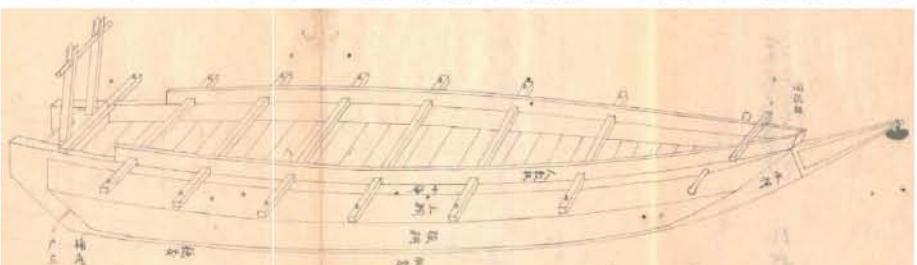


図7 『鯨船并鞘藏御普請書留』から鯨船

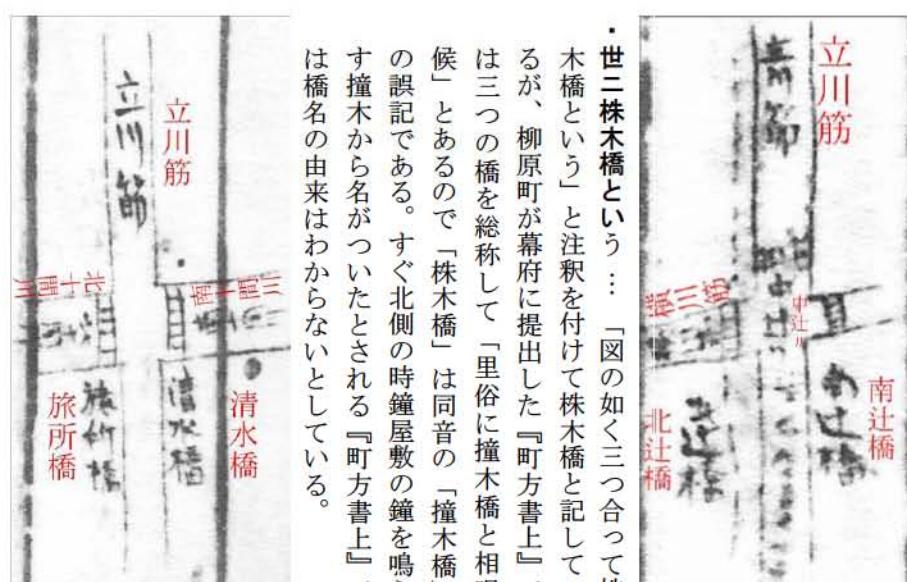
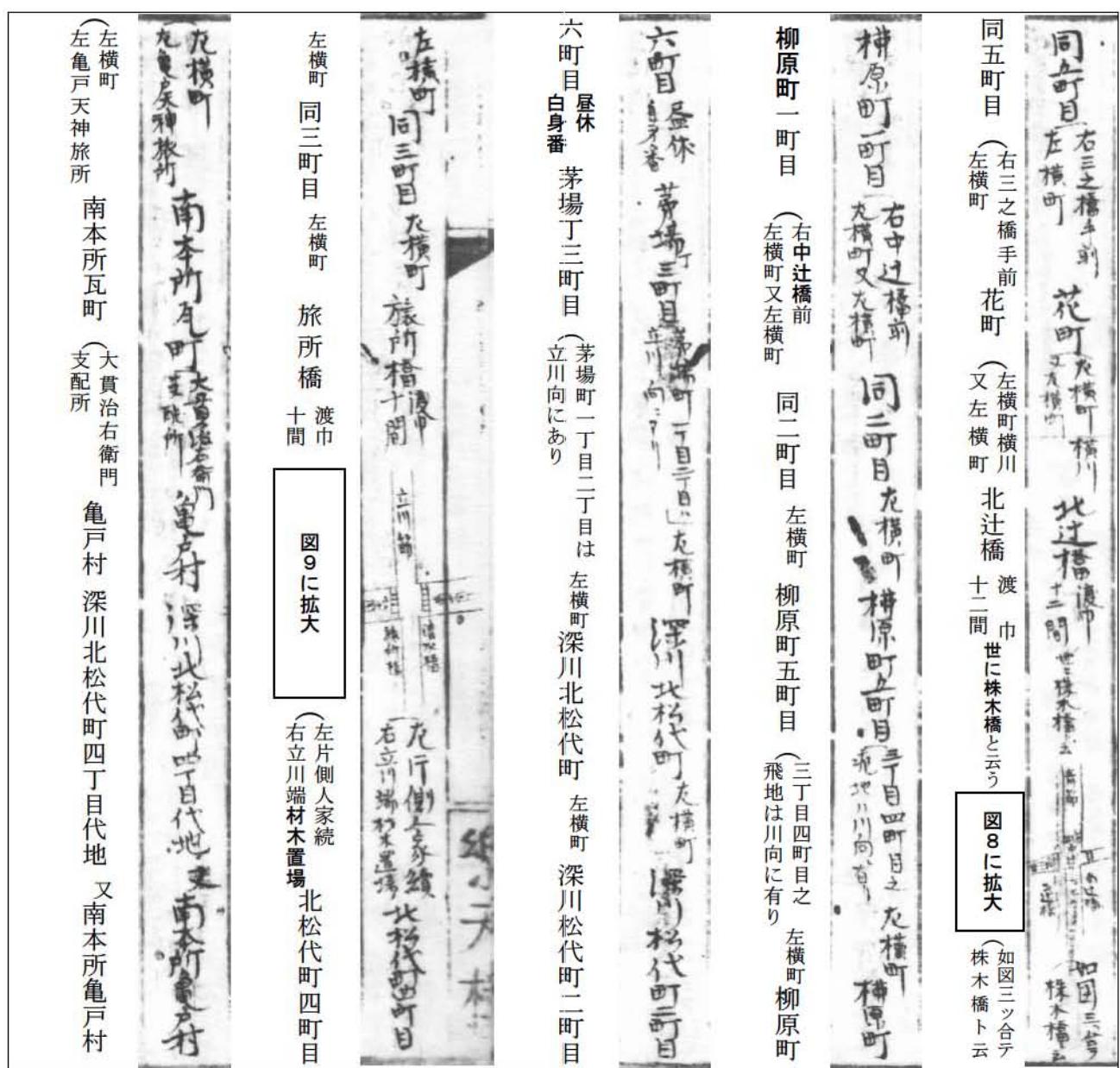


図9『日記』に加筆

測量隊は堅川（立川）の北岸沿いに、北辻橋で横川を、旅所橋で北十間川を渡り、東に直進していった。図11や図12を見ると、本所では町人地は堅川や横川の川沿いに集約されている。その多くは浅草、神田、八丁堀から上地されて、本所に代地が与えられて移転してきた。

図12の北十間川と南十間川のあたりからは「亀戸村田地」という文字も見え、次第に農村地帯へと変わる。

・世ニ株木橋といふ：「図の如く三つ合つて株木橋」というと注釈を付けて株木橋と記しているが、柳原町が幕府に提出した『町方書上』では三つの橋を総称して「里俗に撞木橋と相唱候」とあるので「株木橋」は同音の「撞木橋」の誤記である。すぐ北側の時鐘屋敷の鐘を鳴らす撞木から名がついたとされる『町方書上』では橋名の由来はわからないとしている。



図10 北斎 富嶽三十六景 『本所立川』



図11 『江戸実測図(南)』に加筆

要路として発展すると、図10に北斎が描いたように材木商が多く集まつた。

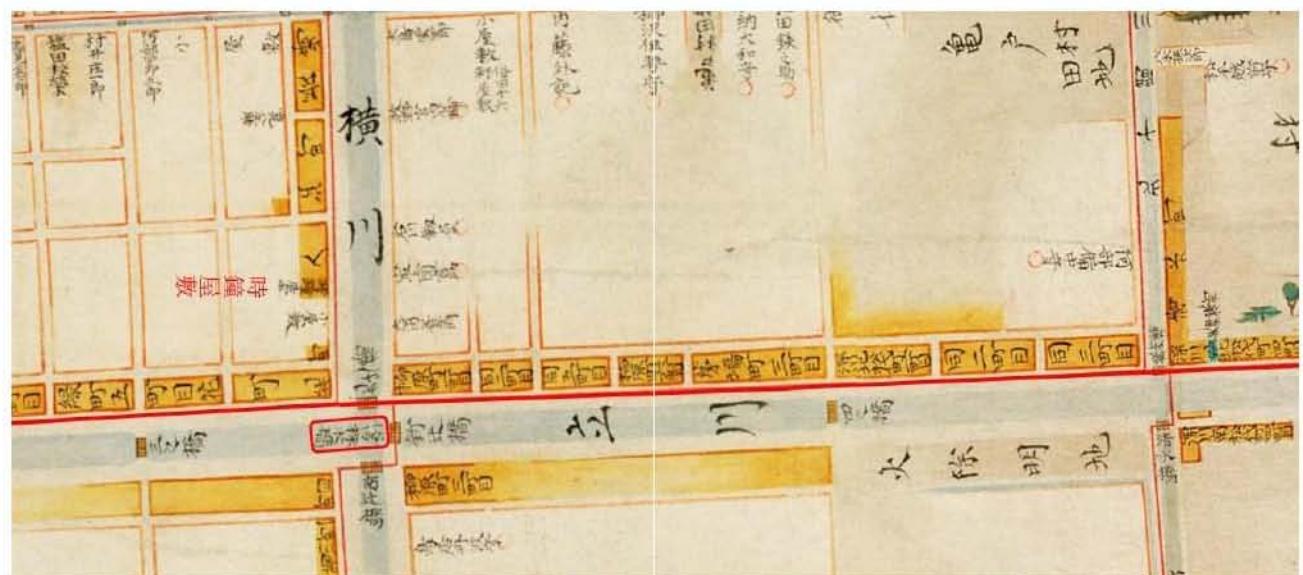


図12 『江戸実測図(南)』に加筆

- 柳原町**：神田川沿いにあつた古町であつたが、火除地として上地され柳原土手となつた。その代地として豊川の両側に六町分を与えられ、移転後も元の柳原の町名を引き継いだ。
- 中辻橋**：新辻橋を誤記している。図11では新辻橋と訂正されている。
- 昼休白身番**：柳原六町目が提出した町方書上によると、自身番屋の間口は九尺、奥行は四間半であった。
- 材木置場**：豊川が隅田川と中川を結ぶ水運の半であった。

右漫場ノ羅漢像云是乃ト古事記傳起立所也
左龜戸村十三間道追分龜戸村下水築レ 中ノ郷立橋町左横道又龜戸村

(右渡場羅漢渡)といふ是より五百羅漢迄五町ばかり左龜戸村十三間堂道追分 龜戸村下水落し

中之郷五之橋町 左横道 又 亀戸村

左横道
左自性院構左稻荷社
自性院門前 中之郷立橋町右立川添 小梅村立橋町又野道
左之郷五之橋町前と同断 小梅村五之橋町 左野道又龜戸村

左方側町也
此本所出村南本郷出村又重井村
九野道右置場
字通井_通渡場樓鑿_通

左片側町也 北本所出村 南本所出村 又 龜戸村
（左野道 右渡場 字逆井の渡といふ（畢る）
（渡場梗に繋ぎ

青筋一里二十一町
七時重傳省
一里三十七町辛九間

立川筋一里一十〇町〇〇 惣測
一里三二十七町五十九間

七ツ時頃帰宿

図
14
に拡大



図13 広重 絵本江戸土産『逆井乃渡』

測量隊は堅川北岸をさらに東に進む。図15を見ると小梅五之橋町で堅川北岸の町場は終わり、戸村に入る。逆井の渡しの榎の木に測線を繋いでこの日の測量は終わり、夕方四時頃に帰宅した。

逆井ノ渡：『新編武藏風土記稿』は「元佐倉道中川の船渡にて、対岸西小松川村に達す」と記す。元々は北隣の逆井村にあつたが、亀戸村に移転後も逆井の渡しと呼ばれ続けた。渡船は亀戸村持ちと西小松川村持ちの二艘である。

③

②

①

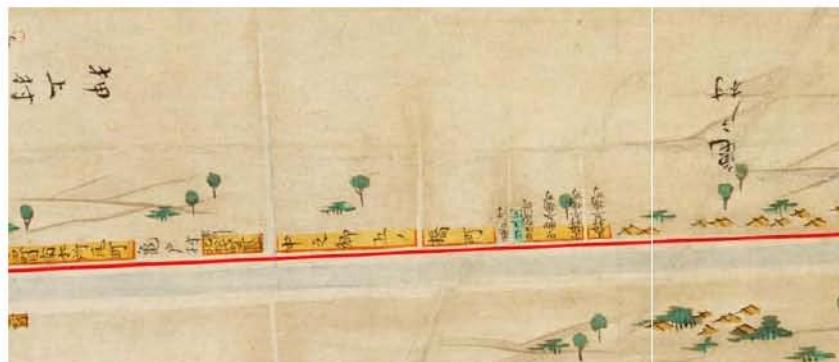
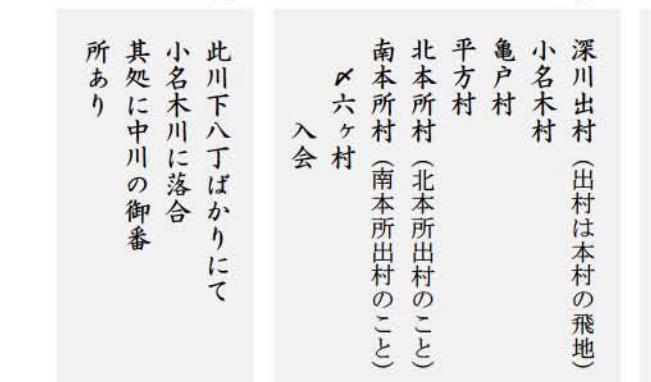


図15 『江戸実測図(南)』に加筆



図16 『江戸実測図(南)』に加筆



図14 『日記』に加筆

【図版の出典】

『日記』の図版は伊能忠敬記念館に架蔵されている写真帳による。無断流用禁止。

『江戸実測図(南)』は国土地理院ウェブサイトの古地図コレクションによる。

図1、2、5、7、13は国会図書館デジタルコレクションによる。

図4、10は東京国立博物館デジタルコンテンツによる。

【参考史料】

『町方書上』 国会図書館

『御府内備考』 国会図書館

『新編武藏風土記稿』 国立公文書館

『諸向地面取調書』 国立公文書館

『江戸名所図会』 国会図書館

『文化武鑑』 (文化十一年) 国会図書館

『寛政重修諸家譜』 国立公文書館

『本所深川町屋絵図』 国会図書館

『深川絵図』 (江戸切絵図) 国会図書館

『本所絵図』 (江戸切絵図) 国会図書館

【参考文献】

・『深川区史 上下』 深川区

・『江戸・町づくし稿 下巻』 岸井良衛 青蛙房

・『江戸名所図会を読む』 川田壽 東京堂出版

・『東京市史稿 港湾篇 第二』 東京市

・『深川佐賀町』 『資料館ノート』 第112号

・『深川江戸資料館』

・『江戸幕府の成立と小名木川の開削』 『資料館ノート』 第136号 深川江戸資料館

・『御船藏』 『下町文化』 第282号 江東区

伊能図に描かれた現存十二天守（五）

石川県支部会員が会報九十四号から始めたリレーワード連載の最終回である。この一年半の間にNHK「日本最強の城スペシャル」が第十三弾まで放送された。ホームページに「日本全国には3万以上の城があると言われています。そのどれもが個性的。難しい歴史を知らなくても、この番組を見れば、お城の魅力が100パーセント分かります。華麗な天守のある城から、険しい山に築かれた土造りの城まで、謎と秘密を徹底的に解剖。」とあります。他局も含めてちょっとした「お城」ブームである。全国三万の「お城」の中の「現存十二天守巡り」、最後までお付き合いください。

松江城（島根県松江市）

相良 文昭・河崎 倫代

伊能忠敬一行が松江城下を訪れたのは、第五次測量と第八次測量のときである。

第五次測量は、文化二年二月二十五日（一八〇五年三月二十五日）江戸を出立。紀伊半島と琵琶湖を一周、瀬戸内海沿岸を測量して下関に至り、さらに日本海沿岸に出て松江城下に入ったのは文

化三年六月十七日（一八〇六年八月一日）のこと。

既に一年四ヶ月に及ぶ長期出張となっていた。満六十歳の忠敬は四月末から持病の瘧（おこり）悪寒と発熱が一定の間隔で襲ってきて身体が震える病気。マラリアの一種を患っていて、測量には参加せず次宿へ直行して療養に努める日々だつた。松江城下末次本町の本陣京屋万五郎宅に到

着すると、急速に佐々木万柳（藩医）、吉見鎌徳（鍼医）が訪ねてきた。翌十八日には手分測量の三隊も合流して京屋に宿泊。松江侯から忠敬へ白銀一枚・鼻紙一束、他の隊員たちにも各々贈物があつた。

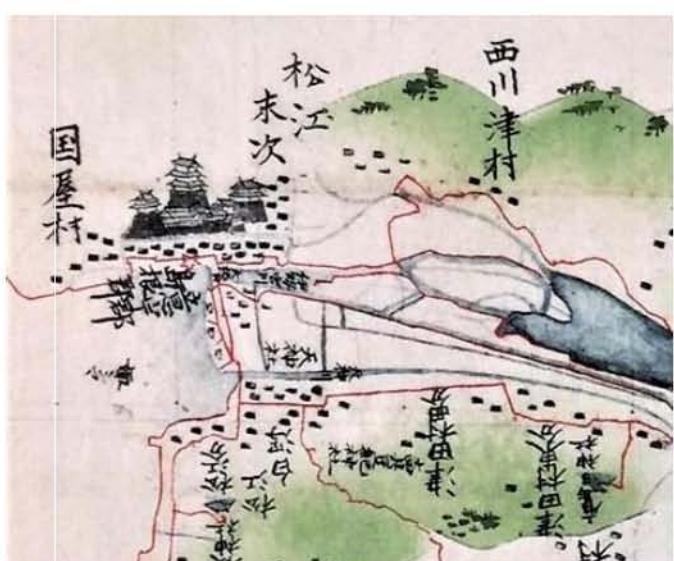
その後、隱岐島に渡るために三保関（島根半島の東端。松江市美保関町）に至り風待ち。二十三日に

出港したが西風に流されて、伯耆国赤崎村（鳥取県琴浦町）に漂着した。測量隊は二十六日に船で三保関まで戻り、ようやく七月四日に隱岐島に到着。

しかし、忠敬は瘧が悪化したため渡島せずに、松江城下へ戻って治療に専念することになった。『忠敬先生日記』には「我等（忠敬）・平山（郡藏）・丈助（忠敬の従者）ハ病氣ニ付当所ニ残ル」とある。この頃『測量日記』には「予・平山不快ニ付」として測量不参加が続いていた。玉造功会員は「郡藏は忠敬の看病のために“不快”を口実にして忠敬に付き添つた」とみている（会誌八十九号「平山郡藏の書状」）。忠敬も了解の上で随行を許可したのだろう。

忠敬は二十八日夕方、米子（鳥取県米子市）から乗船し、二十九日晚に松江末次の油屋孫左衛門宅に入つた。藩士岡本辰平と中尾信四郎が付き添つてゐる。着後、佐々木万柳・小林瑞泰（町医）・坂本養民（町鍼医）の診察を受けた。

松江城下で療養中の忠敬について、『忠敬先生日記』欄外に記された「松江旅宿日記」で見ていく。六月二十九日から七月八日までは毎日、九日から十二日までは隔日、医師の誰かが診察に訪れている。十三日からは医師の名前はないから、回復が進んだのだろう。七月四日には止宿油屋亭主・八月一日 でく川北縁を測る。（でく川は不明。）二日 福富村界から下来海村東分界まで。



『伊能図大全』(河出書房新社) 3巻 1913p より転載

身には何よりの馳走だつただろう。二十七日から八月二日までの五日間は「我等と平山、丈助」の三人で大橋川の南岸から宍道湖南岸を測量している。病み上がりの忠敬の貴重な測量記録だ。

- ・二十七日 大橋北詰から山代村矢田まで。
- ・二十八日 大橋南詰より伊勢宮川筋山代村矢田まで。

※伊勢宮川の名称由来となつた伊勢宮は、松平直政が伊勢神宮への崇敬が厚かつたことにより、家臣たちによつて勧請されたが、明治七年（一八七四年）に焼失した。

- ・二十九日 大橋南詰より乃木村・福富村界まで。
- ・八月一日 でく川北縁を測る。（でく川は不明。）
- ・二日 福富村界から下来海村東分界まで。

隠岐測量を終えた隊員たちは、島根半島を三隊に分かれて測量し、八月四日に松江城下に参集。二日間逗留し、七日に松江城下を出立した。六月十七日に松江入りしてからのおよそ五十日間は、忠敬自身にとつても測量隊にとつても多難な日々だった。

第八次測量では、九州第二次測量からの帰路、文化十年十一月三日（一八一三年十二月二十五日）・四日、京屋万五郎・油屋孫左衛門・京屋喜兵衛宅に分宿し、天文測量も行っている。『輿地実測録5』（国立公文書館蔵）には「松江末次本町」から一町九間離れた「御子町」の北極出地度を三十五度二十七分半と記している。現在の末次本町の緯度はおよそ三十五度二十八分である。

関ヶ原の戦いの戦功により出雲・隠岐二十四万石を与えられた堀尾吉晴は、慶長五年（一六〇〇）、まず月山富田城（安来市）に入った。しかし、険しい山城である上に手狭で交通の便も悪かつたので、宍道湖東岸の亀田山に新たな城と城下町を建設することにした。これが松江である。当時は湿地帯が広がり建設に困難な立地だったが、普請上手で知られた堀尾吉晴は十二年に築城工事を開始。十六年に五重六層の天守を持つ松江城が完成した。その後、堀尾氏は三代で無嗣改易。次の京極忠高は一代で断絶。寛永十五年（一六三八）に松平直政（家康の孫）が松本から国替えで入国。幕末まで十代二三〇年続いた。七代藩主松平治郷（在位一七六七一八〇六）は「不昧公」とも称され、大名茶人として茶どころ松江の礎を築いた。



明治25~27年頃の松江城天守（「国宝松江城」HP）

令によつて、城内の櫓や門、御殿などは売却されたり取り壊されたりした。天守にも百八十円の値段（当時）がつけられたが、地元の豪農勝部本右衛門父子と旧藩士高城権八らの尽力で買い戻されたという。しかしその後は、老朽化により写真のような倒壊寸前の状態となつていた。

明治二十七年（一八九四）に大修理が始まり、天守はようやくかつての雄姿を取り戻し、一九三五年（昭和十年）には「国宝保存法」の施行により国宝に指定された。太平洋戦争中に全国各地の城が空襲で焼失したが、松江城は運よく被災を免れた。しかし、昭和二十五年（一九五〇）の「文化財保護法」によって国宝の指定基準が変わり、松江城は重要文化財に格下げとなつた。

その後、かつて天守四階に一枚の祈祷札があり、一枚には「慶長拾六年」と記されていたことが判明すると、懸賞金をかけてこの祈祷札の行方を追

つた。幸いなことに祈祷札は、二〇一二年に松江神社から発見され、さらに天守地階の井戸脇の柱に見つかった小さな穴が、祈祷札についていた釘穴とぴたり一致したのだ。こうして慶長十六年創建時の「祈祷札」再発見により、完成年のわかる歴史的価値ある建物と認定され、二〇一五年に国宝に返り咲いた。格下げから六十五年、ついに悲願達成なつたというニュースが、当時の新聞に大きく掲載されたのを覚えている。現在、天守地階の柱に「祈祷札」のレプリカがはめ込まれている。また、天守五階には「国宝指定書」の写しが展示されている。（相良・河崎）



平成24年(2012)に再発見された、松江城の築城年「慶長拾六年」の記された祈祷札レプリカ。（「国宝松江城」HP）

相良が松江城を訪れたのは一〇年以上前のことであるが、その時の写真を探したが見つからなかった。「松江城・史料調査課」に問い合わせると、「国宝松江城」、「しまね観光ナビ」などのホームページの画像を使用できることが分かつたので、有り難

く使わせていただいた。

訪問時のことと今でも印象に残っているのは、古い天守閣見学が初体験ということもあって、天守最上階から見た景色の美しさ、眼下に広がる宍道湖の開放感は鮮明に心に残っている。いずれ、出雲大社にもう一度行きたいと思ってるので、その折にまた松江城を訪れた。（相良）



「国宝指定書」（「国宝松江城」HP）



松江城外観（「国宝松江城」HP）



天守からの眺望（「国宝松江城」HP）



天守最上階からは、360度、松江の町を見渡すことができる（「国宝松江城」HP）

- ・松江市ホームページページ「市史編纂コラム」
- ・「国宝松江城ホームページ」
- ・『日本の名城と城址』社会思想社 一九六三年
- ・千葉県史料『伊能忠敬測量日記』千葉県 一九八八年

※本書の「凡例」によると、伊能忠敬記念館所蔵の「測量日記」二十八冊の内の一・二・三の三冊と「忠敬先生日記」五十一冊の内の十三冊を

収録した。これらは忠敬の寛政十二年から文化三年までの測量記録である。とあり、第五次測量までの測量記録が収録されているので、今はここから引用した。当初は第六次測量以降の出版も計画されていたが、中断されたままになつている。

伊能忠敬の測量日記については、本書巻末の「二つの測量日記について」と「伊能忠敬研究」第七号（一九九六）の渡辺孝雄「測量日記解題」に詳しい。（研究会ホームページで読める。）

簡単に紹介すると、

「忠敬先生日記」は、忠敬が測量中に日々記録したものであり、村高・人数・家数・支配や、ちよつとした情報なども記述されている。他方「測量日記」は、測量後に忠敬が「忠敬先生日記」を清書したものであり、記述はやや簡略になつていて。例えば松江での動向は、「忠敬先

生日記」では欄外に「松江旅宿日記」として朱筆されているが、「測量日記」ではその日の隠岐測量を記録した後に「此日松江：」と本文に追記する形式に整理されている。前述した「西瓜差し入れ」の記事は「忠敬先生日記」にあるが、「測量日記」では省略されている。

・「国宝 伊能忠敬測量日記 原文」（DVD版
二〇一二）伊能忠敬e史料館

・「国宝 伊能忠敬測量日記 解説」（DVD版
二〇一七）伊能忠敬e史料館

・NHK『プラタモリ4』角川書店 二〇一六年
九号 二〇一九年

・玉造功「平山郡藏の書状」『伊能忠敬研究』八十
二〇一九年

・『おとな旅プレミアム 出雲・松江』TAC出版
二〇一九年

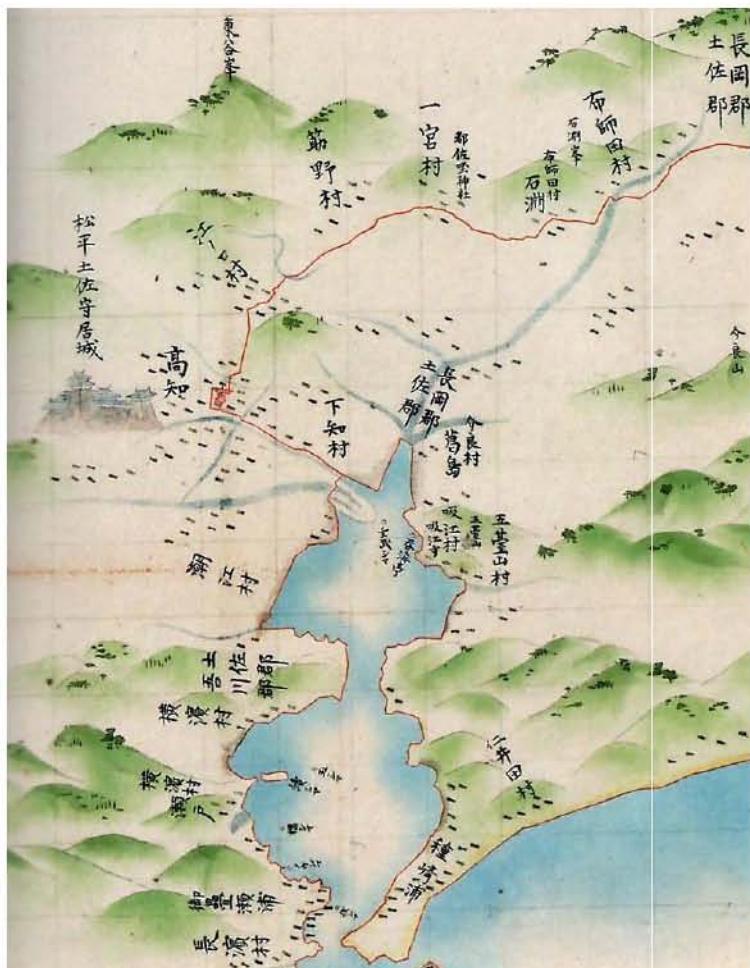
・サンエイムック『日本の名城を訪ねて』三栄二
〇二〇年

高知城（高知県高知市）

寺尾 承子・室山 孝

文化五年一月二十五日（一八〇八年二月二十一日）、伊能忠敬測量隊總勢一六人は、第六次測量（四国・大和路）のため江戸を出立した。

土佐國の測量は四月十九日（五月十四日）の甲ノ浦（東洋町）から六月二十四日（七月十七日）の藻津村（宿毛市）までの期間であった。この間、土佐藩普請方下役である奥宮弁藏正樹が測量隊の案内役として付き添い、自身の「測量日記」（「奥宮日記」）を残している。



『伊能図大全』（河出書房新社）3巻 206p より転載

日から忠敬は持病（痰）のため引き籠もり、五日も未だ全快せず、藩の役人や町役人ら多くの訪問者はあつたが、悉く対面を断つている。この間、下河辺らが宿所から浦戸湾岸を測量した。また、夜間の天文測量は四日・六日の二日間のみであった。

六日の『測量

四月二十八日、坂部貞兵衛、柴山伝左衛門、植田文助ら四名は四国縦断測量のため、赤岡浦（香南市）から大手分けして本隊と分かれ、高知城下へ直行。雨天で城下に一日逗留し、五月一日、宿所種崎町から土佐・伊予国境の笹ヶ峰へ向かつたが、奥宮が案内を勤めている。

本隊の忠敬、下河辺政五郎、青木勝次郎、稻生（伊能）秀藏らは、五月一日、浦戸湾入口の種崎浦から湾岸測量に掛かり、五台山村、吸江（きゆうこう）村、桂嶋（葛島）と進み（現在いずれも高知市）、そこから乗船し、高知城下へと入った。宿所は別手も泊まつた種ヶ崎町広小路の辰巳屋伊藤伝右衛門方であつた。

ところが翌二

日から忠敬は持病（痰）のため引山文殊堂（柴山日記）によると、この日坂部ら一同は五台山文殊堂（柴山日記）に三十二番札所となるが、三十一番か）に参詣した。辰巳屋伝右衛門は屋形船を用意し、酒等を振る舞つてくれたので、坂部は御礼として金二朱を贈つたとある。他方「柴山日記」では、亭主伝右衛門も同道し宿所前から小船で一里ほど乗つて五台山前へ到着。寺内から七、八丁山を下りて、吸江寺を訪れた。夢窓国師草創の吸江庵の額は足利尊氏筆といい、高師直が植えたという松が大木である。本堂は三階構造で山へ掛け作りになつてゐる、と記す。

五台山村・吸江村は忠敬ら本隊が五月一日に測量しており、「測量日記」に、五台山は「竹林寺金色院、国印百石」、吸江寺は「濟家宗、国印百石、臨海楼ありて風景好、呑海亭あり、国主遊覧之所」と注記されており、いずれも寺領百石。吸江寺前の海上に設けられた藩主の遊覧施設である「呑海亭」

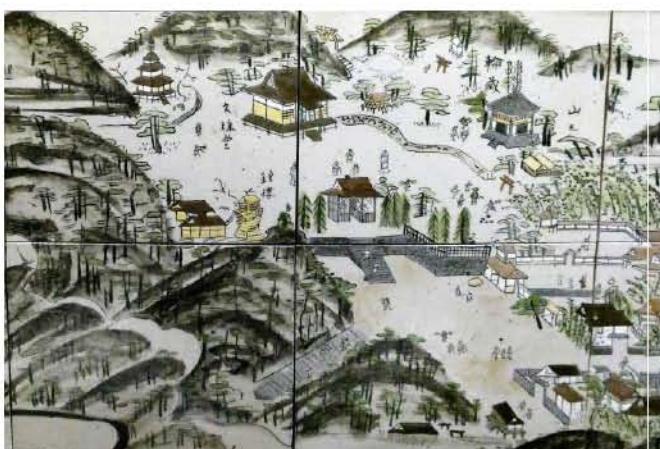
主より我等（忠敬）へ土佐鰯節百・小杉原三十帖、下役四人へ土佐鰯節八十宛・小杉原二十帖、内弟子（秀藏・佐右衛門・文助）三人へ土佐鰯節五十宛、侍悼取三人へ金百疋宛、草履取藤吉銀二両、下役中四人草履取も同断、銀二両宛御贈惠。御使町奉行下役楠目虎之丞麻上下にて来る」とあって、藩主（山内豊策）から手厚い贈り物があつた。土佐の饗節は「日本一」の評価があり、藩として最高の贈り物だったようだ。七日、忠敬は全快し、本隊は高知城下を出立している。

別手は六日に笹ヶ峰の国境に到達し、八日、高

知城下に戻つてきた。この間の記録は、天文方下役柴山伝左衛門の「旅中日記」（「柴山日記」と「奥宮日記」）に残されている。

亭」は、伊能大図に小さな島として描かれている。

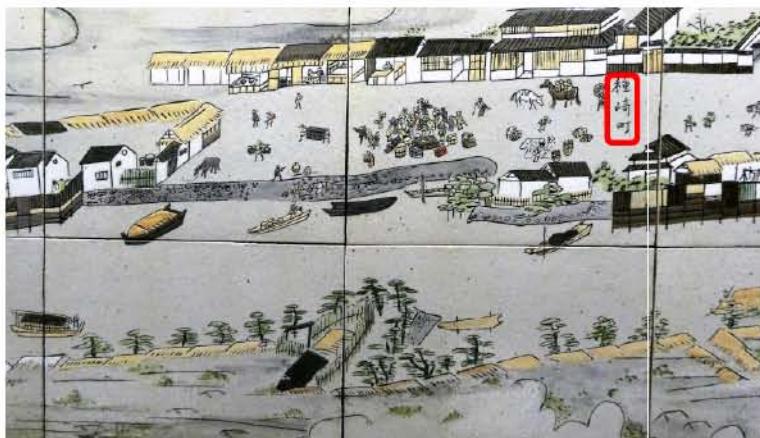
五台山には現在、高知県出身で「植物分類学の父」と呼ばれる牧野富太郎博士を記念して開設された牧野植物園もある。今春、博士をモデルにしたNHK連続テレビ小説「らんまん」が放送される。(ちなみに、博士の妻を演じる浜辺美波は金沢市出身である。)



五台山竹林寺（「高知下町浦戸湾風俗絵巻」陶板）



吸江寺と海に突き出た呑海亭（同上）



種崎町の広小路と船着き場（同上）

の路面電車が通る大通り（国道32号線）となり、はりまや町一丁目10番に建つNTT西日本高知東ビルが辰巳屋の跡地である。大通りに繋がる前の道は広い。そこから大通りを西へ約一・四km行くと、「高知城前」電停となる。

高知城の地は、南北朝時代に南北朝方の大高坂氏の山城があつた。安土・桃山時代、長宗我部元親が居城としたものの、治水に難儀し三年で海岸部の浦戸城に本拠を移した。その後慶長六年（一六〇二）、関ヶ原の合戦に功績を上げた山内一豊が、遠江から入部（当初は浦戸城）、築城にかかつた。難工事の末、一豊の没後六年を経た慶長十六年、二代山内忠義の時に完成している。忠義は「河中山

江戸後期の「高知下町浦戸湾風俗絵巻」（高知市立図書館蔵）に、宿所辰巳屋のあつた種崎町など下町から、吸江寺・五台山を含む浦戸湾岸の名所が描かれており、現在「はりまや橋公園地下広場」に陶板画として展示されている。

測量隊宿所のあつた種崎町は、城下町武家地の東に隣接する下町にあつた。江戸後期の城下町絵

図「天保元年高知之図」（個人蔵）によると、武家地との境界に堀が南北に延び、その堀がクランクする辺りから東方に堀川が流れ、有名な播磨屋橋が堀川の中間付近に架かっている。よく見ると、播磨屋橋の東、堀川北岸の道が川に直接面してやや広くなつた箇所に船着き場があり、その前の町並みに「虎屋」「辰巳屋」の文字が並んでいる。「高知下町浦戸湾風俗絵巻」でも描かれているように、種崎町は浦戸湾と結ぶ城下の水運の表玄関であつた。『測量日記』に「種ヶ崎町広小路」とあるのはこの付近のことであり、藩の保護下に醤油の製造を独占して豪商になつたという辰巳屋は、水運の拠点に立地していたのである。

現在、堀川が埋められた跡地は「とさでん」



辰巳屋跡地に建つNTT西日本高知東ビル

（こうちやま）と呼ばれていた地名の文字を改め「高智山」とした。これが今のが「高知」の始まりである。

しかし、享保十二年（一七二七）、城下町に起った大火の飛び火で追手門など一部を残し焼失。財政難のおり、復旧に二〇年以上かかり、天守・櫓・楼門等が完成したのは寛延二年（一七四九）であった。現存する天守や本丸御殿はこの時のものである。明治維新によって廃城となり、本丸の建物と追手門を除くすべての建物が取り壊されたが、明治六年（一八七三）、城は高知公園として一般に開放された。本丸全体の建物が残るのは、全国でも高知城が唯一であり、現在、追手門を含む十五棟の建物が国の重要文化財に指定されている。

私は高知市に二度行つたことがある。一回目は、二〇一〇年二月、大学三年の研修旅行、二回目は就職してから出張で訪れた。高知城に登つたのは一回目の時のみであり、この時は、時間をとつて城を見学した。その頃、高知出身の有名人である



高知城追手門と天守



本丸御殿と天守



天守から見た廊下門とニノ丸詰門

坂本龍馬をテーマとしたNHK大河ドラマ「龍馬伝」が放送される直前で、県全体が「龍馬伝」一色に染まっていた。高知城は一〇年以上前に訪れたにも関わらず、南国らしい荒々しい野面積の石垣が、今でも強烈に印象に残っている。また、現存十二天守の一つであり、追手門と天守閣を同時に臨むことができ、しかも本丸の全体が現存する、日本唯一の城だったことも記憶している。（寺尾）高知城を是非見たいという願望と、寺尾会員の原稿に写真を補充するという名目もあり、筆者（室山）は二〇二二年十月、一泊二日の日程で初めて高知を訪れた。その第一日目は、高知市在住の福田会員にご案内いただいた。

福田さんは、二〇一八年、忠敬没後二〇〇〇年企画として、高知県内における伊能測量隊の足跡を

自転車でたどって、「高知新聞」に「伊能図を巡る 土佐の村々今昔」を毎月掲載。『伊能忠敬研究』にも「土佐の伊能測量」を五回にわたり執筆された。

まず市内各所に残るかつての堀の痕跡、また測量隊の宿所辰巳屋の跡地を歩いて訪ね、次いで高知城に登つた。追手門を入ると、右手を前方に掲げた板垣退助の銅像が立つており、その左側のゆるやかな石段を上がり、右折すると右側に山内一豊の妻見性院と名馬大田黒の銅像が並んでいた。鉄門跡の石段を上ると左手に本丸と天守がせまい、正面に黒塗りの詰門が見えるが、これは二階が二ノ丸と本丸を結ぶ通路（一階は塩蔵）であり、二ノ丸へは石段を右手に登る。二ノ丸には藩主が暮らす居屋敷と奥御殿があつた。二ノ丸から詰門の中を通り、廊下門をくぐると本丸であつた。

本丸は標高44.4メートル、そこにはたま土木工事が行われており、それを迂回して天守が建つ。本丸ではたまたま天守に登つた。天守の外観は、小規模ながら入母屋破風・唐破風など

を用いた・千鳥破風優美な姿で、屋根や窓の位置から四層に見えるが、中は三層六階である。屋根の鰐（しゃちほこ）は珍しく青銅製という。御殿の書院は藩主の上段ノ間を含む正殿や溜ノ間（控室）、また武者隠しがあり、土佐の荒波を表す欄間を備えていた。

次に、車で五台山とその山麓海岸部にある吸江寺へ案内していただいた。この辺りは市街地から離れており、たいへん有難かった。なお、高知城に上の前、はりまや橋公園地下広場に「高知下町浦戸湾風俗絵巻」の陶板画があることを教えていただき、この辺りのかつての姿を写真に収めていた。

五台山金色院竹林寺（真言宗）は四国霊場三十一番札所として、この日も巡礼者でぎわっていた。しかし鎌倉後期に夢窓疎石が開いた吸江庵の跡に建てられた吸江寺（臨済宗）は、東南アジア風の大きな「パゴダ」（戦没者を慰靈する平和の塔）といふが境内後ろに設けられ、絵巻に描かれたかつての風景は失われていた。ご住職とお話をきいたが、「風俗絵巻」のことはご存知ないようであった。かつて寺は直接海に面し、その前に「呑海亭」が海に突き出していたが、沿岸の埋め立てによって大きく変貌していた。福田会員と筆者は高く設けられた防潮堤に上り、現在の浦戸湾の様子を眺めながら、かつて伊能測量隊も見たであろう光景を想像するのみであった。（室山）

※ご多忙の中、時間を割いて、高知市内と測量隊宿所跡、高知城、さらに浦戸湾東岸の竹林寺と吸江寺まで車で御案内いただいた福田仁会員に、心から感謝申し上げます（室山）。

【参考文献】

・『高知県の歴史散歩』山川出版社 二〇〇六年

・『描かれた高知市 高知市史絵図地図編』高知市二〇一二年

・安永純子「伊能測量隊員柴山伝左衛門について（一）・（二）」『伊能忠敬研究』四十四・四十五号二〇〇六年

・伊能忠敬 日本列島を測る—忠敬没後二〇〇一年（後編）伊能忠敬研究会二〇一八年

・戸村茂昭「奥宮正樹「測量日記」の紹介（完結編）」『伊能忠敬研究』八十六号二〇一八年

・福田仁「土佐の伊能測量2高知市（四十町編）『伊能忠敬研究』九十号二〇二〇年

・宮内敏「表紙解説 アメリカ議会図書館蔵伊能大図159号部分（高知周辺）」『伊能忠敬研究』九十一号二〇二〇年

【参考文献】

・サンエイムック『日本の名城を訪ねて』三栄二〇二〇年

・山下景子『現存12天守閣』幻冬舎二〇二一年

訪れていない城が三城もあつて、この機会にとコロナ禍の合間に縫つて手分け訪問した。

江戸時代初期の一国一城令によつて多くの城を失つたが、最大の転機は幕藩体制が崩壊して廢藩置県が断行され、城が無用の長物化したことだろう。「廢仏毀釈」によつて多くの寺院・仏像・宝物類が悲惨な状況に陥つたことは歴史の授業で学ぶが、城郭について触れた教科書は知らない。この連載を通して、現存十二天守にしてもその他の城郭建築にしても、地域の人々の熱い思いやちよつとした偶然の後押しがあつて今日に遺されていることを知つた。かつては幕藩体制の権力の象徴だったが、現在は、一般市民の「我らのお城」となつて親しまれ大切にされていることを実感した。

「現存十二天守」の連載を終えて

河崎倫代

【現存十二天守】とは？

国宝・五城

- ・松本城（長野県松本市）
- ・犬山城（愛知県犬山市）
- ・彦根城（滋賀県彦根市）
- ・姫路城（兵庫県姫路市）
- ・松江城（島根県松江市）

重要文化財・七城

- ・弘前城（青森県弘前市）
- ・丸岡城（福井県坂井市）
- ・備中松山城（岡山県高梁市）
- ・丸亀城（香川県丸亀市）
- ・松山城（愛媛県松山市）
- ・宇和島城（愛媛県宇和島市）
- ・高知城（高知県高知市）

コロナ禍

の中で、県内移動さえ制限された時期もあり、誌上でちょっととしたお城巡りでもしようかと、軽い気持ちで思いついた企画だった。対象を「現存十二天守」に絞つてみたが、支部会員の動向を気にしない藩は無かつただろう。

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第三十一回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

【第八次測量】 (九州第二次) 姫路→宮津→福知山→京都

監修 渡辺一郎
編著 井上辰巳

宿泊日・旧暦 (西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
11 *	10 *	9 *	8 *	7 *	
(2)	(3. 1)	昼夜、小休	(28)	昼夜	(26)
佐治町	伊佐口村枝方町	桟敷村	柏原町	鴨野村	中村町
同 丹波市	同 丹波市	同 丹波市	同 丹波市	同 丹波市	同 多可町
本陣大庄屋中島勘兵衛門 本陣大庄屋中島八郎右衛門	本陣芦田五郎右衛門 芦田達右衛門	庄屋吉右衛門	土田榮助 本陣土田太郎右衛門	弥太郎 本陣鯛屋金藏	庄屋太郎太夫 本陣百姓治郎兵衛
町当街道。此より八王子(中町、三宝院上町)界に打止。又社新迄又う宮端大芝印仲新より佐治町(中町、三宝院派修験院)地。新町より八王子(中町、三宝院上町)界に打止。	伊佐口村枝方町出立。同所より日比宇村、佐川仮橋、御油村、佐次川端円印より沿村、佐川端円印を以て、神前迄測る。式内高座神社へ打上、神前迄測る。式内高座神社、當時明神、別當真言古義高座山松音寺。又佐次川端円印より沿村、佐次川端円印を以て、神前迄測る。式内高座神社へ打上、東芦田村、佐治町(駅場)、新町。又佐次川端大芝印仲新より西芦田村、佐治町(駅場)、新町。	柏原町出立。同所より多田村字尾鬆、石負村内世、横田村、水間下村、市部村入会、左右水間下村、水上村(立場)、南油良村、桟敷村、伊網佐口村枝方町止宿前に打止。	和田村出立。同所より北和田村、和田村、佐治村、字峠、朝坂村、佐野村、稻畠村字岡田、平井町、平井町中町界、京都街道、但馬街道を測、中町、下町止宿を歴て、同町木戸際に打止終。	中村町出立。同所より杉原川仮橋、岸上村、高岸皮多村、鍛冶屋村、牧野新町、小野尻峠国界を歴て丹波国水上郡小野尻村、富田川又山谷川(河原水なし)、字小林、和田村打止。	明樂寺村出立。同所人家前より下野間村字ハキ、野間川土橋、仕出原村、徳畠川土橋、字新田、坂本村、実坂、糀屋村迄測る。此より稻荷へ打上。正一位稻荷大明神、三宝院派修験延命寺。糀屋村より森本村、安坂村、中村町打止。
一二七	一二七	一二七	一二七	一三六	

宿泊日・旧暦	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測
16 *	15 *	14 *	13 *	12 *
(7)	昼夜	(6)	(5)	昼夜
伊福村	浅倉村	養父市場村	高田村	和田山村
同 豊岡市	同 豊岡市	同 養父市	同 養父市	同 朝来市
本陣百姓太郎右衛門 庄屋八郎左衛門	嘉兵衛	本陣酒屋又右衛門 酒屋久兵衛	本陣酒屋又右衛門 酒屋久兵衛	庄屋太郎兵衛
佐治町出立。同所より遠坂峠国界を歴て、柴村 川(神楽川とも)仮橋、市原村、杉谷村・中佐治 次村入会、山垣村、枝平地(立場)、遠坂村枝 徳畑、枝和田、遠坂(本村、駅場)止宿前に打 止。恒星測定	遠坂村出立。(同所より遠坂峠) 字王子本村(立場)、柴川土橋、一品村、枝迫 田、栗鹿村歴て。此より栗鹿神社、栗鹿大明神へ打上、栗 鹿川小流。式内栗鹿神社、栗鹿大明神という。 奉納の古画(即絵馬)三十六歌仙の内絵馬三枚 残れり。又栗鹿村より早田村、枝和賀村、末歳 村、矢名瀬村、矢名瀬町(在町)入会、(駅場)河原町、 大橋、中町止宿前に打止。	遠坂村出立。(同所より遠坂峠) 字王子本村(立場)、柴川土橋、一品村、枝迫 田、栗鹿村歴て。此より栗鹿神社、栗鹿大明神へ打上、栗 鹿川小流。式内栗鹿神社、栗鹿大明神という。 奉納の古画(即絵馬)三十六歌仙の内絵馬三枚 残れり。又栗鹿村より早田村、枝和賀村、末歳 村、矢名瀬村、矢名瀬町(在町)入会、(駅場)河原町、 大橋、中町止宿前に打止。	本陣足立新右衛門 喜兵衛	本陣足立新右衛門 喜兵衛
敷崎村、大屋川舟渡、宇佐ノ神社あり。枝寄宮、右の方、枝丸村 山川向の山下に式内葛ノ神社あり。枝寄宮、右の方、枝丸村 松、網場村字茶屋、字上ノ岡、網場村 入会、八木川舟渡、八鹿村枝大森、上小田鹿 敷崎村、大屋川舟渡、宇佐ノ神社あり。枝寄宮、右の方、枝丸村 山川向の山下に式内葛ノ神社あり。枝寄宮、右の方、枝丸村 上町、枝下町、左古城比丘尼ヶ岳、三谷川 左引込古城跡、宵田村(立場)、江原村、日置 上町、枝下町、左古城比丘尼ヶ岳、三谷川 左引込古城跡、宵田村(立場)、江原村、日置 多田屋村入会、伊福本村人家中止	逗留測。養父市場村出石道追分より出石道測、 仕越、丸山川舟渡、鉄屋米地村、中米地村、左水谷 地川小流、所々にて渡る。奥米地村、左水谷 明神小社。式内水谷神社。枝高中、米地峠、郡米 界、上村枝和屋、弘原川土橋、和屋人家中川端 に打止。それより引帰帰宿。	矢名瀬町出立。同所より中町、下町、大垣村枝下 町、滝田村、桑原村、玉木村、丸山川舟渡、即 豊岡川の上なり、和田山村、右ハリマ・左イセ 街道追分に繋。それより無測、東谷村枝中市市場 より豊岡道を測、土田村(立場)、宮田村、高 田村、堀畠村、豊岡大屋街道追分に繋。それよ り養父市場村、右出石道追分を歴て止宿前に打 止。恒星測定	矢名瀬町出立。同所より中町、下町、大垣村枝下 町、滝田村、桑原村、玉木村、丸山川舟渡、即 豊岡川の上なり、和田山村、右ハリマ・左イセ 街道追分に繋。それより無測、東谷村枝中市市場 より豊岡道を測、土田村(立場)、宮田村、高 田村、堀畠村、豊岡大屋街道追分に繋。それよ り養父市場村、右出石道追分を歴て止宿前に打 止。恒星測定	二二四
一二四	一二四	一二八	一二八	一二七

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	1月5日	支隊	20	19	18	17	
						(2.24)	向但馬国測	*	*	*	*	
溝口村	豊岡町中町	湯島村	簸磯村	豊岡町中町	国府市場村、新村、堀村三ヶ村入会字手辺	堀村三ヶ村入会字手辺						
兵庫県姫路市	同 豊岡市	同 豊岡市	同 豊岡市	同 豊岡市	同 豊岡市	同 豊岡市						
医師小林綱平	丹後屋庄三郎 二方屋又右衛門 本陣鍋屋良右衛門	庄屋七右衛門	臨済宗福泉寺	本陣鍋屋良右衛門 二重屋又右衛門 郷野屋善左衛門	本陣鍋屋良右衛門 二重屋又右衛門 郷野屋善左衛門	本陣鍋屋良右衛門 二重屋又右衛門 郷野屋善左衛門	与三左衛門	本陣酒屋太左衛門	本陣酒屋太左衛門	本陣酒屋太左衛門	本陣酒屋太左衛門	
仁豊野村出立。 但馬街道追分より但馬街道測、須賀院村、丹波 谷川土橋、枝保喜、左八徳山道追分、此より山 添に天台宗八徳山八葉寺あり。犬飼村字山口、 小川石橋、枝出屋敷、左雪彦山道追分、枝市 場、小川石橋、中野村・中屋村入会、広瀬村、枝市 場、溝口村止宿入口に打止終。	湯島村出立。乗船豊岡町着。	左曹洞宗養源寺、右一向宗光行寺、同町に小田井町、 三座合いわく小田井大明神。小印より六地蔵 村、一日市村奈佐川舟渡、森津村字平石、上 山村枝二見、簸磯村、来日村、往来より左 込、武内久流比神社。今津村、湯島村人家前 止。(湯之前橋の前)に繋終、それより本陣前 に打中引	豊岡町出立。同所止宿前より下町、小田井町、 渡場出石道追分を歴て、豊岡市中、京口町、 町町、小屋崎町、左大手門、土橋、宵田町、 中新川船町止宿前に打止	入会手辺出立。出石・豊岡街道追分より野々 村、池上村、上石村、八代川小流、枝水生に代庄 印を残(別手繋の為)。入会芝村、佐野村(外 称上佐野)、枝納屋(此所より湯島へ船場、 舟行四里計)社印を残迄測り。此より雷神社へ 打上、城崎郡佐野村(外称奥佐野)神前迄測 る。式内雷神社、芳峯雷天神という。又社印よ り、枝千本、佐野本村、九日上ノ町村、女代社 前を歴て神前迄測る。式内女代神社。九日中ノ 町村、九日下ノ町村、大磯村枝尻畠、森津村字平石、 豊岡川船町止宿前に打止	伊福村出立。同所止宿前より松岡村、土居村枝 辺(立場)、止宿前を歴て、出石・豊岡道追分 迄測る。此より出石道へ仕越。堀村枝中野、 野々庄村、中郷村、氣多川、片間坂(郡界)、 出石郡片間村、三木村人家下地藏堂前にて打 止。それより無測手辺へ帰宿。	伊福村出立。同所止宿前より松岡村、土居村枝 辺(立場)、止宿前を歴て、出石・豊岡道追分 迄測る。此より出石道へ仕越。堀村枝中野、 野々庄村、中郷村、氣多川、片間坂(郡界)、 出石郡片間村、三木村人家下地藏堂前にて打 止。それより無測手辺へ帰宿。	一二四	一二四	一二四	一二四	一二四	
一四一	一二四	一二四	一二四	一二四	一二四							大図番号

宿泊日・旧暦	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測
10	9	8	7	6
(3. 1)	(28)	(27)	昼夜	(26) 昼休
猪篠村字追上町	栗賀町村	屋形村	西川辺村枝出屋敷	福崎新村字新町 前の庄村枝松ノ本
同 朝来市	同 神河町	同 市川町	同 福崎町	同 姫路市 姫路市
問屋次郎右衛門 医師渡辺見龍	本陣高橋伝蔵 問屋清太夫	井筒屋徳兵衛	庄屋佐十郎 鹿島屋孫四郎 (酒造家)	庄屋弥左衛門 庄屋弥左衛門
河原町、猪篠本村 (駅場)、字追上町、問屋字大	栗賀町村出立。同所制札前より中村東川端、右記に詳なりと。東川土橋、下吉富村、上吉田村、右に大杉)、右引込春日社、別当高野山正智院末春日山安竜寺。右安竜寺門前、字烟河原、多可郡大山下村、猪篠川土橋、三度渡、中原中村字添ヶ井、字百合坂、猪篠村字今西、問屋	丹波道追分、右引込山添に真言宗高野山正智院末金樂山法樂寺、世に曰いわく大寺、開基法道仙人。三才図会。當寺縁記に云。元享釈書峰相	福崎新村字新町出立。同所但馬・因幡道追分より但馬街道測、市川舟渡、中央界、神東郡西野々村、辻川村、右酒見法条道追分、北野村、木虎川石橋、井ノ口村、左に巡見使街道、市川渡舟場、川向は山崎村道追分、西田中村、右丹波道追分、瀬加川、西川辺村枝出屋敷、浅野村、屋形村、右古城跡字飯盛山、右引込んで山添に陣屋、屋形本村 (駅場)、左福渡道追分、舟渡場、右に制札、止宿前打止終。	溝口村出立。同所止宿入口より高橋村枝山越、左名草道追分、西治村枝数叶、福崎新村、名草川、字新町、右但馬・左因幡街道追分を歴て因幡道安志領界、野畠村へ繋測。又西治村、左姫道路追分、西谷村、久畠村、左姫道路追分、谷川土橋、飾西郡前の庄村枝岡ノ内字七曲、枝松ノ本、止宿前打止終。

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
1 3	1 2	1 1	真弓村字真弓宿	庄屋和兵衛	猪篠村追上町出立。同所問屋前より猪篠川土橋、字茶ヶ市、菅谷川、字追上峠、猪篠川、神西郡真弓村字追上峠、谷川、宮の谷川土橋、右神に大歳社、真弓村（本村、駅場）、字真弓宿、市川真弓橋、森垣村、銀山入口取締所、三辻を歴て銀山町入口迄横物。但馬国朝来郡生野銀山町字播磨門前打止。此門内銀山町也。銀山入口町、鍛治屋町、御料所町に銀山御役所（即陣屋）あり。又森垣村三辻より陣屋元、生野銀山回枝峠、横物銀山町入口但馬門迄測る、此門内銀屋町とい。宇生野峠、此より南姫路・北丹波、次第下り、円山村枝小田和、谷川、小川、岩屋谷村、奥山川土橋、津村小村字上村、字下庄屋九郎右衛門	二二八
(4)	昼休	(3)	昼休	小休	同 朝来市	同 朝来市
八木町上八木村 下八木村	広谷村	和田山村	竹田町米屋町	物部村	山口村	岩屋谷村
同 養父市	同 養父市	同 朝来市	同 朝来市	同 朝来市	同 朝来市	同 朝来市
庄屋銀右衛門 年寄勝右衛門	本陣条右衛門	紙屋十右衛門 竹田屋左右衛門	年寄六右衛門	庄屋儀兵衛	百姓武十 酒屋九郎三郎	庄屋和兵衛
和田山村出立。無測、養父郡堀畑村、豊岡道追分より大屋街道測、上野村枝谷間地、大屋橋、左新宮山万福寺、米里村、高柳村、山中八木村合三ヶ村、右古城跡、宗光照寺、山坂、永昌寺、中八木村、右古城跡、宗光照寺、山坂、上八木村打止。下八木村、右古城跡、宗光照寺、山坂、板橋、中八木村、右古城跡、宗光照寺、山坂、上八木村合三ヶ村、家数百七十三軒。町村向滝多朝倉大並、宗川谷並家、	和田山村、左引込禪宗神照院、字大門寺、左に觀音新井村、左引込禪宗親音寺、日蓮宗計古井村、左引込禪宗大通院、物土橋、立脇村、左ボン天帝釈社、左禪宗大通院、土橋、竹田町、字新町、小溝石橋。右夷松あり、妙泉寺あり、安井庄下村、安井川土橋、久留引川土橋、西枝田村字小谷、和田宗円山道追分、山奥川土橋、山口本村、左播州一宮通り岩屋谷村、奥山川土橋、津村小村字上村、字下村、津村小村、山口村、左播州一宮通り山崎宿、左引込淨土宗西念寺、止宿問屋場前打止。	山口村問屋前より右に薬師堂、山口川坂橋、左引込禪宗神照院、字大門寺、左に觀音新井村、左引込禪宗親音寺、日蓮宗計古井村、左引込禪宗大通院、物土橋、立脇村、左ボン天帝釈社、左禪宗大通院、土橋、竹田町、字新町、小溝石橋。右夷松あり、妙泉寺あり、安井庄下村、安井川土橋、久留引川土橋、西枝田村字小谷、和田宗円山道追分、山奥川土橋、山口本村、左播州一宮通り山崎宿、左引込淨土宗西念寺、止宿問屋場前打止。	山口村問屋前より右に薬師堂、山口川坂橋、左引込禪宗神照院、字大門寺、左に觀音新井村、左引込禪宗親音寺、日蓮宗計古井村、左引込禪宗大通院、物土橋、立脇村、左ボン天帝釈社、左禪宗大通院、土橋、竹田町、字新町、小溝石橋。右夷松あり、妙泉寺あり、安井庄下村、安井川土橋、久留引川土橋、西枝田村字小谷、和田宗円山道追分、山奥川土橋、山口本村、左播州一宮通り山崎宿、左引込淨土宗西念寺、止宿問屋場前打止。	山口村問屋前より右に薬師堂、山口川坂橋、左引込禪宗神照院、字大門寺、左に觀音新井村、左引込禪宗親音寺、日蓮宗計古井村、左引込禪宗大通院、物土橋、立脇村、左ボン天帝釈社、左禪宗大通院、土橋、竹田町、字新町、小溝石橋。右夷松あり、妙泉寺あり、安井庄下村、安井川土橋、久留引川土橋、西枝田村字小谷、和田宗円山道追分、山奥川土橋、山口本村、左播州一宮通り山崎宿、左引込淨土宗西念寺、止宿問屋場前打止。	山口村問屋前より右に薬師堂、山口川坂橋、左引込禪宗神照院、字大門寺、左に觀音新井村、左引込禪宗親音寺、日蓮宗計古井村、左引込禪宗大通院、物土橋、立脇村、左ボン天帝釈社、左禪宗大通院、土橋、竹田町、字新町、小溝石橋。右夷松あり、妙泉寺あり、安井庄下村、安井川土橋、久留引川土橋、西枝田村字小谷、和田宗円山道追分、山奥川土橋、山口本村、左播州一宮通り山崎宿、左引込淨土宗西念寺、止宿問屋場前打止。	二二八
二二八	二二八	二二八	二二八	二二八	二二八	二二八

											宿泊日・旧暦 (西暦)	
18		17		16		15		14		宿泊地	現・市町村名	
(一) 9)	昼夜 休	(一) 8)	昼夜 休	小休	(一) 7)	昼夜 休	(一) 6)	(一) 5)	昼夜 休	関ノ宮村	宿泊地	
知見村	九鹿村枝岡	高柳村	上八木村	関ノ宮村	村岡町	和田村	村岡町	福岡村	同	関ノ宮村	現・市町村名	
同 豊岡市	同 養父市	同 養父市	同 香美町	同 香美町	同 香美町	同 香美町	同 香美町	同 香美町	同 香美町	同 香美町	宿泊宅	
百姓代与左衛門	治郎右衛門	作左衛門	勝右衛門	市郎右衛門	油屋小谷与右衛門	尾白屋今井治右衛門	酒屋半治郎	油屋小谷与右衛門	尾白屋今井治右衛門	百姓利左衛門 友四郎	市郎右衛門	
百姓代与左衛門	高柳村出立。 氣多街道測、右に七面社、梅坂峠、九鹿村、高柳 村、又九鹿村、佐川仮橋、枝岡、右八鹿道追分、 止宿入口打止	村岡町出立。 無測、関ノ宮村、上八木村、高柳	村へ着	村岡町出立。 無測、関ノ宮村、上八木村、高柳	穴神。又字在郷町より右引込淨土宗權淨寺、右岩 穴の中に若王神、鹿田村、入江村、右美含道を無測。 左因州街道追分に打止。此より因州街道を無測。	敷、左引込天台宗法雲寺、中小屋川土橋、字在 郷町を歷て伊津岐大明神へ打上。式内二座(黒 野神社、志津美神社)、合いわく伊津岐大明 神。又字在郷町より右引込淨土宗權淨寺、右岩 穴の中に若王神、鹿田村、入江村、右美含道を無測。 左因州街道追分に打止。此より因州街道を無測。	村岡町逗留測。村岡町字本町止宿前より右陣屋 入戸木戸、それより陣屋迄二町計、左右家中屋 町家数二百三十軒)止宿前に打止。	村岡町逗留測。村岡町字本町止宿前より右陣屋 入戸木戸、それより陣屋迄二町計、左右家中屋 町家数二百三十軒)止宿前に打止。	村岡町(陣屋、駅場、字本右 門、鐘樓、社前に打止。又八幡宮入口より福岡 (駅場)、制札前打止。	村岡町(陣屋、駅場、字本右 門、鐘樓、社前に打止。又八幡宮入口より福岡 (駅場)、制札前打止。	福岡村出立。同所制札前より右に觀音堂、黒田 村、日影村、笠波峠、字反田、作山川板橋、輝 山川土橋、輝山村、大槻村、宇本右 門、鐘樓、社前に打止。又八幡宮入口より福岡 (駅場)、制札前打止。	特記・天体観測
一二四	一二四	一二八	一二八	一二八	一二四	一二四	一二四	一二四	一二四	一二四	大図番号	

1月21日			
(12)	先手中食	後手小休	後手昼休
出石城下宵田町 八木町 田結庄町	水上村	宮内村	福居村
同 豊岡市	同 豊岡市	同 豊岡市	兵庫県豊岡市
吹田屋茂兵衛 伏見屋治郎左衛門 鍋屋徳助	庄屋惣右衛門	大庄屋 神床市郎右衛門	庄屋弥平
宿着。 渡、出石町、右横町あり、出石市中の内河原町に印を残。右引込即市中町屋裏町続、左外構の堀あり、市中入口鉄砲町橋に打止。それより止。	浦、福居村、島村、坪井村、又宮内村一ノ宮追分先手の初に繋。此より一ノ宮打上、木華表、随神門、社前に打止。一宮大明神、式内伊豆志通名五条いう用水溝川土橋、出石郡伊豆村枝北浦、福居村、島村、坪井村、又宮内村一ノ宮追俗にいう)、伏村、清冷寺村枝白上(立場)、	豊岡中町出立。(後手一大磯村、出石豊岡道いう)、江本村・塩津村入会、枝塩津、氣多郡八社宮村、左木内村の内に古城跡、字見開山と(立場)、	一二四

宿泊日・旧暦			(西暦)		
24 *			23		
(15)			(14)		
小谷村	口矢根村	水石村	同	出石城下 宵田町 田結庄町 八木町	出石城下谷山町
同 豊岡市	同 豊岡市	同 豊岡市	同	同 豊岡市	同 豊岡市
百姓甚右衛門 直右衛門 本陣庄屋治右衛門	庄屋宇平治	医福田聞礼	同	吹田屋茂兵衛 伏見屋治郎左衛門 鍋屋徳助	法華宗京都妙顯寺末 一乘山經王寺
土橋、字橋向、小谷村本村止宿測所に打止。	枝長谷	丹後國へ向て測。伊能他四名、京街道市中出口より、新町内字鰯、雜々川土橋、寺坂村	出石町逗留、一手測。永井他三名、上村枝和屋村字伊福辺、右式内大生部兵主神社、伊福辺大明神という、別當真言宗不動院、鍛冶屋村人家	出石町逗留、總一手市中測。市中河原町入口より、谷山川土橋、柳町四ツ辻迄測る。又市中出	
市場峠、又矢根峠とも、南尾村字橋本、出合村三原村界に繋。又左丹後道追分迄測る。比より別手初、出合	水石神社、右に古城跡、右川向桐野村内、式内	出石町、水石村、右川向桐野村内、式内	出石町、水石村、右川向桐野村内、式内	出石町、水石村、右川向桐野村内、式内	出石町、水石村、右川向桐野村内、式内
一二三	一二三	一二三	一二四	一二四	一二四

宿泊日・旧暦	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測
29*	28*	27*	26*	25*
(20)	(19)	(18)	昼夜	(16)
中竹田村	福知山城下菱屋町	下天津村	漆端村	久烟村
兵庫県丹波市	同 福知山市	同 福知山市	京都府福知山市	同 豊岡市
百姓 本陣百姓吉蔵 百姓 庄兵衛 百姓 助	本陣三右衛門 治郎兵衛	本陣庄屋三右衛門 百姓新蔵 百姓佐兵衛	庄屋庄右衛門	本陣百姓太兵衛 一向宗光蓮寺 百姓酒屋利助
上、 高橋川土橋、 本村字大森測所前 で打止。水字 枝高畠、枝 塩津峠、水 上郡下竹田 村字	福知山城下出立。 堀村地内堀端より、枝蛇ヶ 端、土師村、竹田川端京都都 街道追分を歴て、京口門板橋 市中限、堀村地内堀端迄測る。 又吳服町、京町界より市中裏町 通測外、紺屋町横町に繋る。	下天津村出立。 無測、天田郡荒川村字狭間、 知山・宮津街道追分より福知山 街道測、字下荒 瀬の木川土橋、界川土橋、国界迄 測り、丹後國 加佐郡日藤村地内字界川(御用抗) れより引帰下天津村へ着。	一ノ宮村出立。 同所測所下より、口日尾村枝常 願寺村、口日尾村、夷村、野花村、立原村、牧 村、小田川坂橋、荒河村字狭間、福知山宮津街 道追分迄測る。此より丹後宮津街道測、漆端 橋土橋、一ノ宮村本村測所下に打止。	小谷村出立。 同所止宿測所より、正法寺村、平 田村宇淀、栗尾村枝貝田、佐田村枝平地、枝大 貝、字石原、久烟川坂橋、久烟村、同村人家中 測所下に打止。
一二七	一二七	一二七	一二七	一二三

宿泊日・旧暦	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測					
				文化 1年 2月	30 *	30 *	30 *	30 *	
(24)	(23)	昼夜	(1814)	1 *	1 *	1 *	1 *	1 *	
追入村	柏原町	黒井村	小多利村	国料(領)村	大吉利村字長砂	丹波市	三治郎	中竹田村出立。同所宇大森測所前より上竹田村、余田川土橋、字島村、岡本村字茶屋前、上垣村枝市島、上田村枝市島、国料(領)川橋、字繩手、梶原村、小多利村、同測所下を歴此より止宿測所へ向。大吉利村、式内阿陀岡神社、別当天台宗神力寺。神前迄測る。滝川小橋、字ノケ坂、字長砂、右黒井道追分迄測る。野上野村字塙ヶ谷、国料(領)村、国料(領)川土橋、本村人家中、右黒井道追入道追分にて打止。	
同 丹波篠山市	同 丹波市	丹波市	丹波市	兵庫県丹波市	本陣庄屋半太夫	丹波市	仁右衛門	中竹田村出立。同所宇大森測所前より上竹田村、余田川土橋、字島村、岡本村字茶屋前、上垣村枝市島、上田村枝市島、国料(領)川橋、字繩手、梶原村、小多利村、同測所下を歴此より止宿測所へ向。大吉利村、式内阿陀岡神社、別当天台宗神力寺。神前迄測る。滝川小橋、字ノケ坂、字長砂、右黒井道追分迄測る。野上野村字塙ヶ谷、国料(領)村、国料(領)川土橋、本村人家中、右黒井道追入道追分にて打止。	
辰藏 (喜兵衛)	本陣喜蔵 (喜兵衛)	岸四郎右衛門	忠吉 藤左衛門	本陣庄屋半太夫 本陣由良新左衛門	国料(領)村 道を測、国料(領)村、黒井追入追分より石負道を測、国料(領)川坂橋、多田村、黒井村を歴て兵主神社へ打上。式内兵主神社、右に太神宮、左に春日社、(奥に影向石というあり。大石にして、その石上に楓の大木纏着て苔むしたり。当社より疱瘡守いする)、別当古義真言宗高野慈照院末兵主山神光寺。右の方に古城跡あり、古城山という。又黒井村より平松村、朝日村、石細村、歌道谷村、坂村、北野村、石負村石負町入日追分碑に繋。それより無測にて柏原町着	本陣庄屋半太夫 本陣由良新左衛門	本陣庄屋半太夫 忠吉 藤左衛門	本陣庄屋半太夫 仁右衛門	中竹田村出立。同所宇大森測所前より上竹田村、余田川土橋、字島村、岡本村字茶屋前、上垣村枝市島、上田村枝市島、国料(領)川橋、字繩手、梶原村、小多利村、同測所下を歴此より止宿測所へ向。大吉利村、式内阿陀岡神社、別当天台宗神力寺。神前迄測る。滝川小橋、字ノケ坂、字長砂、右黒井道追分迄測る。野上野村字塙ヶ谷、国料(領)村、国料(領)川土橋、本村人家中、右黒井道追入道追分にて打止。
追入村 人家中止宿迄測る。	柏原町出立。同所京都但馬道追分より京都道測、本町八幡宮前を歴て八幡へ打上。八幡山八幡宮、左神功皇后、右姫太神。六十六部納経掛あり天工なり)、追入村、国料(領)峠へ測、古市場町、新町、大工町、中村、見長村、下小倉村字茶屋元、上小倉村、茹塙神社前迄測。式内茹塙神社、別当古義真言宗龍泉寺。字鹿ノ田金ヶ坂峠(此峠の右方岩石険阻の中に石橋の自然にあり)。本町八幡宮前より石田町大手門、古市場町着	2 *	2 *	2 *	2 *	2 *	2 *	2 *	
		一二七	一二七	一二七	一二七	一二七	一二七	一二七	

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測
7 *	6 *	5 *	4 *		
(28)	(27)	昼夜	(26)	昼夜	(25)
市原村	古市村	犬飼村	笛山城下二階町	小坂村佐仲峠	北野新村
同 丹波篠山市	同 丹波篠山市	同 丹波篠山市	篠山市	篠山市	同 丹波篠山市
本陣庄屋庄右衛門 年寄太兵衛 肝煎与一	佐 幾之助 兵衛	本 陣榮三郎 忠右衛門	本 陣喜右衛門 又十郎	久下弥太夫	本 陣庄屋武兵衛 百姓忠左衛門
古市村制札前より清水寺へ測、不來坂村、不來坂峠、小野原村、市原村枝今田、木津川土橋、市原村止宿測所迄測る。それより国界を歴て、左側加東郡清水寺境内、上加茂村道追分を以て、此より左右清水寺境内、即加東郡七曲峠歴(又丹波坂といふ)。右(智足院、千寿院、清音院、吉祥院、瑞柳院、潮音院)、左(金院、明静院、智光院、法輪院)、外に八院、筑前守より制札、禁制、播州清水寺。それより柴堂、前堂千手觀音(恵心僧都作)、右鐘(銘秀頼公制)、宝物(本堂にあり)、奉鑄推鐘播丹摶州清水寺、文明十四年壬寅五月四日)、宝物(本堂にあり)、秀頼公制、羽月五郎兵衛より書り、市原村へ着。	打 止。	笛山出立。 多紀郡東岡屋村、 清水寺道を測、東吹村、一瀬川、宇土村、大沢 村、枝杉村、追分に繋。犬飼村(立場)、矢代村 枝新村、波賀野村、右引込枝見内村、式内二 神社、天台宗松尾山高仙寺持。字新田、古市 (駅場)、制札前測所、大坂道・清水寺道追分 に打止終。	北野新村出立。同所大坂京都道追分より京都街道追分迄測る。比より国料(領)打出、佐仲峠へ繋測。宮田川、板井村字板井、左引込式内川田多々奴比神社、別當天台宗蓮花寺。本村上板井、小坂村同村地内佐仲峠に繋。又宮田村より、西谷村、大野村、川北村、西岡屋村枝有居島、東岡屋村、清水寺道追分を以て、笛山市中下番所、上西町、魚屋町、二階町、右大手門、西町、左淨土宗法乗山妙福寺、西町、木戸右に、二に打止。	北野新村、大山下村枝北野新村(立場)、同所測所、当大坂京都追分迄測る。此より大坂街道仕越。枝北野村、一ノ瀬川仮橋、古佐村、味間村、皆川小流、枝新村(立場)、大沢村、大坂道笛山道追分にて打止。それより無測、大山下村枝北野新村へ着。	追入村出立。同所人家中止宿より大山上村、右坂京都追分迄測る。此より大坂街道仕越。枝北野村、一ノ瀬川仮橋、古佐村、味間村、皆川小流、枝新村(立場)、大沢村、大坂道笛山道追分にて打止。それより無測、大山下村枝北野新村へ着。
一三六	一三六	一三六	一三六	一三六	大図番号

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	
					18	17
((昼休	芥川宿			
8)	7)					
鷄冠井村向日町	大山崎宿	同 高槻市	河内屋吉兵衛			
同 向日市	京都府大山崎町					
富永屋甚左衛門	菱屋作兵衛					
大山崎宿出立。山崎庄地内守護不入碑より愛宕道測、領円明寺村、往還より左引込式内外倉神社。小泉川小流、右調子村、左側友岡村、左右友岡村字横山、神足村、神足町淀街道追分を立て式内神足神社へ打上。淀街道追分より、右側古市村、左側開田村、右側古市村・神足村、左側開田村、右側馬場村、左側開田村、右側上植野村字島坂、右側鷄冠井村、左側向日町(即鷄冠井村内)を歴て、此より同村法華檀林へ打上、日蓮宗檀林迄測る。鷄冠山北真經寺(通妙院日祥開基境内坊寮二十軒)。	世音。裏門を出、中城村、赤大路村、富田村、吉峯道追分を歴て富田村へ打上。北条村、富田本村(町並家作おほし)。妙心寺派慈雲山普門寺。西本願寺掛所富山本照寺、同村京街道出口(即人家限り)打止終。又吉峯道追分より、五百住村、宮田村、氷室村、長崎街道に出、追分碑に繋終。それより無測、芥川宿、大山崎宿へ着。	安威村出立。同所より初、同村より西引込、山下に大職冠鎌足公塚あり、枝十日市、耳原村、西国街道追分へ出、追分碑に繋。此より総持寺道測。河西原村、右畠田村・左五日市村、田中茨木村(町並にて二十二町人家)、同村魚屋町内総持寺道追分を歴て梅林寺へ打上、門前迄測る。淨土宗智音院末安養山梅林寺。此寺は城跡也。又当寺門前より、茨木大明神前迄測る。本社(春日大明神、素戔鳴尊)、八幡宮、本社後に地主式内天石門別神社。本社の右に式内幣久良神社。又魚屋町内総持寺道追分より総持寺道を測、戸伏村、安威川石橋、庄村、総持寺村、総持寺門前迄測る。下馬札、制札、二王門、古義真言宗、補陀落山總持寺、本堂千手觀音。裏門を出、中城村、赤大路村、富田村、吉峯道追分を歴て富田村へ打上。北条村、富田本村(町並家作おほし)。妙心寺派慈雲山普門寺。西本願寺掛所富山本照寺、同村京街道出口(即人家限り)打止終。又吉峯道追分より、五百住村、宮田村、氷室村、長崎街道に出、追分碑に繋終。それより無測、芥川宿、大山崎宿へ着。				
帝御車塚あり、左に淳和帝御陵あり、丹波波街道に出、打止。本村和田中に龜山(世に櫻原といふ)、右京都・左龜山追分迄測る。此より龜山道仕越。左右寺戸村、物集女村、右田中天鐘社、春日社、稻荷社、三島社、右神社、岡松社、外揺拝所六ヶ所。名所向日山。又向日町より向日町測所を歴て、右側寺戸村(向日町といふ)を歴て、此より同村法華檀林へ打上、日蓮宗檀林迄測る。鷄冠山北真經寺(通妙院日祥開基境内坊寮二十軒)。						

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測
3	2				
(23)	昼夜	(23)	昼夜	口大野村	
岩滝村	中野村枝大垣	岩滝村	京丹後市	庄屋儀十郎	
同 与謝野町	同 与謝野町	同 与謝野町	同 与謝野町	佐喜藏右衛門	
佐喜藏 庄屋嘉右衛門	一ノ宮式内籠ノ神社 神主海辺常之進	佐喜藏 庄屋嘉右衛門	佐喜藏 庄屋嘉右衛門	佐喜藏 庄屋嘉右衛門	
成聖寺 持智院 外に吉 風吹渡 下り乗 船して 岩滝村 へ帰宿	正院 觀世音 寶物、掛 物、古歌、 慈性院、明 王院、開山 慶雲元年信 慈上人、成相 音、坊中本 野の聖院、 中本成相打 い明乗	正院 觀世音 寶物、掛 物、古歌、 慈性院、明 王院、開山 慶雲元年信 慈上人、成相 音、坊中本 野の聖院、 中本成相打 い明乗	正院 觀世音 寶物、掛 物、古歌、 慈性院、明 王院、開山 慶雲元年信 慈上人、成相 音、坊中本 野の聖院、 中本成相打 い明乗	正院 觀世音 寶物、掛 物、古歌、 慈性院、明 王院、開山 慶雲元年信 慈上人、成相 音、坊中本 野の聖院、 中本成相打 い明乗	正院 觀世音 寶物、掛 物、古歌、 慈性院、明 王院、開山 慶雲元年信 慈上人、成相 音、坊中本 野の聖院、 中本成相打 い明乗
二二三	二二三	二二三	二二三	二二三	大図番号

6		5		4		(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測
(27)	昼休	(26)	昼休	(25) 昼休共	宮津城下本町					
内官村	小田村枝中ノ茶屋	小田村枝平石	北村							
同 福知山市	同 宮津市	同 宮津市	同 宮津市							
神主河田伊賀 醫師的場全柳	組頭茂右衛門	喜七 久左衛門	本陣伝左衛門							
三辻に打止。 本村(町並家七十八軒)、右太神宮参詣道追分	爪割水出立。 川土橋、右岩戸道追分、毛原村字熊坂峠、二瀬 村、右森中に山ノ神社あり。上岸川土橋、内宮	小田村枝平石出立。 古城跡、古寺村字二瀬川、二瀬川土橋、右大江 山鬼ヶ岩屋道追分、右に庭森大明神社あり、二瀬 村、馬駅、左引込曹洞宗盛林寺、小田村字香 籠、字清水、切戸川土橋、打止。小田村枝平石へ帰着。	宮津城下出立。 中限)、宮村、左に古城跡、北(喜多)村、右 山智源寺、切戸町、切戸川切戸橋、松原町(市 洞、字普甲峠、字爪割。(峠越の人馬休息所)、右 に分宮社、右大久保稻荷大明神、右曹洞宗松渓 仏性寺。四辻街道打止。此より真直城内入口大 手門、左へ曲て海辺打下、海辺小磯浜に出、寅 年(式外)の測へ繋、宮津本町着。それより乗船し九瀬 町、本町、西ノ堀川石橋、右引込一向宗須弥山 戸の文殊、天ノ橋立一覧。臨濟宗天橋立智恩寺 宿。にて宝物を見る。又橋立明神へ行、宮津本町帰	右京道追分、野田川鞍橋、須津村、右加悦谷道 追分、奥山川石橋、右に須津彦・須津姫大明神 合社あり。字須津峠、小川一枚石、字小浜を壓 て海辺砂浜寅年の重測。宮津町、小高所に旧 跡、犬ノ堂あり。丹後国宮津城下市中、杉末町 組屋敷より、右に稻荷社、川向町を歴て山王社 打上、字山王下華表、拝殿社前に打止。本社式 外山王大権現、右脇式内杉末神社、左脇蛭子社 跡。又川向町より山王橋、白柏町、同横 町、本町、西ノ堀川石橋、右引込一向宗須弥山 手門、左へ曲て海辺打下、海辺小磯浜に出、寅 年(式外)の測へ繋、宮津本町着。それより乗船し九瀬 町、本町、西ノ堀川石橋、右引込一向宗須弥山 戸の文殊、天ノ橋立一覧。臨濟宗天橋立智恩寺 宿。にて宝物を見る。又橋立明神へ行、宮津本町帰	岩滝村出立。弓木村字大内追分より宮津道測、 右京道追分、野田川鞍橋、須津村、右加悦谷道 追分、奥山川石橋、右に須津彦・須津姫大明神 合社あり。字須津峠、小川一枚石、字小浜を壓 て海辺砂浜寅年の重測。宮津町、小高所に旧 跡、犬ノ堂あり。丹後国宮津城下市中、杉末町 組屋敷より、右に稻荷社、川向町を歴て山王社 打上、字山王下華表、拝殿社前に打止。本社式 外山王大権現、右脇式内杉末神社、左脇蛭子社 跡。又川向町より山王橋、白柏町、同横 町、本町、西ノ堀川石橋、右引込一向宗須弥山 手門、左へ曲て海辺打下、海辺小磯浜に出、寅 年(式外)の測へ繋、宮津本町着。それより乗船し九瀬 町、本町、西ノ堀川石橋、右引込一向宗須弥山 戸の文殊、天ノ橋立一覧。臨濟宗天橋立智恩寺 宿。にて宝物を見る。又橋立明神へ行、宮津本町帰	一二三	一二三	一二三	一二三	一二三

				宿泊日・旧暦 (西暦)	
8		7			
(29)	昼夜	(28)		宿泊地	
志高村	桑飼上村字宇谷		河守町	宿泊地	
同 舞鶴市	同 舞鶴市		同 福知山市	現・市町村名	
百姓民之進 三右衛門	曹洞宗惠覚山莊嚴寺		門屋長十郎 衣屋六兵衛	宿泊宅	
河守町出立。同所枝関、丹波街道 分より田辺街道測、河守川仮橋、 上野村、北有路村、左式内阿良須神社、 由良川、字狭迫、狭迫峠、桑飼上村、 當時いう十倉明神。左大川(船渡)此川名三つ、 当时いう十倉明神。原川土橋、右に苗城 街道跡、當時伊知布西神社と云い、 打止。その字、水字、當井戸、字字谷、 う、桑飼下村、右山根に式内伊知布西神社、 當時大川を渡、志高村へ渡船場、 志高村へ着。		<p>内宮村出立。追分三辻より内宮へ打上げ、右に笠堂(参詣人笠を置所)、華表、道中に二周に杉三本あり、字三本杉という。右本山中と和泉式部の塚跡に石塔あり。社前に打止。式外佐官内宮社、祭神天照太神、(鎮座崇神天皇三十九年和州笠縫の里より此所に御遷座あり。仁天皇二十六年伊勢国度会郡五十鈴川上に御座)、末社八十座。又社前より天ノ岩戸へ打瀬川端に出る(此所にて岩戸川という)、左川岸大巖石絶壁也。それに岩戸大明神社上、仏性寺村、華表、又華表、左神楽殿あり、右岩戸川中に大岩あり。旧跡御座石、神楽石。此辺総名真井ヶ原といふ。</p> <p>又内宮村三辻より街道測、人家町並七十八軒(世人本伊勢といふ)、上岸川宇治橋、右山添森中に三日月大明神、上岸川一本橋、五十鈴川(高橋)、二俣村字馬谷、字大畑、字岡ノ段、奥谷川土橋、字向山、天田内村枝平を歴て外宮へ打上げ、華表社前迄測る。外宮社(与佐官真尊、名井ヶ原、豊受皇太神宮)、祭神国常立尊、(垂仁帝御宇より四百八十年を歴て人王二十二代雄略天皇御宇に伊勢国度会郡外官へ遷座)、末社四十座。又天田内村枝平より街道測、西川宮川橋、河守町枝関村、左田川橋、右丹波街道追分を歴て丹波街道国界迄測。河守町居町、右山根に古城跡、右に古城跡、右に右山根に古城跡、右引込淨土宗淨仙寺、右に古城跡、右に舟戸権現の社、公庄村、谷小川土橋三間、日藤村字界川に繋終。それより無測、河守町へ帰着。</p> <p>内宮村出立。追分三辻より内宮へ打上げ、右に笠堂(参詣人笠を置所)、華表、道中に二周に杉三本あり、字三本杉という。右本山中と和泉式部の塚跡に石塔あり。社前に打止。式外佐官内宮社、祭神天照太神、(鎮座崇神天皇三十九年和州笠縫の里より此所に御遷座あり。仁天皇二十六年伊勢国度会郡五十鈴川上に御座)、末社八十座。又社前より天ノ岩戸へ打瀬川端に出る(此所にて岩戸川という)、左川岸大巖石絶壁也。それに岩戸大明神社上、仏性寺村、華表、又華表、左神楽殿あり、右岩戸川中に大岩あり。旧跡御座石、神楽石。此辺総名真井ヶ原といふ。</p> <p>又内宮村三辻より街道測、人家町並七十八軒(世人本伊勢といふ)、上岸川宇治橋、右山添森中に三日月大明神、上岸川一本橋、五十鈴川(高橋)、二俣村字馬谷、字大畑、字岡ノ段、奥谷川土橋、字向山、天田内村枝平を歴て外宮へ打上げ、華表社前迄測る。外宮社(与佐官真尊、名井ヶ原、豊受皇太神宮)、祭神国常立尊、(垂仁帝御宇より四百八十年を歴て人王二十二代雄略天皇御宇に伊勢国度会郡外官へ遷座)、末社四十座。又天田内村枝平より街道測、西川宮川橋、河守町枝関村、左田川橋、右丹波街道追分を歴て丹波街道国界迄測。河守町居町、右山根に古城跡、右に古城跡、右に右山根に古城跡、右引込淨土宗淨仙寺、右に古城跡、右に舟戸権現の社、公庄村、谷小川土橋三間、日藤村字界川に繋終。それより無測、河守町へ帰着。</p>			特記・天体観測
一二三	一二三		一二七	大図番号	

宿泊日・旧暦		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		特記・天体観測	
16		15		14		13		12			
(6)	昼休	(5)	昼休	(4)		(3)	昼休	(2)			
土師村	多保市村字葉王子	千束村字下千束	菟原下村	下大久保村		橋爪村枝松山町	水呑村	広野村			
同 福知山市	同 福知山市	同 福知山市	同 福知山市	同 京丹波町		同 京丹波町	同 京丹波町	同 京丹波町			
百姓次左衛門 年寄伊藏	百姓与惣兵衛	百姓徳右衛門 勘兵衛	問屋吉左衛門	百姓五一兵衛 儀左衛門		山内理右衛門 中川清兵衛	庄屋金蔵	西村嘉右衛門 西村善七			
渡知山道別手残に向て測。大川又竹田川共(舟福)、左大坂街道追分に繋終。	千束村字下千束出立。同所止宿前より、權現谷川橋、草山村枝寺尾村、寺尾川仮橋、芦淵村字三軒屋、萩原村字稗田、上野川飛石渡、左上野村内古城跡、字大倉山。生野村(名所生野の里なり)、右森中天神の社あり、名所袂ヶ森、土師村字島村、字植松、字段、右砂小池、土師村字王子、右大池、右に曹洞宗大野山善光寺、土師村字島村、字早馬、大川仮堀	新田、千束村字上千束、谷川土橋、字下千束、字(駅場)、止宿前に打止終。	下大久保村出立。同所止宿前より、八田川仮橋、天田郡菟原中村字細野峠、八田川仮橋、菟原下村(駅場)、築瀬川(即八田川。仮橋)、字柏戸、細見辻村字河内ヶ野、細見川仮橋、字下千束、字(駅場)、止宿前打止。	横谷、上大久保村、左引込曹洞宗寿福山寺、境内東雲庵。八田川仮橋、字糺ヶ市、字下千束、字(駅場)、止宿前打止。	下大久保村出立。同所止宿前より、八田川仮橋、天田郡菟原中村字細野峠、八田川仮橋、芦淵村字三軒屋、萩原村字稗田、上野川飛石渡、左上野村内古城跡、字大倉山。生野村(名所生野の里なり)、右森中天神の社あり、名所袂ヶ森、土師村字島村、字植松、字段、右砂小池、土師村字王子、右大池、右に曹洞宗大野山善光寺、土師村字島村、字早馬、大川仮堀	右綾部道追分に打止。	庄屋金蔵	西村嘉右衛門 西村善七	広野村	同 京丹波町	同 京丹波町
山家中町出立。同所止宿前より、坂町、神林川肥後橋、左大手入口(此より山上に大手あり)、和知川船渡。即此所にて(神林川、和知川)落合なり。上原村字打抗、船井郡広野村枝立木、大成川土橋、大簾川仮橋、右京道・左和知道追分打止。此より和知道を引込、広野本村へ着。	山家中町出立。同所止宿前より、坂町、神林川肥後橋、左大手入口(此より山上に大手あり)、和知川船渡。即此所にて(神林川、和知川)落合なり。上原村字打抗、船井郡広野村枝立木、大成川土橋、大簾川仮橋、右京道・左和知道追分打止。此より和知道を引込、広野本村へ着。	山内理右衛門 中川清兵衛	庄屋金蔵	西村嘉右衛門 西村善七	広野村	同 京丹波町	同 京丹波町	同 京丹波町	同 京丹波町	同 京丹波町	同 京丹波町
一一七	一二七	一二七	一二七	一二七	一二六	一二七	一二七	一二七	一二七	一二七	一二七

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測		
					本隊	2月23日*	
(13)	昼休	出雲村	馬路村	(1	
同	亀岡市	同	亀岡市	同	南丹市	同	南丹市
彦六	和佐兵衛	一ノ宮式内出雲神社 神主広瀬伯耆	八木村出立。手分。 伊能他四名、無測、桑田郡千原村、愛宕道・ 部道追分より愛宕道を測、今津村、馬路村、 井川船渡、字三軒屋渡し。字三軒屋を歴て止宿 打上げ、測所迄測る。又字三軒屋より仕越測、 字高畠、右京道追分、出雲村、中村、右牛頭天 王の社あり、一印迄測り此より一ノ宮へ打上、園 村、中村、小口村、江島里村、四ヶ村入会ヤ印 迄測り此より山測所迄測る。又ヤ印より、 神社、當時いう正一位出雲大明神、又中村一印 より愛宕道を測、字楓木坂、字楓木峠、出雲 川、国界を歴て、山城國葛野郡原村、長谷 桃原打止。それより馬路村へ帰宿。	福島嘉平治 八木七郎右衛門	八木村字町	(12)
橋、 字桃原打止。	橋、 字桃原打止。	須知村出立。同所新町止宿前より、字横町、中 町、本町、八田川土橋、本戸村字馬の尾、新 水戸村、小川土橋、字峠、字水戸峠、木崎村字 湧出(左に湧出觀音の堂あり)、右田ノ中に字 白藤の森、字六藏、字皇森、字河原町、右觀音 堂、右丹波但馬・左播磨笠山追分、道中に大槻 木あり(周三間一尺)、此辺名高き大木なり。 船井郡園部町、園部川大橋、左番所、市中入口 上本町四辻(制札前)打止。此より大手打上、 本町大手門迄測る。	園部町本町	22	21	2	
一三三	一二六	一二三	一二三	一二三	一二三	一二三	

諏訪で伊能探訪

—「諏訪の仏さま」に出会う旅のついでに—

室山 孝

二〇二二年十一月十三日、NHKのテレビ番組「日曜美術館」で紹介された「諏訪神仏プロジェクト—諏訪信仰と仏たち—」に魅了され、諏訪への旅を思い立った。それは、神仏習合時代の諏訪大社（上社・下社）それぞれにあった神宮寺が、慶応四年（明治元年、一八六八）の神仏分離により廃寺となつて堂・塔が取り壊され、多くの仏たちは散逸したものの、一部が諏訪湖周辺地域の寺々に保管され、それから一五〇年余り経つたが、二〇年ほど前から始まつた調査で確認された諏訪神宮寺の仏たちを一齊に公開するという企画であった。対象寺院は諏訪地域全域（岡谷市・下諏訪町・諏訪市・茅野市・原村・富士見町）に及び、諏訪市博物館と下諏訪町立諏訪湖博物館では今回のプロジェクトの企画展が行われた。

筆者は一泊二日の日程で、参加する十九力寺のうち諏訪市・茅野市・岡谷市の六力寺と二つの博物館を巡つた。諏訪までは北陸新幹線と篠ノ井線、中央本線を乗り継ぎ、金沢→長野→松本→上諏訪と約三時間半の行程だった。現地ではレンタカーや予約いっぱい（コロナ禍で営業中止の会社があつた）借りられず、やむなくタクシーを利用した（時間制限ながら通常より半額の観光タクシーがあつた）。

諏訪といえば、寅歳・申歳の七年目ごとに諏訪大社上・下両社の宝殿を新築するため行われる「御柱祭」が著名であり、寅歳の昨年はコロナ禍では

あつたが、参加人数を制限し、クレーンなど車両を利用して四月に実施されていた。また、厳冬期に諏訪湖が全面凍結して起くる「御神渡り」も知られるが、温暖化のためか近年は「明けの海」（御神渡りが起こらない状態）が続いていた。

伊能忠敬測量隊は第七次測量（九州第一次測量）の往路、文化六年八月二十七日（一八〇九年十月六日）、総勢一人で江戸を出発、中山道を進んで碓氷峠・和田峠を越え、九月二十四日～二十八日（十一月一日～五日）、下諏訪宿・上諏訪宿に宿泊、諏訪湖周囲と周辺地域を測量し、木曽谷（中山道）を測量しながら南下した。二年後の帰路、名古屋から天竜川沿いの伊那谷を測量しながら北上し、文化八年四月十九日（一八一年六月九日）、上諏訪宿に宿泊、甲州街道から江戸へ帰つている。

今回の旅では、中山道と甲州街道の合流する下諏訪宿が諏訪大社下社に隣接することから、諏訪の仏さまに出会う旅のついでに、ここでの伊能測量隊の足跡を探つてみることにした。「ちょこつと『測量日記』（原文）に、「二十四日、朝大曇天、先後手六ツ前後諏方餅屋出立、（中略）（諏訪神社二社之内、春ノ宮、秋ノ宮、御朱印五百石、神主大祝、神宮寺、但春宮は正月より六月迄鎮座、秋宮は七月より十二月迄鎮坐）七ヶ年目に春宮（秋宮二の内一社造営、下ノ諏方宿迄測、先後手共九ツ前ニ着、本陣岩波太左衛門、（昨夜諏方餅屋止宿へ諏訪因幡守給人代官松田三五左衛門出ル）（下略）」とある。和田峠を過ぎた餅屋（岡谷市）から

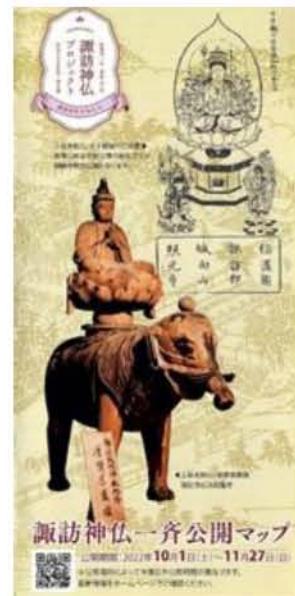
『測量日記』（原文）に、「二十四日、朝大曇天、先後手六ツ前後諏方餅屋出立、（中略）（諏訪神社二社之内、春ノ宮、秋ノ宮、御朱印五百石、神主大祝、神宮寺、但春宮は正月より六月迄鎮座、秋宮は七月より十二月迄鎮坐）七ヶ年目に春宮（秋宮二の内一社造営、下ノ諏方宿迄測、先後手共九ツ前ニ着、本陣岩波太左衛門、（昨夜諏方餅屋止宿へ諏訪因幡守給人代官松田三五左衛門出ル）（下略）」とある。和田峠を過ぎた餅屋（岡谷市）から



『伊能図大全』（河出書房新社）第2巻 118 ページ
(国会図書館の大図による)

下諏訪宿まで測量し、本陣岩波太左衛門方に宿泊した。下諏訪社の春宮・秋宮の説明もあるが、「上社二（本宮・前宮）下社二（春宮・秋宮）」の誤記ではないだろうか。翌二十五日は同所に逗留し、「地図を成、此夜晴天測量」とあって、宿で下図を作成し、天文測量した。

二十六日は「朝晴天、先後手六ツ前後下諏訪方宿出立、後手我等、下河辺、青木、梁田、長藏、同所より初、久保村、富部村、高木村、大和村、下桑原村（同村宇湯脇）を歴て、上諏訪方宿（下諏訪より一里半、実測一里一十一丁卅六間三尺）迄測、幡守居城高（此日自江戸帰着）上諏訪神社参詣」とあり、忠敬ら後手は下諏訪宿から甲府街道を上諏訪宿まで測量し、本陣小平清右衛門方で中食を取つたが、この日、高島城主諏訪因幡守が江戸から帰着、忠敬らは上諏訪神社に参詣した。続いて「後手〔先手力〕坂部、永井、上田、箱田、平助、上諏訪宿より初、下桑原村、上桑原村（枝武津村、本村甲府街道上諏訪神社追分なり）、茅野川を渡、赤沼村（東川）、飯嶋村（中金子村、人家右三四丁）、上金子村（宮川あり）、神宮寺村（即上諏訪神社ノ村）、上諏訪神社前迄測、（御朱印千石、神主大祝、神宮寺、上諏方より本社迄一里二十町也）」とあつて、先手の坂部貞兵衛らは上諏訪宿より上諏訪社本宮前まで測量し、「（中略）それより後手は八ツ後、先手は八ツ前に上諏訪宿（即城下町）帰着、（本陣問屋兼）小平（領主免）清右衛門、此夜晴天測量」と、上諏訪宿本陣に宿泊し天文測量している。



後手は上諏訪宿の「下桑原村の内字湯の脇印杭より初、湖の縁へ測下り、それより湖辺通行道無之付舟測量」とあって、下桑原村湖岸から舟を用い、湖南の有賀村人家外れから湖辺畔道を小坂村まで時計回りに測量。先手の坂部らは下諏訪の富部村地先から湖縁へ測り下り、反時計回りに湖畔道を岡谷村の諏訪湖落口（天竜川の源流）・花岡村を経て小坂村で八ツ半頃後手と合測（諏訪湖周囲、四里二十町三十間）とある）、再び下諏訪宿本陣に泊まつた。

二十八日は天竜川沿いの伊那谷に少し入った新倉村まで測量し下諏訪宿へ戻つたが、この日、本陣には幕府目付遠山左衛門尉（景普、江戸町奉行として著名な「遠山の金さん」こと遠山景元の父）が対馬からの帰路に宿泊していたため、測量隊は「脇本陣丸屋要四郎」に宿泊した。

「伊能大図」（前頁写真）を見ると、湖北に「下諏訪」と「温泉」の文字があり、測量線が「諏訪秋宮」へわずかに入つた所に天測の☆マークがある。天測ポイントは秋宮の境内なのであろう。しかし湖東には「上諏方」と「温泉」の文字はあるが、★マークがない（アメリカ議会図書館の伊能大図にはあるとの玉造功会員のご教示があるので、

写し漏れであろう）。上諏訪の高嶋に「諏訪因幡守居城」が描かれており（現在は城跡のみ）、上諏訪宿はその城下町であった（今回、上諏訪宿探訪の時間はなかつた）。甲府街道の「上桑原村」から分かれで南方の「上諏訪宮」まで測量線があり、上諏訪神社隣の「神宮寺村」山手には、よく見ると寺の塔が描かれている。測量隊は上諏訪社神宮寺の五重塔を確かに見たのである。

さて、旅の一日目はあいにくの雨であつたが、諏訪市の三才寺と茅野市の一心寺を巡り、また二つの博物館の企画展を見た。

上社の近くにある諏訪市博物館では、一階会場に展示された「諏訪社遊楽図屏風」（六曲一雙、個人蔵）が江戸前期の上社・下社における参詣者の賑わいを描いた参詣曼荼羅（狩野派絵師の作）であり、非常に興味深いものであつた。下社の隻を見ると、秋宮の隣の扇面に下諏訪宿が描かれ、細部のポイントを説明したキャプションによると、宿場の中心にある湯屋は下諏訪の源泉という「綿之湯」であり、その奥の建物が下諏訪宿本陣となつた。問屋を兼ねて元禄初年から岩波氏が勤めたともあり、文化六年伊能測量隊の宿所と思われ、「伊能探訪」の手掛けりが得られたと筆者のテンションも上がつた。

二階会場には上社本宮と神宮寺の再現ジオラマ、また仏像・仏具等が展示され、「日曜美術館」で最初に紹介された上社五重塔の本尊五智如来坐像（大日・阿閦・宝生・無量寿・不空成就の五如来、萬福寺蔵）が、塔内の配置を再現して置かれている。

二十七日は諏訪湖周囲の測量にかかり、忠敬ら

は、上社普賢堂の本尊（上社諏訪大明神の本地仏）であつた普賢菩薩騎象像（公開マップ表紙の写真、女性救済の仏と言う）と左目を削られた文殊菩薩騎獅像（普賢菩薩と二尊で祀られていたらしい）が本堂右手奥にある普賢堂に安置されていた。これらは、神仏分離の際、村人が土蔵に隠して破損を逃れたという。また上社如法院の本尊であつた普賢菩薩騎象像と清涼大師（弘法大師）坐像などもあり、ここでは二体もの普賢菩薩騎象像を見ることができた。

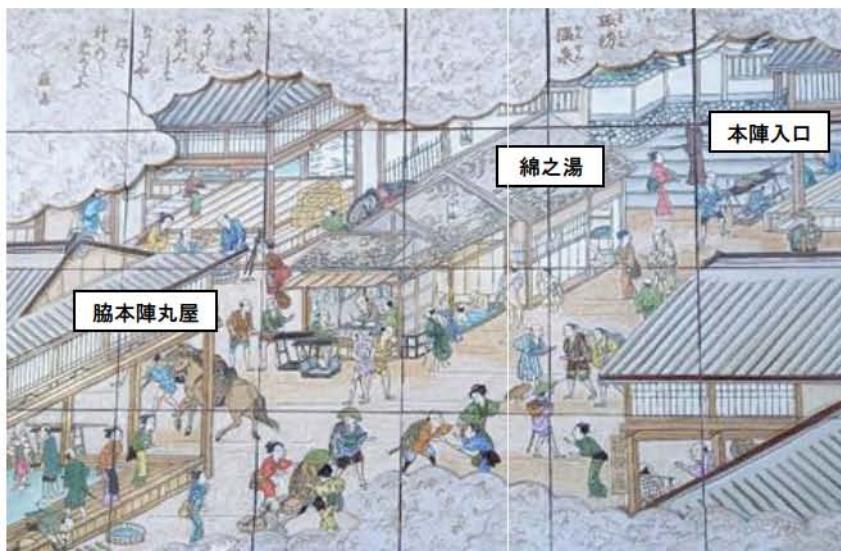
下諏訪町の湖岸にある諏訪湖博物館では、下社神宮寺の木版絵図（版木は岡谷市照光寺蔵）と、長年の調査により明らかになつた、現在の下社秋宮の東方に広がる神宮寺の伽藍配置図がパネルで展示されていた。仏像としては、下社春宮にあつた観照寺薬師堂由来の本地仏金銅薬師如来像（鎌倉期、宝光院蔵）が古風なたずまいを示していた。また、下社神宮寺最後の住職家末裔である神山家に伝わる、厨子に納められた十一面觀音立像及び両脇侍（毘沙門天・不動明王）立像（江戸前期一六八〇年代の制作）は、高さ15cm程と小ぶりながら精緻な彫刻で、二日目に見た照光寺の秘仏千手觀音立像（諏訪下社秋宮の本地仏）及び両方脇侍像とそつくりであった。「日曜美術館」では、制作された時期に災害が起り、それが本地仏の様式で制作された動機ではないかと解説されていた。ほかに神山家伝来の東照大権現坐像（徳川家康像）や、発掘された礫石経（石に経文を墨書きしたもの）も再現展示されていた。

天気が回復した二日目は、下社秋宮に参拝後、まず下諏訪宿本陣岩波家まで行つたが、ここは今

でも岩波家の住宅であり、前日までに予約しないと見学出来ず、門は閉じられていた。「本陣宿」の標示板と「皇女和宮宿所」の案内板、「明治天皇行在所」の石柱が立てられた門前を撮影し、近くの「綿之湯」跡地へ行つた。ここは月極駐車場を兼ねた広場になつており、奥に浮世絵風の「諏訪温泉」を描いた陶板画（写真）が設置されていた。

照光寺は下社神宮寺の末寺という由緒があり、下社秋宮の千手堂（諏訪大明神の本地堂）にあつた千手觀音立像及び両脇侍立像（毘沙門天・不動明王）が一つの厨子に納められ、六〇年に一度のご開帳という秘仏であったが、今回は本堂で特別公開されていた。このことについてご住職は「日曜美術館」で、この仏さまが誰のものかを考えたとき、寺のものというより、地域の人々のものであることに鑑みて今回公開することにしました」と語つておられた。ただし秘仏のため写真撮影は許されず、『諏訪神仏一斉公開マップ』表紙にも木版の御印影（本像は立像であったが、御印影は坐像のみ印刷されていた（日曜美術館）では本像を放映）。高さ12cm程と小さいながら、近くでよく見ると衣紋に嵌金を用い、精緻に彫刻された美しい仏像で、製作時期は平安末期あるいはその時期の様式を模した室町期のものか、まだ評価は定まつていないと『公式ガイドブック』にはあつた。この仏さまが諏訪で拝観した中で一番印象に残つた。また下社神宮寺三重塔の本尊であつた胎蔵界大日如来坐像（戦国期明応三年銘、慶派仏師康忠の作）、仁王門にあつた二体の仁王像（中世作、建物も移築されたが老朽化で失われたという）などもあり、充実した時間を過ごすことができた。

ただ、この陶板画や前日見た「諏訪社遊楽図屏風」に描かれた「綿之湯」と本陣との位置関係が、現在の「綿之湯」跡地と岩波家の位置関係と異なる



「綿之湯」跡地の陶板画

があり、一時廃れたものの一八世紀に復興された。

神仏分離の際、春宮の觀照寺と秋宮の三精寺から多くの仏像を引き取り、現在二体が阿弥陀堂と日限地藏堂に安置されており、神宮寺仏の宝庫であつた。特に三精寺阿弥陀堂の本尊であつた阿弥陀如来坐像（鎌倉期慶派の作）は、等身大の堂々たるたたずまいを見せ、また、秋宮三精寺の本尊という十一面觀音立像は一木造で古仏を思わせるが室町・江戸初期の作といい、印象に残つた。日限地藏堂に安置され「おひぎりさま」として地域住人の信仰を集め地蔵菩薩像も秋宮三精寺から移されたもので、六年に一度ご開帳の秘仏となつており（次は二〇二七年）、今回はお前立ちのみの公開であった。また春宮觀照寺の本尊薬師如来の脇侍と伝える日光・月光菩薩立像（江戸初期）、豊かな彩色が残る十二神将像（台座に江戸中期宝暦五年銘）もここで公開されていた。



本陣岩波家の門前



かつての脇本陣「御宿まるや」

脇侍と伝える日光・月光菩薩立像（江戸初期）、豊かな彩色が残る十二神将像（台座に江戸中期宝暦五年銘）もここで公開されていた。

下諏訪町へもどり、本陣宿や先ほどの疑問を調べるために、宿場町のほぼ中心にある宿場街道資料館へ行き、タクシーを降りた。ここは宿場民家（二階屋）の特色を活かした施設で、町立諏訪湖博物館の分館になっていた。係りの方は大学の研究者らしい方々の応接中のため、自由に見て下さいとのことで二階の展示室に上がると、下諏訪宿と温泉関係資料を展示する部屋の一画に、伊能忠敬測量隊のコーナーがあった。「測量日記」と「伊能図」等（写真と複写）が展示され、本陣岩波家と脇本陣丸屋のことも示されていた。下諏訪町では伊能測量隊について案内板こそ建てられてはいないが、よく知られているようであった。

本陣岩波家は文久二年（一八六二）十一月、将軍徳川家茂に嫁ぐため中山道を通った皇女和宮が宿泊した宿として地域では著名であり、和宮関係資料の展示には力がこもっていた。現在公開され

ている本陣宿の遺構は、和宮が泊まつた部屋を含む一画と庭園、土蔵、それに表門のみであること判つた。かつての本陣宿は敷地が秋宮に隣接するほど広かつたが、近代に入つて敷地・建物は縮小され、元は「綿之湯」の奥にあつた表門が街道に面する現在地に移築されたこともわかり、筆者の疑問は氷解した。

「綿之湯」跡地に設置された陶板画の基になつたのは、文化二年（一八〇五）京都で刊行された『木曽路名所図会』（四）にある「諏訪温泉」であることも展示でわかつた。係りの方の話では、元本にはない彩色が施されて陶板画が作成されたとのことであつた。

多くの「諏訪の仏さま」に出会い、忠敬さんの足跡の一端に触れ、また湖畔の温泉にも宿泊でき充実の二日間であつた。上諏訪駅に戻つてホーム脇に設置された諏訪温泉の「足湯」を最後に楽しみ、特急「あづさ」に乗つて帰途についた。

※なお、「測量日記」と「伊能図」について、玉造功会員のご教示に感謝申し上げます。

【参考文献】

- ・『伊能忠敬 日本列島を測る 前編—忠敬没後二〇〇年』伊能忠敬研究会、二〇一八年
- ・『諏訪神仏一斉公開マップ』大昔調査会、二〇一二年
- ・『諏訪神仏プロジェクト公式ガイドブック—諏訪信仰と仏たち』地域商社 SUMA 株式会社、二〇二二年
- ・『写真集「諏訪社遊樂図屏風」』諏訪市博物館、二〇〇一年初版、二〇二二年3刷

『星学手簡』に見る球面三角形の計算

菱山 剛秀

はじめに

伊能図の投影法については、すでに多くの論文や報告があり、地図に描かれている経緯線に課題があることが指摘されている。

当時の日本国内では球面を平面に描くための地図投影の理論が伝わっておらず、古来からの地表面を平面とみなし、東西南北の距離を直交座標で描く方法が一般的であった。

一方、高橋至時や間重富等は、球面である地球表面をどのようにして平面である地図に描くかを検討していたことが、『星学手簡』所収の享和三年の高橋至時から間重富あての手紙からわかる。その具体的な方法については、大谷亮吉の「伊能忠敬」にも『星学手簡』の翻刻や説明図が掲載されているが、これだけでは、なかなか理解できそうもないでの、描かれていた図を基に計算を再現してみた。

なお、この書簡には、地図上の経緯線を描くために南北（経線）方向（図1）と東西（緯線）方向（図3）の距離を計算する方法が記されている。

南北方向の計算

書簡では、図1を次のように説明している。

さて、仮に、数を設け、試し候ところ、左のごとし。たとえば、人、甲に居て丁の遠山を正西[※]に視る。甲の地、北極高[※]三十五度とす。甲、丁ふたところ、東西経度の差五度とす。この三数をもつ

て丁地の北極出地を求む。

丙甲辺甲地北極は五十五度ある 正切一四二八一五
丙角_{兩地經}度差は五度ある 余弦〇九九六一九

丙甲丁は、極を含む「正弧三角形」
・丙甲の辺長（北極距天頂）は55度
・丙角（甲丁の経度差）は5度
・甲角（丙甲丁の角度）は90度
となり、以上の条件から丙丁辺、すなわち丁地における北極出地度を求める計算である。

なお、半径1の球面三角形は、3つの要素が分かれれば他の要素を計算できる
丙甲正切
丙丁正切一四三三六一
丙甲余弦
丙丁余弦

丙甲辺五十五度〇六分小余十六を得る
一度六十
丙甲正切
丙丁正切一四三三六一
丙甲余弦
丙丁余弦

丙甲辺甲地北極は五十五度ある
正切一四二八一五
丙角_{兩地經}度差は五度ある 余弦〇九九六一九

甲角が直角という条件から、この三角形は、直角球面三角形（図2）の計算式が適用でき、計算式①から計算式②、計算式③から計算式④が導き出される。

甲角が直角という条件から、この三角形は、直角球面三角形（図2）の計算式が適用でき、計算式①から計算式②、計算式③から計算式④が導き出される。

※「正西」は、真西のこと。南北に対し直角の方向。
※「北極高」は、赤緯（緯度）のこと。
※「北極距天頂」は北極からの角度。緯度との関係では余緯度（90度-緯度）に当たる。

※「正弧三角形」は、三角形の頂点に直角を含む「球面三角形」こと。

※図1の甲乙は小円、甲丁は大円を示すと思われる。

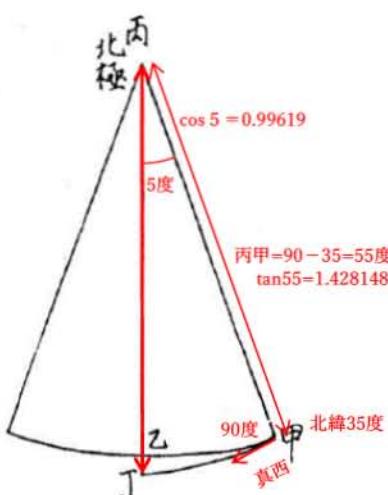


図1 経線長の計算

書簡では、計算手順が次のように記されている。

直角球面三角形の角と辺の関係

$$\cos B = \frac{\tan a}{\tan c} \quad \text{計算式①}$$

$$\tan c = \frac{\tan a}{\cos B} \quad \text{計算式②}$$

$$\tan B = \frac{\tan b}{\sin a} \quad \text{計算式③}$$

$$\tan b = \tan B \sin a \quad \text{計算式④}$$

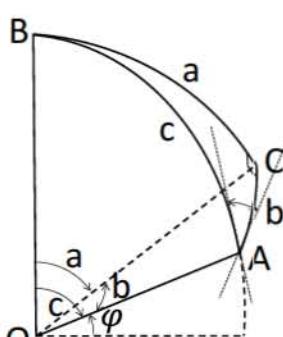


図2 球面三角形

A, B, C : 球面三角形の角
a, b, c : 球面三角形の辺
φ : 緯度

各地のニュース

北海道福島町 銅像学習会

中塚 徹朗

2018年春、没後200年を記念して第一次蝦夷地測量開始地点である福島町吉岡の地に伊能忠敬翁銅像が建立された。以来、銅像に親しむ地域の子ども達による学習会が何度も開催されている。特に、隣町である松前町からは、2020～22年の3年間毎年、バスに乗って小中学生が来てくれる。理由は、もちろん忠敬が教科書で学ぶ歴史的人物だからということだが、それよりも松前町校長会会長の岩井栄一さんが、地図の研究者で伊能忠敬翁をこよなく愛する方だからということが理由だ。

吉岡に銅像ができる時から心に温めていた企画であること。伊能研究会会員である私は、その思いに応えるべく地元福島町教育委員会の鈴木志穂学芸員と講師を担当させていただいた。コスプレで江戸時代にタイムスリップしていくだけるような姿で解説させていただいた。

学習会では、以下の説明に心掛けた。忠敬はなぜ蝦夷地を測量しに来たのか。北海道測量の経路について。

(写真・新聞記事は松前町立松城小・大島小・松前町立松前中の皆さん)

「測量日記」など多くの国宝に数多く記されていること。町のどこで伊能測量がなされたかを身近に感じてもらうことなど。一通り学習が終わるとクイズ形式で生徒の皆さんに伊能測量のおさらいをしてもらつた。いつも会が終わる度に様々な反響があるなかで、今年参加した松前町立大島小学校6年の阿部心映さんは「69センチの歩幅を保ったまま測って、あんなに正確な地図を完成させたなんすごい。もっと調べたくなった」とうれしい感想を述べてくれた。(朝日新聞阿部浩明記者の取材記事より)

このように忠敬翁銅像に見守られての青空学習は伊能研会員の私にとってやりがいのある機会となつた。来年もこの銅像学習会が開催される予定でとても楽しみだ。

朝日新聞デジタル (2022/12/15)
歩幅 69 センチで日本地図完成
児童ら伊能忠敬学ぶ

日本全土の実測地図づくりに尽くした江戸時代の測量家、伊能忠敬について学ぼうと、北海道松前町立大島小の6年生3人が12日、北海道の測量をスタートした福島町でさまざまな資料や計測器具を見学した。

忠敬は、函館や釧路を経て北方領土に臨む別海町まで数千キロを往復し、松前町で測量を終えた。福島町史研究会の中塚徹朗会長らが、杖の先に羅針盤を取りつけた測量器具や、緯度を知るために星を観測した天測器具などを紹介しながら、忠敬の功績を解説。国宝の資料に、自分たちの町名が記載されていることを知り、子どもたちは「本当に来たんだね」と感心していた。

歴史の授業で江戸時代を学習中という阿部心映(ここあ)さん(12)は「69センチの歩幅を保ったまま測って、あんなに正確な地図を完成させたなんてすごい。もっと調べたくなった」と話した。(阿部浩明)



天測器具や測量法について解説を聞く児童たち
2022年12月14日、北海道福島町(阿部浩明撮影)

松前町の小中学生との伊能学習会風景 (撮影:森 征人氏)



2021年6月 松前中学校 2021年6月 松前中学校



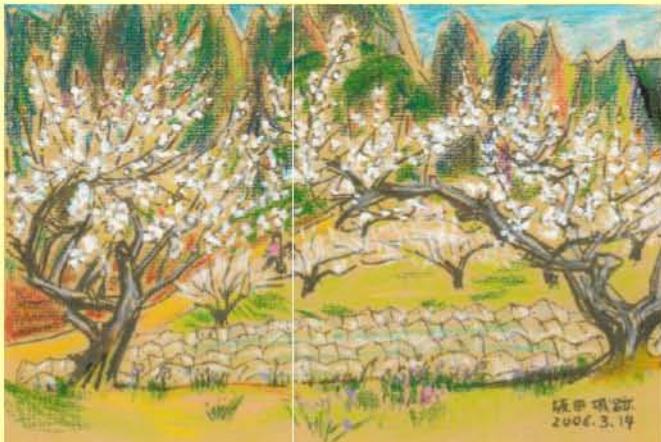
2020年10月 松城小学校 2022年10月 松城小学校

会員だより

山武のスケッチ（一）

坂田城址（千葉県山武郡横芝光町）

千葉県山武市 江口 俊子



小堤村（現、山武郡横芝光町小堤）の実家に戻った。三治郎は10歳まで小関家で生活し、その後神保家に引き取られた。宝暦12年（1762）17歳の時に、下総国佐原村の伊能家の婿養子となつて山武の地を離れていく。

私は忠敬さんゆかりのこの地に住み、四季折々の景色や年中行事、人々の生活の営みを描いてきた。今回は、父の実家の本家にあたる神保家が城代家老を勤めていた坂田城址（山武郡横芝光町坂田）の梅林の絵である。ここは県下最大級の梅林で、2～3月に約千本の巨木が純白の花を咲かせる。観賞用ではなく、農家の方が梅の出荷用に栽培しているのだそうだ。梅の木々の間に野菜用のトンネルハウスがあり、農家の人が出入りしていた。この会誌が届くころは、辺り一面梅花の香りに包まれていることだろう。（江口俊子）

※千葉県山武郡は、明治30年（1897）4月1日、郡制の施行により、山辺郡と武射郡が合併して発足した合併地名であり、現在は九十九里町・芝山町・横芝光町の三町からなる。

忠敬さんは、上総国山辺郡小関村（現、山武郡九十九里町小関）の名主であり、いわし漁の網元をしていた小関家の二男（幼名 三治郎）として延享2年（1745）に生まれた。父は旧姓神保で、小関家に婿入りしたが、三治郎少年が6歳のときに妻が亡くなり、兄・姉を連れて武射郡

たつて連載していただいた。

坂田城は上総・下総の国境に位置し、15世紀中頃、下総千葉氏により築かれ

た。戦国末期の城主井田因幡守胤徳は、佐倉城の千葉家に仕えるとともに、小田原の後北条氏の有力武将として活躍

した。その城代家老だった神保氏は、小田原落城後帰農し、当時は名主であった。

忠敬を詠ふ（三）

東京都 伊能 洋

富岡八幡宮

深川の忠敬像に初詣

シリウスや忠敬測りし光なる

伊能図の冬の海踏む百歩かな

—『ことばの広場2』より—

粘り強く正確な測量が人々を動かしやがて幕府直轄の事業になつた現在においてもこの偉業は国の宝だそして関係資料2345点が国宝になつた

日本沿岸を4万3千7百km測量した214枚の地図にした

日本を守るために日本国土の形が知りたいと思った人がいた

地球一周の距離を3万8千kmと割り出した

地球の大きさは

岡山県 水田 清志



瀬戸内市の現代詩
ことばの広場2

※この詩集は、岡山県瀬戸内市立図書館のボランティア団体「瀬戸内市立図書館友の会」が公募して作成しました。

江戸時代の後期 地球の大きさを知りたいと思つた人がいたが、江戸から蝦夷まで歩きながら距離を測り

67号から76号まで「山武歳時記」というタイトルで、忠敬が幼少年期を過ごした山武の四季や年中行事を8回にわ

新人会員自己紹介

茨城県 丹羽 俊一



間宮林蔵像(間宮林蔵記念館)

茨城県つくば市にある国土地理院に勤務し、七年ほど前に退職。現在は隣のつくばみらい市に住んでいます。伊能忠敬さんを知ったのはいつのことか記憶にはありませんが、国土地理院に勤めたことと関わりがあるかもしれません。次第に書物や井上ひさし氏の小説、テレビの番組や最近では映画「大河への道」などで知識を深め、伊能忠敬に対する尊敬の念を深めました。

一方、つくばみらい市は伊能忠敬と関わりのある間宮林蔵の出生地であります。間宮林蔵(写真の像)の持つた、と言つても近くにたまたま住んだということと地図に関心があつたということだけですが、改めて伊能忠敬という人を見直した次第です。

私は特に研究者ということではありませんが、この三人の先輩方を導いたりましたが、この三人の先輩方を導いたりすることと地図に改めて関心を持つた、知識を広く求め、深めていきました。

さらにもう一人、最近話題(地元だけかもしれない)になっている長久保赤水も茨城県の県北の出身です。赤水についてはまだあまり詳しくは知りませんが、全国の国絵図などを集成して日本全図を作成したことと、その地図に経線を入れたことぐらいで最も重要視してはいませんでした。でも、同時代的に世間に普及した地図の関係者としては三人の中では最も有名だったと思われます。

私は25年間ドイツで暮らし、2021年夏に家族と共に日本へ帰国しました。



神奈川県 宮田 幸枝

ロン博物館（16～19世紀の測定器である時計、温度計、天体望遠鏡、馬車用オドメーターの展示。地図や地球儀、天球儀の展示）のガイド資格を取得して博物館の案内などもしております。その中でとても興味を持ったのが、地図を作るための測量でもあります。

遠いドイツでは日本でのタイムリーな展示会へ行くことも叶わず、文献も中々取り寄せられませんでした。それでもずっと日本の天文方や鎖国中で独自の観測をしていた学者やその測定器類を作っていた職人についてもっと知りたいという希望をもつておりました。

そのような課程から、驚異的な正確さの日本地図を作った伊能忠敬先生（いつも「さん」と呼んでおりましたが、先生の方が正しかと思われます。）の偉業に感心し、その情熱にはいつも感心させられております。伊能先生ファンの私はもっと詳しく知りたく、専門家の方達のお話を聞いたり、文献なども拝見させていただきたく、こちらの研究会に入会させていただいた次第です。

手仕事と機械式時計関連が仕事の中心でもありました。元々個人的に機械式のモノや歴史、それを作った人にとっても興味があります。グラスヒュッテ時計博物館、数学物理サ

お知らせ

事務局

議題 令和4年度事業報告、会計報告

令和5年度事業計画、予算案

その他

令和5年度「総会」の開催
令和5年度伊能忠敬研究会総会を左記により開催します。会員の皆様のご出席をお願いします。

記

日時 令和5年5月27日（土）

13時～（受付開始12時30分）

会場 富岡八幡宮 婚儀殿会議室

（交通）地下鉄東西線・大江戸線

「門前仲町駅」下車

住所 東京都江東区富岡1-20-3

電話 03-3642-1315

<http://www.tomiokahachimangu.or.jp>



令和5年度

年会費納入のお願い

今号には令和5年度会費「払込取扱票」を同封しました。皆様には左記により会費の納入をお願いします。

令和5年度会費 5000円

振込先 ゆうちょ銀行振替口座

加入者名 伊能忠敬研究会

口座番号 00150-6-0728610

会費の未納分がある会員には未納年度を記入した振込用紙を同封させていただきました。年度が変わりますので早めに納入をお願いします。

会費納入状況がご不明の方は、事務局までお問い合わせください。

事務局へのお問い合わせは、なるべく左記の電子メールをご利用頂きますようお願いします。

〔伊能忠敬研究会事務局〕

E-mail : mail@inoh-ken.org

会員交流ページ

会員の皆さん、忠敬さんちなんだ

短歌、俳句、川柳、エッセイ、近況報

告など、気軽にご投稿ください。

新入会員だけでなく、古参会員の

方も近況報告、自己紹介をお待ちし

ています。

・投稿先（電子メール添付の場合）

kaiho@inoh-ken.org

（手書きの場合）H-153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図

センター2F 伊能忠敬研究会事務局

電話 093-592-9082

北九州市小倉北区室町1-1-1
リバーウォーク北九州14F

ゼンリン・ミュージアム

常設展「伊能図の出現と近代日本」

シーボルト著『日本』所収「蝦夷」と日

本領千島絵図」やペリーが日本遠征

に際して利用した「日本列島図」など、

伊能図に基づく地図を紹介する。

期間 常設展示

展示施設情報

伊能忠敬記念館

第112回収蔵品展

「国宝伊能忠敬関係資料の世界」

館蔵の国宝「伊能忠敬関係資料」の実

物を展示してその奥深い世界を紹介

する。地図や絵図のほか、旧伊能淳家

所蔵の文書類（未指定）も展示する。

期間 令和5年1月17日～3月12日

【同時開催】

「伊能家のおひなさま、

佐原のおひなさま」

3月3日の桃の節句にあわせて伊能

家や佐原のひな人形を紹介する。

期間 開催中～令和5年3月12日

千葉県香取市佐原イ1722番地1

電話 0478-54-1118

※「伊能忠敬記念館」の最新展示情報は、ホームページに掲載しています。



伊能記念碑(手前) ゼンリン社(左) 常盤橋(右)

『伊能忠敬研究』投稿要領

①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字（704字×三段または480字×四段）です。長い原稿の場合は連載として分割していただきたいこともあります。

②原稿のかたち

・本文（テキスト） 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

＊印刷サイズが100mm×75mmで350ppiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラやスマートフォンによって5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありません。

デジタルカメラのデータ仕様がわからない場合は、L判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキャナで撮った電子ファイル（JPEG形式またはTIFF形式）にしてください。

③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものをお送りください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷上り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくはホームページ <http://www.inoh-ken.org/> を参照）

送り先

・電子メール添付の場合 kaiho@inoh-ken.org
・郵送の場合 [〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階](tel:03-30042)

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。

・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持つて会誌及びホームページ掲載の許可を取つておいてください。

・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。

・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があつた場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。

・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとつておいてください。本誌に掲載された記事の著作権は、伊能忠敬研究会に帰属することとします。

・他誌等へ転載する場合は、事務局に連絡して許可をとつてください。

次号（第100号）は2023年6月発行、
原稿締切は4月30日 です。

伊能忠敬研究会入会の御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行つております。

①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等

入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、伊能忠敬研究会事務局所在地・連絡先等

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2F

事務局メール mail@inoh-ken.org

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七一八六一〇

ホームページ <http://www.inoh-ken.org/>

編集後記 ◇お気づきの方もいると思うが、本誌の表紙は96号から本誌の号数と同じ整理番号の伊能大図を使用している。◇今号の大図99号は、過去に本誌76号と94号でも使用した大図99号の相模国範囲である。◇したがつて過去の解説と重複する箇所もあるが、ご容赦いただきたい。◇本誌の表紙に伊能図が使われはじめたのは、本誌のタイトルが「伊能図探求」から「伊能忠敬研究」に変わってからである。◇また、表紙がカラ－になつたのは、本誌62号から、ページサイズがB5判からA4判になつたのが70号からである。◇表紙のカラー化に伴い、各ページもカラー化され、大判化されることで、モノクロでしか見られなかつた伊能図が、色彩豊かにかつ詳細に確認できるようになった。

◇次号はいよいよ100号。◇記念号でもあるので、表紙も富士山が描かれた大図100号を使用しようと思っている。◇国会図書館所蔵の大図100号は、絵画として見ても美しい富士山が描かれているので楽しみにしていただきたい。H